
異世界に迷い込んだ超戦士

黒紅茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に迷い込んだ超戦士

【Nコード】

N42450

【作者名】

黒紅茶

【あらすじ】

数々の激闘を繰り広げて、遂に悟飯は悪の銀河戦士を倒す。しかし、突如次元に呑み込まれて…。これはドラゴンボールと魔法少女リリカルなのはのクロスオーバーです。苦手な方は「戻る」をクリックしてください。

プロローグ

天候が荒れ狂う中、一人の金色の炎を纏った金髪の少年と緑色の炎を纏った筋肉質の男が地上で鋭い眼光を互いに浴びせながら其処にいた。

この二名はお互いに常識を超えたダメージを負っているのだ、少年は額から血液を流し、反して男は腹が裂かれており穴が空いて中身が見えている状態だ。

それにも関わらず男は倒れることなく、更に少年に向ける殺意を増幅させるかのように自分が身に纏う禍々しい緑の炎の輝きが増しておぞましい姿へと成り果てていくのだった。

「く…くそっ！このオレがお前のようなガキに…！」

恐ろしい眼光を少年に向ける男は口から血液を吐く、腹が裂かれている事は男にとっては余裕を崩し悔しさが滲み出てくるほどであった。

だがそれ以上に超える感情に支配されているのが少年だ。ただ身に溢れ出てくる激しい怒りが激痛を忘れさせ金色の炎が煌く。

「そして…そして…ボクに甘えるなって言ってた…！！」

「うおおおおおおおおおー！！！！」

正と死の狭間の中、男の雄叫びと共に少年は絶叫を上げながら両手

に凄まじい青い光が収束していく、強烈な光は少年の全身を纏っている黄金の光に負けないほどの凄まじい力が込められているように見えた。

一方、男は焦りや悔しさ、負の感情が生まれながらも両手を大きく広げた手に緑色の光が凝縮されていく、少年と反したまるで闇その物のような塊が生まれてくる。

やがて両者、二つの強力な光を同時に発射させると地面に凄まじい亀裂と傷跡を残していきながら互いに正面衝突を引き起こす。

大規模な爆発が一方的に乱暴な暴力を振るいながら、そのど真ん中、爆発の海へと二人は直進していき、両者は互いにすれ違う。

高威力を誇る爆発はもはやこの空間がその威力を受け止め、耐え切れられる程の半端な威力ではなかった。両者の衝突はあまりの強烈な力により存在自体が空間を歪ませるのだ。

今彼等のいる、この世界は二人の存在や力の重圧に押し潰されそうになっている。空は激しく唸る雷が落とされ、世界を消滅させる勢いで広がっていく全てを破壊する爆発。

しかし二人はそんな事に気をかけていられるほど余裕など持っていなかった、先程の怪我による流血する程の激しい痛みが全身から襲い掛かってくる。

怒りや焦りや悔しさなどのあらゆる感情が両者を支配していく中で全身の損傷は頭に入ってこない。故に周りを考えさせてくれるほどの理性は微塵も残っていないのだ。

「ハアッ、ハアッ、ハアッ……。」

全ての力を出し切った少年は、激しい息切れに襲われていた。額の強烈な痛みと血液を吐いた事による気持ち悪さと自身を飲み込む程の強すぎる怒り、それらが容赦なく全てが襲い掛かっている中で、少年は余裕とも言うべき体力が残っているのだ。

だが全てのパワーを光に込めた少年はもう体力が殆ど残っていない、故に少年の輝く黄金の光は消滅してしまう。金色の髪が黒色の髪に変化すると、その場へ地面にゆっくりと倒れてしまう。

互いに衝突し合っていた強大な力も消え去り、ただ残っているのは戦いの傷跡だ。天変地異でも起きたように彼等が戦っていた場所は大きな被害を被っていた。

だが其処には少年と地面が破壊された傷跡だけが残っており、戦っていたはずの男の姿は消えてしまったかのように見える。恐らく少年の出した光により消滅したのだろう。

「……………」

——だが、世界は彼等によって受けた損傷は傷つけた本人の想像を上回るほど大きかった。それはあの世とこの世を繋げ数々の別世界へのゲートを開いてしまうキツカケを生み出す事になる。

強引に数多の世界をこじ開けていき、存在する数多くの世界が入り乱れながら大地を侵略していく。その光景は現実が崩れ去ったこの世の物とは思えない空間が広がっていたのだ。

それにも気づくことはなく気絶から一向に目を覚ます気配はない。そして今、少年——「孫悟飯」の新しい物語が始まるうとしていた。

プロローグ（後書き）

つい勢いで書いてしまった…。はい、序盤は物語にはあまり絡まず、日常生活を中心としていく予定です。果たして異世界に迷い込んだ悟飯の運命は…！

第1話 金髪の少女と黒髪の少年

悟飯の視界に入り込んできたのは真っ暗な空間。ただ闇だけが視界に広がっており、音も何も響かずに体の感触も何も感じられない。ただ漆黒に包まれた無の空間のように感じられる。

何もないこの世界にいる中、不意に耳に入り込んできたのは何か声のような今にも消えてしまいそうな微かな声が聞こえた気がした。あまりにも小さくてよく聞き取れない。

その声の正体は時間が経つにつれて声自体が大きくなっていき聞き取りやすくなっていく感覚を悟飯は味わう。何を言っているのかも少しずつわかってきた。

——低い声だった、恐らく男の声なのだろう。金がなんとか、と言っているように悟飯は聞き取れば突然ひんやりとした冷たい感触が身体から伝わってくるような感覚を覚える。

まるで自分の身体に持つ感覚と脳がリンクしたような言葉では言い表せないような奇妙な感覚。それを味わっている間にも静かに彼は目を開けたのだ。

「いいか、金を用意しないと娘の命はねえからな!!」

「ん……。此処は……うつ!」

目が覚めた悟飯はすぐに今の状況を理解することができた。薄暗く外の光が入ってこない部屋に自分はいるのだということがわかり、先程の冷たい感覚はこの部屋の床からくるものだった。

つまり自分はさっきまでこの床に倒れていたという事になる。何や

らさつきまでいた場所とは違うような気がしてならない、まだ夢にいるんじゃないかと錯覚も覚えるがああ冷たい感覚は現実であるという証拠だった。

「おい、少しだけ痛い目に合わせてその写真を送りつければ金額も増えるんじゃないか？」

耳に聞こえてくるは物騒な言葉の数々だ、金やら痛い目やら——聞いているだけで不愉快にさせてくれる声と言葉。悟飯は思わず不快な気持ちの表れとして眉を顰める。

話の内容を聞いているとその声の主は複数いる事がわかり、しかもその複数というのは一人や二人ではない、三人、四人ぐらいの数はいるのではないかと悟飯は推測していた。

「なるほど。そうすれば奴さんも必至になって多額の大金を出してくるかもしれないぜ。」

悪意に満ち溢れた声と共に意図的に人の気持ちを利用しようとする言葉の連呼。悟飯は身体の痛みを我慢しながらも男の声が聞こえる部屋へと目を向ける。

結果、目が行き着いたのは隣の部屋だ。建物全体が古臭く荒れ果てており、まるで廃墟場を連想させるようなビルにいるような気がした。

「んー、んー。」

（あの女の子は黒服の人達に誘拐されたのか…。）

長い金色の髪が腰にまで届いているほどで緑色の瞳を持った小さな少女は身体を縛る紐により身動きが取れないように見える。更に口が布により塞がれているせいで上手く言葉を出せないようだ。

その少女の周りには取り囲むようにいる複数の男達——黒い服を着込み、表情はサングラスをかけていて見えない。悟飯はすぐに理解する、あの少女の親に娘を人質に取る事でお金を請求するつもりだという事に。

「おー、怖い怖い。とりあえず、数発殴れば大人しくなるだろう。」

「あ、顔は止めておけよ。やるなら腹にしておけ」

（くっ、なんでこんな酷い事を…。）

男の一人が前に出た。笑みを浮かべて罪悪感の欠片もなく少女を見下ろしている。その光景に悟飯は更に表情を歪めて怒りという感情がこみ上げていた。

「そういうわけだから、俺達の為にお嬢ちゃんには痛い目にあってもらうぜ。」

男は腕を振り上げ、固い拳を少女の腹へと打ちつけようとするその

間に。

「——やめろっ!!」

もはや悟飯の怒りはピークに達していたのだ、彼の優しさが余計に怒りを増幅させ自分の身体を動かす動機の一つとなり、男の拳を受け止めていた。

それも一瞬の間に、隣の部屋へ移行して少女の目の前に立ち、手を開き拳の動きを見て受け止めるといふ動作を一秒経っているかどうかすら怪しい時間内に全てが完了していたのだ。

体格も大きく明らかに力のある大人の拳を小さく幼い少年がその拳を掴むように受け止めている光景は非現実的な場面とも言える。ただ悟飯自身は少女を殴ろうとする行為に怒りを感じていた。

「なんだ、このガキは……。」

「何処から入ってきたのか知らねえが、邪魔するなら死んでもらうぜ。」

「ま、どっちにしる此処に来た時点で死ぬ運命だけだな。」

「——くたばれっ!!」

だが悟飯の行動は一気にその場にいる男の視線を集めてしまう事になった、冷酷で冷たい視線だがそれにも負けず悟飯は睨みつける、恐怖に怯えた様子も逃げる動作もしない。

一人の男は持っていた銃を懷から取り出し片手に装備すればそのまま少年に銃口を向けた、この動作をするだけでいくら正義感で突き動かされている子供とはいえ命の危険を察して大人しくなる筈だった。

——しかし目の前の少年は何も反応を見せない。顔色を一つも変えず、ただ銃口を向けている男を鋭い目つきで睨みつけている。これでは脅迫的行動が何も意味を成さない。

男は仕方なく銃の引き金を引いた、銃声音と共に殺意が込められた一発が悟飯の頭を駆け抜けようとするがそれは無理矢理な身体能力を持って中断させられる。

「ば…バケモノッ!!」

片手で弾を受け止める少年が男の目に飛び込んできていた。ありえない光景に恐怖心を覚えると同時に何度も何度も引き金が引いて銃声がループする。

しかしそれでも頭を撃ち抜く事は叶わず、すべて悟飯は片手で弾丸を受け止められてしまう。目に見えない程の速度をもつてしても悟飯の片手はそれ以上の速度を持っていたのだ。

もはや男達はやけになり懷からナイフを取り出したり拳銃を取り出したり、武器を持たない者は素手で少年へと次々と襲い掛かっている。

目の前の少年を殺す事が出来ない事実は男達にとってはこれ以上にならない程の危機的状況であり、すぐに抹殺しなければならなかった。

「くっそーっ！」「」

しかし結果は全て惨敗。格闘戦を仕掛けた男達は全て圧倒され、ナイフで攻撃しようと駆使するも何故かナイフの刀身が折れてしまう。更に飛んできた銃弾は一つも残らず手が刹那に掴み取る。

仮に運良く少年の身体に当たっても何故か銃弾がはじき返されてしまう。圧倒的な実力を前にした男達は覚えた事のない恐怖心が湧き上がってくる。

「でりゃあっ！！」

悟飯はすかさず男達に拳を振るい蹴りを入れていく。実は元々悟飯は殺す気など毛頭も無いのだ、あくまで気絶させようとしているだけである。故にかなりの手加減が入った威力だとしても男達を軽々と吹き飛ばしていく。

やがてその場にいた敵が気絶した所で、悟飯は他に敵がいなか周りを確認すれば最終的に縛られて声も出せずにいる少女へと目を向ける。

当然、少女自身も自分を助けてくれる化け物のような強さを持った少年を見て驚きを隠せずにいたのだった。目と目が合えば、ゆっくりと彼は近づいていく。

「ふう……今で最後かな。あの……大丈夫ですか？」

少女の口を塞いでいる布や身体を縛り付ける紐を悟飯は解いていく…。

「ぷはあっ！ あ、アンタ何者…！？」

一番に出てきた言葉は悟飯が何者なのか、信じられない強さを持っている少年は金髪の少女からすれば一番に未知の存在だ。

「ボクは——…。」

質問に回答しようと悟飯は小さな声で口にしようとするが最後まで言う事はできず、意識が途中で切断されてしまったのだ。というのも悟飯は此処に来る前の戦いのせいで重症を負っていたのだ。

体中からくる激しい激痛に耐えながら男達と戦い、怒りに身を任せながら助けようとしていた。しかしそれが逆にツケとなって助けることができたというほっとした安心感と同時に体に響いてきていたのだ。

視界が暗闇に包まれていく中で少女に覆いかぶさるように倒れてしまふ、少女は自分の方へと倒れてきた悟飯を受け止める。

「なんなのよ…？」

わけがわからず啞然とした表情のまま悟飯を見つめる少女——果

たしてこの二人の出会いは何を意味するのか。そしてこれから先、
悟飯に何が待ち受けているのだろうか…。

第2話 これからの予定

『悟飯！ おめえの真の力を見せてみる！！』

頭の中に響いてくる、暖かくも厳しい、憧れの人物からの声。もう聞く事は許されない筈の声が脳内で響いてくる。記憶に残る憧れの父の顔が見えてくる。

真っ直ぐに自分に目を向けている。何があっても彼はあの優しさを忘れた事はなかった、何時も影にはその人物の存在が秘されていて――。

『甘ったれてるんじゃないぞ！！地球はおめえが守るんだっ！！』

地球は、自分自身の手で守る。厳しく手強い使命だが、それが悟飯自身の使命。憧れの存在である人物から、届くはずのない声が届いたときから、

その後の事はあまりよく覚えていなかった。薄っすらと記憶はあるがよく覚えていない、ただ無我夢中で地球を脅かす敵となる人物と戦い続けていた。

死にかけていたあの頃、確かに父が助けてくれて、

「お父さん――！！」

不意に目が覚めると悟飯は自分の置かれた立場を理解する。まずベツドの中にいる事がわかった、暖かな感触が全身を包み込むように伝わってくる、もう一眠りしたくなるほど。

近くには窓があり、そこから日差しが入ってきている。思わず目が眩むが、そのまま部屋全体を見渡してみる。確か自分は、あの女の子を怪しい男から助けたような記憶が残っている。

しかしその助ける行動をしながらも全身の怪我は響いていた、途中から記憶をまた失っているが、恐らく意識が途切れてしまったのだろうと悟飯は推測を立てる。

実際、自分の体をよく見ているとお腹に包帯が巻かれている。今でも痛みは僅かに響いてくるが先程感じていたほどじゃない。痛みは明らかに和らいでいる。

改めて見て、そしてわかる事は一つ。自分は今、安全な立場にいる。ちゃんと包帯を巻かれ、ベッドにこうやって寝かしてくれるという事は、少なからず安全を連想させてくれる。

「アレは…夢だったのかな……。」

——それがわかった瞬間から此処に来るまでの、先程見た夢を思い返す、まるで夢のような、ハッキリと聞こえた憧れた声。尊敬している人物からの形となって現れた夢。

仲間達がやられ、自分は死へと向かうと直感した瞬間、死んだ筈の父親が現れ自分を抱えて、声が聞こえた。メッセージを残して、気がつけば父の姿はなくなっていた。

夢のようなおとぎ話のような、よくわからない、上手く頭に入ってくなくて、上手く理解ができなくて、だがあの頃はそんな戸惑いを覚えていた暇などなかった。

目の前にいる皆を脅かす敵を倒さなければいけない、父の声の通りに、改めて自らの意思が固まって目の前の敵を――。

「気がついたみたいね！」

「わあっ!？」

突然、近くから少女の声、驚いてそちらの方へ目を向けると見覚えのある顔がそこにある、長い金色の髪に緑色の瞳、白い服装――。すぐに悟飯は思い出す、この少女は怪しげな男に捕まっていた少女である事に。どうして今、目の前にいるのかわからないがあの少女で間違いない。

「此処はアタシの家よ。とりあえず、アンタには色々聞きたい事があるんだけど…、その前に今の状況を説明しといた方がよさそうね。」

こちらが突然の登場に驚いている暇もなく少女は喋る。寧ろ自分が驚いているからこそ状況を説明しようとしているのかもしれない、と悟飯は内心そう思っていた。

状況？と少し首をかしげて少女に問いかけてみれば軽く目の前の少女は頷いてくれた、恐らくあの男達を気絶させた後の話をしようとしているのだろう。

「アンタはあの後、灰ビルで倒れたの。それで、アタシが電話して警察が来て犯人達を捕まえた後に、

鯨島に頼んでアンタの治療をしてもらったわ。それにしても、よくあれだけの怪我を負った状態であんな事できたわね。」

話を聞き終わった後に悟飯は思わず反応に困って苦笑いを浮かべる。

「あ、ありがとうございます……。あはは…つい無我夢中になって…。」

一般人からすれば無理もない。骨が折れていたり血を口から吐いていたりだ、そう言われるのも仕方のない事だと悟飯は思っている。しかし何処か大人びた印象を受ける少女はそのまま話を続ける。

「別にいいわよ、アタシもアンタに助けられたんだし。それよりも、なんでアンタがあんな所にいたのか説明しなさい。」

何故か命令口調で語る少女。悟飯から見れば大人びたように感じる、咄嗟に警察を呼ぶなどの行動力、今でも気丈に振舞う――。

普通ではここまでの行動力を発揮しないだろう。何処か不思議な印象を見受けられる。とはいえ、悟飯はすぐに事情を説明する事にした。

何処までの事情を説明すればいいかわからないので、とにかく適当な具合で事情を説明する。その途中から入ってくる少女の質問にも、

また説明する為に一から話をする、また少女の質問が、と暫くその作業をループ。そんな事をしている間にも時間は過ぎていった。

「つまり、そのボージャックって悪者を倒した後に倒れて、気が付いたらあの場所にいたと…。正直信じられない話ね…。」

もはや話は一般人が理解できない所まで少女に説明をしていた。質問に答える結果がやむをおえなくそうさせたのだ。

悟飯自身でも経歴を話していると信じられないとも思っている。戦いでのお出来事は確かにあった大きな出来事、今負っている怪我が物語っている。

だが彼が理解できないのはその後の話、突然此処に倒れていたという事。あのまま、戦いの場で倒れていたならまだ悟飯も理解ができる。

なのにここまで理解に苦しませるのは突然、別の場所で倒れていたという点だ。此処だけが悟飯にとっても理解の範疇を飛び越えて、意味がわからなくなってくる。

しかし事実かどうかと言われれば事実だ。こんな非現実的な話を目の前の少女が理解して信じてくれるかどうか、それは悟飯自身、あまり期待していなかった。

「でも、あそこで助けてくれたアンタのパワーはとも子供の物とは思えないし、それを実際にアタシが見てるんだから信じるわ。

ただ、気になるのは天下一大武道大会ね。それだけ有名な大会ならアタシも聞いたことあると思うんだけど…。」

しかし、意外とすんなり信じてくれた。これは悟飯も驚きの表情を浮かべる。本人である少女は考える事に必死で悟飯に気づいてはいないが。

「あ、そうそう。アンタの名前を教えてもらえないかしら？」

話題は一瞬で変わった。確かに此処まで会話をしながら名前のやり取り自体をしていなかった事に彼は気がつく。予想していない質問にきょとん、とした顔で少女を見つめながら名前を名乗る事にした。

「名前…ですか？　ボクは孫悟飯です。」

「孫悟飯…変わった名前ね。アタシはアリサ・バニングスよ。呼ぶ時はアリサでいいわ。」

何処か遅しそうに少女は語った。アリサ・バニングス。それが少女の名前である事がわかると悟飯はしっかりと記憶にとどめる事にする。

「わかりました。よろしくお願いします、アリサさ…「ストーリーップ！」…え？」

礼儀正しく挨拶をしようとした途端に、静止させる声が部屋に響く。悟飯は少し気の抜けた声を出してしまう。

「さっきから、なーんか違和感を感じていたけど、見たところ悟飯とアタシって同年代じゃない。だからアタシに敬語を使う必要ないわよ。気軽に話さない」

「気軽に…ですか？」

悟飯は幼い頃から修行ばかり重ねてきたせいで同年代の子供と話す機会がまったくといっていいほどなかったのだ。

それどころか、母親の教育により礼儀指導を学ばされ、修行期間でもその敬語は滅多に、はずした事が無かった。

だからこそ突然、出会って間もない相手に気軽に話せと言われても悟飯は戸惑いを覚えてしまう。

「ええ、無理なら別にいいわよ。その時は悟飯一人で犯人達を倒した事をみんなにバラすから。そうなったら、アンタ色々と大変な事になるでしょうね…」

直後、不気味な笑顔を浮かべる。アリスとしては単純に悟飯と仲良く話したいだけでもあり、同年代にも関わらず堅苦しい話し方は相手にとって慣れていない。

しかも周りに話そうとする内容は間違いなくマスコミから注目を浴

びる事は間違いない、この普通の世界ではマスコミだけで終わるならまだ幸いである。

そうなれば自由に表立って行動する事も出来ないし何をされるのかわかったモノではない、そのせいで何か大きなトラブルに巻き込まれていては話にならない。

恐らく、これからこの世界について調べなければならない時にこんな事態に陥っては元も子もない話である。

「…わかりま…わかったよ。アリサちゃん…。」

慣れていないせいか、ぎこちなく話す。相手が初対面であるという理由も重なってすぐに敬語に戻りそうな雰囲気まで漂っている。アリサは思わず不満そうな表情を浮かべて、腕を組み小さく少し納得がいかなさそうに唸る。この反応に更に悟飯は途方にくれていた。

「ん…まだ少しきこちないけど…、まあいいわ。これから慣れていけばいいわけだし…。」

「…——これから？」

これから、という事は暫く此处で暮らす事になるのだろうか。ベッドや部屋の構造を見ているとお金持ちな雰囲気 が漂っているが。よく見てみると全体的に部屋は綺麗に整頓されていて真っ白な天井に壁があつた、絵が飾られていたり本棚が置かれていたり、綺麗に纏まっている。

「そう。まだ悟飯のケガは治ってないし、少なくとも3日間は此処にいてもらうわ。その間に住所とかこっちで調べておくから。」

そうしている間にも話は続く。これは今、身寄りの無い悟飯にとつては好都合である。お世話になるという罪悪感が残るが他に方法が無い、甘んじて受け入れておく。

しかし、後半の住所などは恐らく調べても出てこないだろう。自分の身寄りであるならその人が発する気というものがある。悟飯はそれを感知する事が出来る。

だが目が覚めてからというものの、大きな気はまったく感じ取れない。誰にでも少なからず気は発してはいるが自分の知ってる気はこの世界では感じることは無かった。

目の前にいる少女からも小さな気を感じる事はできるが、自分を知っている人の気は大抵、巨大なものである。いたらすぐにわかる筈だった。

「因みに勝手に出ていたりしたら……あの事バラすから……わかったわね？」

話の内容からして少女はお金持ちなのだろう。またもや不気味な笑顔を向けられる。そしてどう反応すればいいのかわからない悟飯は小さく、「うん……。」と答える。

そう答えるとアリサは突然、悟飯の方へと手を伸ばす。突然の動作に困惑した表情を浮かべてアリサを見ていると、

「じゃあ、これからよろしくね。悟飯。」

「よろしく、アリサちゃん。」

少女の手を取って、握手を交わした。こうして二人は合意の元、三日間はアリサの家で生活することになる。悟飯の波乱万丈な生活がはじまるうとしていた。

第3話 悟飯、初めての学校（前編）

陽が昇ってからある程度、時間が経った今、小さな鳥の鳴き声が悟飯の耳に聞こえてくる。今日のスタートは少しバタバタした始めである。

あの事件が起きてから三日は経っていた。アリサが男達に暴行を加えられそうになった所を悟飯が助けたあの頃から、アリサの家はとも賑やかになっていた。

初対面であるにも関わらず、日が経つにつれて家族のような錯覚を覚えていく中、すっかり悟飯もアリサも互いに仲良くなる事ができていったのだった。

悟飯の怪我は彼がサイヤ人の血を引いているおかげで思った以上に怪我は長引く事はなく、あの大怪我の事など嘘のように完治していた、これにはアリサも驚く。

なんだかんだで日にちが経つにつれてその事も彼から話してもらい、彼女は理解に苦しみながら日にちは経っていく。そしてこの出来事は一週間後の事。

「ジーはーんー！ 早く来ないとおいてくわよー！！」

結局、一週間という時間を費やして悟飯の住所を突き止めようと全力を尽くしたアリサだったがその努力は報われず、悟飯の話が真実であるかのように見つからなかった。

だがこの事をきっかけとしてアリサにとっては、悟飯の話が少しでも信憑性のある話である事を理解する。途方もなく嘘のような夢のような話の連続ではあるものの。

それでも悟飯は嘘を吐いているようには見えない。何よりあの事件、男達を軽々と圧倒していき次々と倒して行く悟飯がそれを証拠として物語っている。

「ま、待つてよアリサちゃん。」

現在、悟飯は白い制服を身に纏っていた。アリサも悟飯のような白い服装を着ては玄関に位置する場所にて悟飯を待つている。

このような服装を着ている理由はこの出来事より三日ぐらい前の事。アリサはごく普通のように悟飯が家で過ごすのはあまりにもおかしい、と。

その”おかしい”とは、悟飯は外見的にも年齢的にも学校に行かなければならない年齢なのだ。つまり、義務教育を受けるべき立場だにも関わらず家で何時までも過ごしてはアリサの友達を自分の家に連れてきた時、何処かに隠れてもらうのも疲れる事だ。

何より家の周りにいる人間が黙ってなどいない。只でさえ、悟飯は今の状態でも地域の人達からは噂の元である。学校に行かなくては、とアリサは判断したのだ。

「じゃあ、後は頼んだわよ。」

そういう事もあって、悟飯を自分の通う学校へと編入試験を受けさせる事に決めた。といってもアリサの通う学校はレベルが高い。編入試験に見事合格する事ができるかどうか、彼女にとっては不安の種ではあったが悟飯は意外にもあっさりと合格してしまう。

それは悟飯は母親からの教育の一環という事もあつて幼い頃から通信教育で勉強を繰り返していた。故に出せた結果でもある。

「鮫島さん、いつてきます！」

外に位置する場所にて、家の方に悟飯は振り返ると鮫島がいた。これから悟飯はこの世界で初めての学校に通うことになる。

その学校についての情報はアリサから聞いた物ばかりではある、友達の話、先生の話、クラスの話、勉強の話、とても楽しそうな話ばかりであった。

鮫島はゆつくりと微笑を二人に向けては軽く頭を下げてお辞儀をする。

「——いつてらっしゃいませ。アリサお嬢様、悟飯様。」

そして、今日は悟飯が初めて学校へ通う一日となったのだった。アリサ曰く、学校へ行くにはよくバスを利用しているのだという。今日この日もバスを利用する事になった。二人はバスに乗ると一番後ろの座席に座るのだった。

「悟飯、家でも言ったけど、アンタの力は強すぎるから、加減しときなさいよね。特に体育。」

唐突にアリサは思い出すとすぐに悟飯に向けて言う。

「うん、わかってるよ。大騒ぎになっちゃうと思うからね。」

「それならよし！」

満したようにアリサは言う。体育で悟飯の超人的な能力を発揮してしまえばそれでこそ学校にいらなくなるかもしれないのだから。暫く時間が経つとバスは停止。そして乗り込んだのは——紫色の髪をした少女であり、自分達と同じ制服を着た少女だった。

悟飯は思わず目を奪われるがそのまま少女がこちらに向かっている事に気がつく、それと同時に少女は笑顔をこちらに向けてくる。

「おはよう、アリサちゃん！」

大人しそうな、物静かな雰囲気を持つ少女は挨拶をするとアリサも同じように「おはよう、すずか」と返す。このやり取りで悟飯はすぐにわかる。

この一週間で悟飯は話をしていてわかった事がある、それは学校の話。アリサの友達はこのバスで待ち合わせをしているという話。

名前は「高町なのは」「月村すずか」、二人ともアリサにとっては親友的な存在——のように悟飯からは見えた。

「アリサちゃん、そっちの人が前にいった孫くんではないのかな…？」

「ええ、そうよ。悟飯、この子がアタシの友達の月村すずか。」

「初めまして、孫悟飯です。」

悟飯は礼儀正しく自己紹介をする。それに対してすずかは「はじめまして」と名乗る。アリサから見ればそれは微笑ましい光景であった。

バスがまた動く前にすずかはアリサの隣に座る。こうして三人並んで座ってみると同じ学校の生徒、といった雰囲気が出ていた。

暫く会話をしていると互いに下の名前で呼ぶほどの関係となりつつあった。

「悟飯くんは好きな食べ物とかある？」

「ボクは…中華まんとかパオズイモリかな。」

一瞬、全員が凍りつく。パオズという言葉はアリサには通用するがすずかには通用せず、イモリという単語だけに反応していた。

「え、えっと…パオズイモリって……？」

「え？パオズ山で取れるイモリのことだけど…。」

「——ちょっと悟飯ッ、こっちの世界の常識考えなさいよっ。」

すずかに聞こえぬように小さな声で慌てて悟飯に言う、よく見てみるとすずかが反応に困ったような戸惑いを見せている。

「い、ごめんなさい…。」

「二人とも、何話してるの？」

「あ、うつん。なんでもないわよ。こっちの話！」

二人の話に外野の外であるすずかは思わず首を傾げる、気になつているような目線を向けられると悟飯とアリサは少し慌てながら返答する。

初対面同士という事もあってアリサにとってはすずかは少し心配の種でもあった。すずかの性格はとてもおとなしく引込み思案なのだ。

雰囲気からでも何処か大人しい印象を受けるが正にその通りである、アリサからすれば悟飯と上手く打ち溶け合えるかどうか少し悩んでいた所だった。

だがもう一つの友達が来るまでの間、アリサ自身が入る事で三人の会話は上手く弾んでいく事になる。前の学校の話なども出てきたがなんとかこまかしながら。

「アリサちゃんとすずかちゃん、おはよう！　あと…えっと、もしかして孫くん？」

そうしている間にバスは再び停止。次に入ってきたのは茶髪のツインテールをした少女、アリサとすずかが言うには「高町なのは」という少女らしい。

アリサのような気の強さ、すずかのような大人しさ、まるで表と裏のような性格をした人物とは裏腹に、なのはという少女はどちらもその印象を受けなかった。

「あ、はい。そうですけど…。」

「そういえば、なのはにも悟飯のこと話してたわね。」

「うんつ。…あ、いきなりで驚いたならごめんね、孫くん。わたしは高町なのはだよ。なのはって呼んで？」

「大丈夫だよ、よろしくなのはちゃん。ボクも悟飯でいいよ。」

すぐに悟飯の感情を察知すると少女は笑顔を悟飯に向ける。悟飯はすずかの一件で理解はしていたものの、アリサが自分の事を学校で話しているようだ。

こうして四人の子供は主に悟飯についての話題で盛り上がりながら学校へと到着するのだった。悟飯は三人の少女についていくようにバスから降りる。

悟飯達は校内へ入ると職員室を探す。悟飯は未だに学校側から知られていないが故に自分が何処のクラスなのかわからない状態なのだ。

だが学校内は悟飯にとっては未知の領域。だからこそ友人であるアリサ達が職員室に案内する事になった。そして今は職員室前だ。

「はい、此処が職員室よ。あとでもっと詳しく学校内を案内してあげるわ。」

「わたし達は先に教室に行ってるね。もう時間がないから…。」

「クラス、悟飯くんと一緒になれるといいな。…じゃあわたし達はもう行くね、またあとでね！」

三人の少女は続けて言う。

「ありがとう。もし、同じクラスになった時はよろしくね。」

嬉しそうに悟飯は返答すると三人の少女はそれぞれ背を向けて職員室を後にする。途中アリサが振り返って悟飯の様子を確認する。その確認した光景は、悟飯自身はもう職員室の中に入っていた。その様子を見届けた後、すずかとなのはと共に自分達の教室へ行くのだった。

「今日は新しいクラスメイトを紹介します。悟飯くん、入って。」

そして朝のホームルームの時間、先生は「孫悟飯」という名前を黒板に書いていく。それはアリサ達の願いが叶った瞬間だった。

暫くすると扉から孫悟飯と思わしき少年が入ってくる、少し緊張気味に先生の隣にまで入ってくると全員の目を向けられながら顔を上げ――。

「は、はじめまして。孫…孫悟飯です。」

軽く頭を下げると同時に自分の名前を名乗る悟飯。――こうして、悟飯にとって初めての学校生活が始まったのだった。はてさて、悟飯は無事に学校生活を過ごせるのだろうか。

第4話 悟飯、初めての学校（中編）

悟飯の席はアリサの積極的な指名で彼女の隣となった。たまたまアリサの隣は誰も座っていなかったのでちょうどいいと先生も思っただろう。

やがて悟飯は指名された席に座る、余った時間は先生が生徒全体への連絡を説明、そしてホームルームが終わり、早くも休憩時間となっていた。

先程から注目され、開放された事に緊張の糸が切れて少し疲れたような表情を浮かべていた。

「そうそう、悟飯に学校の案内をしないと。今のままじゃ右も左もわからないだろうし。」

アリサはなのはとすずかの所へ固まるように其処へいた。唐突に彼女は思い出すとすぐに悟飯を連れ出そうと顔を向けるが、悟飯の周りには予想外な光景が広がっていた。

「前の学校はどんな所だったの？」

「孫くんの誕生日はいつ？」

「前の学校じゃどんな友達がいたんだ？」

「どこに住んでるの？」

他の生徒達が悟飯を取り囲んでいたのだ。更に大勢で囲んでいるという性質上、中々悟飯に話しかけられるような環境ではなかった。これにはアリサも驚いてしまう。

よく聞いていると悟飯には答えづらいような質問まで飛び交ってしまっている。住所や前の学校などがそれに該当する、彼の事情を知るアリサにとってはまずいと思ってしまう。

「にやはは…悟飯くん、これはちょっと困ってるかも。」

「はあ…たくもっ、しよーがないわねえ…。」

ついに痺れを切らしたアリサが大勢の生徒達に近づくように前へ出る、突然、手を叩くような音が教室内に響くと一気に生徒全員がアリサに注目する。

「はいはい、ちゅーもーく！ そんなに一気に詰め寄ったら悟飯が困るじゃないの。」

これはアリサなりの悟飯のフォローでもあった。ここまで大勢の生徒に詰め寄られては悟飯は対応しきれない。しかも彼にとっては答えづらい質問まで出ている。

とにかくなんとか静止しようと大声を上げて生徒達に伝えてみるが、質問を止める生徒もいればまだ質問を続ける生徒がいてとバラバラの反応を見せ付けられる。

「ってちよっと！アタシの話を聞いてるわけ！質問は一人につき一回まで！」

まだ質問責めをやめようとしないアリサは先程のような怒りが混ざった大声を出す、この行動には悟飯も苦笑いを浮かべてしまう。だがアリサのリーダーシップ的な行動のおかげで大勢の生徒による質問責めは止んだ。なのはとすずかはさすがアリサちゃん、と内心で共通に思っていた。

しかしその生徒達を一番に静止効果が出たのはアリサの大声ではなく、チャイムの音。授業が始まる知らせだ、結局アリサ達は学校の案内もできず休憩時間が終わってしまう。

「…さつきはありがとうアリサちゃん。」

「べ、べつに…アンタとアタシが一緒に住んでる事とかバレたら変な噂流されそうじゃない。勘違いしないでっ。」

生徒達が自分の席へ着席していく中、悟飯はアリサに小さな声で伝える。冷たい言葉を言い放つと同時に悟飯からの視線を逸らして席につこうとする。

助ける行動とは裏腹に突き放すような言葉を投げかけられた当の本人は何がなんだか理解が出来ず、ただこくと首を傾げてアリサを見送るだけだった。

やがて全員が席に座った頃には教師が教室に入ってきていた。――

――二時間目であるその授業は悟飯にとって生涯初めての授業であった。

そして授業を通してクラス全員が悟飯の事でわかってきた事が幾つかあった、それは彼はとても優秀であるという事。つまり頭が良いのだ。

難しい問題であると言われる難問を彼はあっさりと簡単に答える。それは一つの授業に絞られた物ではなく幾つもの問題で数々の授業でそれは繰り返されるのだ。

何時しか悟飯はクラス全員からすれば成績優秀の転校生、という好印象にも近いイメージが全員の脳内で記憶として強く残っていくのだった。

「悟飯くん、すごいよね。あんなに勉強ができるなんて……」

体育の時間に備えるため、着替え中にすずかが口にした言葉はそれだった。突然ではあるがその言葉にはなのも同調するように軽く頷いて答える。

「うん。わたし、びっくりしたよ。そういえば次の体育ってなにをするのかなあ……」

「多分、ドッジボールだと思うよ。そうだったよね、アリサちゃん……？」

「まあ、多分そうなんじゃないの。……前に先生が言ってたと思うし。」

会話をしている間にも時間は流れていく、彼等は普段の制服と違った体操服の姿で運動場へ生徒達は集まってく。その中にはもちろん、体操服姿の悟飯もいる。

暫くアリサ達は悟飯を交えながら会話を続けているとチャイムの音が響いてくる。悟飯にとって学校のチャイムの音はとても新鮮であったがもうこの頃には慣れてきていた。

体育の時間になると一定の場所に全員が集合する。無論、何時ものようになのはとすずかとアリサ、そして悟飯は纏まって休憩時間にした会話の続きをしている。

「…そういえば悟飯、ドッジボールのルール知ってるの？」

今、彼女達が話している話題から抜け出すようにアリサは悟飯に向かって話しかける。それは彼女が気にかけていたことだった。

「ドッジボール？ うん。やったことないけどルールだけなら。」

「ふーん…なら別にいいけど、あの時みたいに馬鹿力だけは出さないように！」

アリサから見ればあの時の悟飯のように力を出してしまえば大変な事になる。それを踏んで釘をさしておいた。暫くすると先生がやってきて4時間目は始まる。

「じゃあチームごとに分かれて。先行はどっちからにする？」

遂にドッジボールは始まる。教師はクラス全員に呼びかけをすると予め指定されたチームへと場所を移動していく。白い線で描かれた範囲内に、

範囲の中心部分となる線が入る事で二つの陣地が描かれている。その一つの陣地にはアリサと悟飯と他生徒、そして敵チームにはずか他生徒が配置されている。

二つの陣地に入っていないのはは陣地の外にいる。つまり外野である。なのはは悟飯とアリサと同じチームである。故に味方的な位置にあたる。

準備が整うと教師が首に下げている紐を通した笛で音を鳴らす、それが試合開始の合図となってボールを使つての攻防合戦を繰り広げる。

投げられたボールを避ける者もいれば受け止める者がいる、そうして試合は時間が経つと同時に陣地にいる生徒の数は互いに減り続ける。

「（悟飯くん、ボール避けるの上手…。）」

そんな中で、孫悟飯は自分に投げられたボールは避け続けている、陣地の生徒が少ないせいで悟飯が狙われる可能性も高くなりつつあるのだ。

素早い動作で次々と悟飯は避けていく、あまりの速さになのはは思わずぼんやりとそれを眺めていた。当てる側も必死でボールを投げ

ている。

途中で他の生徒にボールが衝突する事もあれば敵側の生徒がボールに当たる事もある、だがボールの標的は悟飯からアリサへと変わっていた。

「きゃあああっ!？」

投げたのは月村すずか。彼女は運動神経が良く、その高い能力のおかげで最後まで生き残っていた。

一方、アリサは悟飯が力を出さないか心配でボールには目がいつていなかった。ボールはアリサの顔面を直撃する寸前にまで追い込まれていた。

「——危ないっ!!」

「え…？ あの位置から、取った…?」

悟飯の起こした刹那の動作はなのにとって驚きを隠せなかった。だがその予想外に対する動揺はなのだけではなく他生徒も同じ心情だったのだ。

アリサと悟飯は離れていた、距離は確かにあったのだ。それは常人の体力、少なからず小学生の体力を駆使しても決して届かない場所にいるのは誰でもわかる明白な事実。

その避けられない事実をわかって踏んだすずかでもある。しかし当たる箇所が顔面になってしまった事には彼女にとっても計算外だ

が、今はそれ以上に計算外の事が起きている。

「怪我はない、アリサちゃん？」

「え…？ うん…大丈夫だけど……。」

それは助けてくれたアリサ自身も感じている。そして改めて彼女の中では再認識する、目の前の少年は半端なく体力面が強すぎる事に。そのせいで今の悟飯は全員の視線を浴びている事に気がつく。それは本人も気がついていて、そのせいでどうにも全員の視線は気まずい。

「（しまった！またやっちゃった…。今度は目立たないように、そーっとそーっと……）」

そーっと、彼からすれば本当に僅かであり、ほんの少しの腕力を込めてボールを相手に投げる――が、先程のありえない自体にぼんやりとしていた、生徒達が当たっていつてしまう。更にボールがバウンドするせいで数を増やしていく、合計で三人、連続で当てていく。その中にもずか含められていた。

彼女も他の生徒と同じように動揺を表に出していたのだ、油断が生まれ結果的に当たってしまった。そしてそのまま外野の真横へと向かっていく。

その真横から位置が近いのはなのはだった、彼女はすぐにボールを取ろうと手を伸ばして受け止めようとするが、

「——っ！！ きゃ…っ！！」

ボールを取る事に夢中で足場が崩れていた、足のバランスを崩してそのまま地面へと激突してしまう。

「——なのは（ちゃん）！！！！」

三人の声が揃った瞬間、なのはは表情を歪めながらゆっくりと立ち上がるが足の肌を擦り剥いて血液が出ている状態だった。痛みを我慢するのはだが全員から視線が向けられている事に気がつくを作り笑いを浮かべながら返答をする。

「っ、う…。…えっと、大丈夫だよみんな…。」

「大変…！血が出てる…誰か！保健室に連れて行って！」

「ボクが連れて行きます！」

教師の言葉に真っ先に悟飯は答えた。アリサとすずかが出ようともしつつがそれよりも早く、一番に上げたのは悟飯だった。すぐに悟飯はなのはの前まで移動する、その頃も怪我の痛みと全身を叩き付けた痛みがなのはに襲ってきていた。

「なのはちゃんボクに掴まって。」

「うん、ありがとう悟飯くん……」

そういつて悟飯は背を向ける、痛みに耐えながら相手の肩に掴まって背負う形になるとすぐに彼は走行。その速さは車以上の速度で運動場を駆け抜けていく。

他の生徒達はその様子を見てもはや理解に苦しんでいるのかただ見送るだけだった。さすがの教師もこのありえない速度はもう何も言えなかった。

[illegible]

ただ一人、思わぬ速度に悲鳴にも近い叫び声を上げる少女は一瞬だけ響く。室内に入る事ですぐに止んだが、アリサだけはこの後の展開を予想して頭を抱えているのだった。

第5話 悟飯、初めての学校（後編）

今現在、なのはと悟飯は保健室の前にいる。先程のなのはの怪我は自分のせいであると思い込んでしまっている悟飯は罪悪感が更に増している状態だった。

だからこそ悟飯は誰よりも先に指名したのだ。そして保健室の前にいるなのはを悟飯が背負う形で保健室の扉にノックする。そのおかげで小さく音が鳴り響く。

——だが、保健室からは誰も悟飯達に反応してくれる人はいなかった。部屋から声が聞こえるわけでもなく、扉が開く事もない。二人は不自然に思う。

「失礼します…。」

仕方なく悟飯は扉を開けて中へと入っていく。部屋の中に視線を向けて目的の人物である先生を探すが見当たらない。

「あれ、先生は…いないのかな。」

「悟飯くん…その椅子に下ろして？」

何時までも背負っているのはとても体力を消費する行動であるとなのはは判断した、だが悟飯は一向に疲れた表情を見せないので判断に迷っていたのだ。

とにかく密着している状態ではなのは自身、少し恥ずかしくなりつ

つあるのだ。悟飯は目に見えている椅子になのはを座らせる。

「本当にごめんね、ボクの所為でケガを負わせちゃって…。」

「ううん、わたしがボールに夢中になってただけだから、悟飯くんは気にしないで。」

悟飯の優しい性格上を裏返すように押し寄せる強い罪の意識はなのはもすぐに理解できるほど表に出ていた。故になのはは笑顔を浮かべる。

明るい笑顔を前にした悟飯は焦りにも似た罪悪感が少し消えていく。完璧に消失したわけではないが気持ちが楽になったと形容できるほどだ。

だからこそ視界に入っていた包帯にも意識を向ける事ができた。近くには消毒液が入ったビン、両方ともテーブルに置かれている。すぐに悟飯は両方とも手に取り、消毒液で怪我の雑菌を消毒していき、その後に包帯で怪我をした腕を巻いていく。

（なんだろう、なのはちゃんから気とは別に違うものが感じられる。）

——しかし、その作業の途中。悟飯は何か唐突な違和感を感じ始める。先程まで慌てていたせいで上手く感じ取る事ができなかった何かが今では感じられた。

それは気と似たような何か。なのは自身から発しているおかしい何

かに悟飯は変に思ってしまう。普通の人とは何かが違う、力のようなものをこの少女からは発している。

悟飯自身がそれを感じ取る事ができる原因は自身が超越した身体能力であるからこそ、なのはからくる気のような物を感じ取れるのだ。作業をしながら悟飯は脳内で思い返す。アリサにはこのような気と似たような物は発していなかった、すずかも同様に。他の生徒達もそれはアリサ達と一緒にだ。

「…ねえ悟飯くん。さっきの事なんだけど……。」

包帯を巻いた後。つまり悟飯の作業が完了した頃、なのははそれを見計らっていたように話を切り出す。悟飯はすぐにその内容を理解する。

「あ、アレはマグレ……。」

「誤魔化さなくてもいいよ。」

途中でなのはは悟飯の口を止めるように遮る言葉を放つ。罪悪感の次にくる感情は焦りだ。この話題を何より彼は恐れている。

それを物語るように悟飯は「う……」と小さくぼろを出すような反応までなのはに見せてしまう、これでは通じる言い訳も通じなくなるだろう。

なんとかこの話題から逃れる方法を考えようとするが今の彼女の視

線はとても純粹で強い。何か強い思いを胸に秘めたような、青い瞳に悟飯が写る。

やがて悟飯は折れたように、話すしかないと内心で決断する。アリサにどう説明すればいいかわからないが、彼にとってこの場を切り抜ける方法は話すしかない。だからこそ悟飯は頷いて口に出そうとした瞬間だった。

「なのはーっ!」

「あ、アリサちゃん…っ!？」

保健室に入り込んだきたのは長い金色の髪をした少女、二人の会話を邪魔するような形で入り込んでくる。悟飯からすればまた反応に困る出来事であった。

アリサが此処に来た理由は他でもない、悟飯の速度に驚いたクラスメイト達は自分でなんとかできるとしても、なのはに対して悟飯は対処できるかどうか疑問を感じていた。

もしかしたら、言い訳する事ができなくて話してしまうのではないかと不安に思つての行動でもある、勿論なのはが心配なのも行動の理由としては大きいが悟飯の件も混じっているのだ。

「アリサちゃん。ボク、なのはちゃんにあの事を話そうと思います。」

「…悟飯くん……?」

それはアリサにとっても恐れていた展開で、ある意味では予想していた展開になりつつある事が、悟飯の言葉でわかった。なのははそれをただ見守るだけ。

予想していた展開という事もあって、自分の友達であるすずかも巻き込み、なのははこの強い視線はもう明らかに隠し通せるほどのレベルではなくなってしまうっている。

アリサは此処に来るまでの間、考えていた言い訳を切り出すこともできず、ただ暫く沈黙が場を包み込むだけ。精神的疲労を激しく感じさせる無言。しかしアリサはそれを破った。

「…わかったわよ。でも話が長くなりそうだからすずかも入れてお昼ご飯の時。なのはもそれでいいわね？」

「アリサちゃん…うん、わたしはそれでもいいよ。」

もはやアリサ自身もお手上げだった。これから話す悟飯の経歴を二人は信じてくれるかどうかかわらないが、とにかく話すしかない。悟飯とアリサは心に決めるのだった。

——そしてチャイムの音が合図のように鳴り響く。その合図は4時間目が終わるという事であり、昼休みの時間がはじまったという事でもあった。

昼休みは通常の休憩時間よりも長く、生徒が食事をしたり勉強の疲れを癒すために休憩をしたり限られた範囲内で自由な休憩方法を取る事ができる間だ。

悟飯はあのドッジボールで自ら起こした移動速度について、他のクラスメイトがそれについて話をして、何か言われるのではないかと

不安に思っていたのだった。

だが教室に入る前にアリサからその事についてはなんとか誤魔化しておいたという話を聞く。そのおかげで悟飯の不安は少しだけ消える事になった。

それでも彼の不安は残っているものの、いざ教室へと入ってみると誰も自分のあの超越した身体能力を話題にしている者はいなかった。何事もなく接してくれたのだ。

しかし一部を除いては違った。アリサは何時も通りではあるが何処か考え込んだような「うーん」と深刻そうな表情を浮かべたりするだけでそこまで変わってはいない。

だが、ずずかとなのは他のクラスメイトとはまた違う反応を見せていた。ずずかはアリサから話があると言われてそれを気にしているのか明るい気持ちではなさそうに見える。

それは態度にも出ており、只でさえ大人しい外見が更に静かな雰囲気へと出しているようにも悟飯は見えた。なのはといえば、ただ真剣な表情を崩す事はなかった。

だが悟飯が少し話しかけたり他のクラスメイトがなのはと喋ったり、他者と接する時だけは元のなのはに戻っているようにも見える。恐らく気遣っているのだろう。

「全員揃ったわね。今から話すことは信じられないと思うけど、全部真実だからちゃんと聞いててほしいの。」

アリサ達はよく屋上でお弁当を食べる事が日課となっている。見下ろす風景はとても綺麗であり、彼女達にとっては気持ちが出来になれ

るような場所なのだ。

「うん…。えっと、その前にあそこに座らない…？」

「…確かに立ち話もあれだしね。」

流れる風に髪が揺れ、すずかが指をさした先には青いベンチがあった。丁度、四人全員が座れそうな程の大きさである。アリサはすずかの提案に同意してベンチへと向かう。

そしてアリサとすずか、なのはに悟飯は同じように其処へ座っている。自分の持つているお弁当を抱えながら、しかし誰もお弁当に手をつけることはない。

すずかとなのははアリサか悟飯、話があると言った本人から会話を切り出してくるのをただ静かに待つ。普段とは違う物音もない静かな雰囲気、切り出しにくさを二人は感じてしまう。

「…悟飯の事なんだけど、実は悟飯はこの世界の人間じゃないの。」

「「え……？」」

一番に口を開いたのはアリサだった。非現実的で信じられない言葉、思いもしなかった言葉にすずかとなのはは言葉を揃えてしまう。

アリサの話は止まることはなく、何故この世界の人間ではないのか、悟飯の身体能力について、自分と悟飯との出会い、此処に至るまでの経歴を話し続けた。

「悟飯くんが…アリサちゃんを助けて……？」

「正直、信じられない話だと思うけど…今アタシが話したことは全部ホント。そうよね、悟飯？」

「うん、そうだよ。けどなんでこの世界に来たのかはボクにもわからないんだ…。」

「でも…これでちょっとわかったかも。悟飯くん、ちょっとおかしな所あったから。」

「まずは先程のような固い表情を向けるわけもなく、柔らかな微笑を浮かべていた。まるで今までの話を聞いていて納得したように。悟飯とアリサはその微笑を見て驚いてしまう。意外とあっさり受け入れてしまうすずかの態度とも思えない微笑に目を丸くする。」

「疑ったりしないの…？」

「疑ったりしないよ。悟飯くんと話してて、ちょっと浮世離れしてる所あったから…。」

「此処に至るまでに彼女達は悟飯と話し続けていた。何度も何度も、飽きることなく何気ない話を交わし続けて。それはすずかと悟飯が出会ってからだ。」

「すずかは改めて思い返してみれば確かに悟飯は何処かおかしい雰囲気を感じている。彼女はそれを直感的に彼の何かを見抜いていたの

だ。

「それにアリサちゃん、嘘は吐かないもん。」

最後の一言はすずかとアリサと友達だからこそ言える言葉だった。

「そっか…って、なのは！なんかボーツとしてるけど、どうかしたの？」

「ふえ？ あ、ううん。大丈夫、ちょっと信じられなかったから…でも、アリサちゃんと悟飯くんのお話、わたしも信じるよ。」

今まで話に入ってこなかった彼女。なのはにとってはアリサ達の話は信じられないという気持ちが大半だった、だがアリサも悟飯も、すずかの言うように嘘は吐かない。

ましてや屋上に呼び出しておいて冗談話をする筈もない。少なくとも、なのはの視点で見ればこの二人はそのような馬鹿げた話をするようには見えなかった。

「…なのはちゃん、すずかちゃん、ありがとう。」

彼が今発した感謝の言葉は、なのはから見ればとても偽りに満ちている物には見えない。真っ当であって正真正銘、真実の話のようになのはから見ればそう聞こえた。

「じゃ、話も纏まってきたからそろそろお昼ご飯♪ アタシお腹ペコペコよ〜。」

「うん…なんだか急にお腹が空いてきたね。」

突然、お昼ご飯となると何時も通りの雰囲気に戻ってしまう。ごく普通の生徒のお昼の休憩時間のように、全員が口を揃えて「いただきます」と声を合わせた。

その様子だけは他の生徒と何も変わりはなく、昼食を楽しむ生徒であった。血生臭い殺し合いも超越した力も非現実的な要素は決してない、ありふれて何処でも見るような光景だった。

「この玉子焼きおいしい」とアリサが言えばさすが「そうなんだ」と反応する。それに続いてなのはも「このウィンナーもおいしいよ」と食事の話題で持ちきりだった。

悟飯はサイヤ人の血を引いている事だけあって食事は沢山摂取する――のだが、量が少ないせいもあってそこまで目立つ行動を取るわけでもなかった。

その代わり、どこか物足りなさそうな表情を見せていた。それは種族の特性上というものであり、一番の理解者であるアリサが彼の様子にすぐに気づく。

「仕方ないわねえ、アンタにこれあげるわ。絶対おいしいわよ。」

そう言うと玉子焼きの入った弁当を悟飯に見せ。

「え……？で、でも……。」

「悟飯くん、もしかして量が足りない？ わたしのウィンナー食べる？」

「…量が足りないなら、ご飯少しだけあげるよ？」

アリサの次に二人は察したようにお弁当を分け与えようとする。先程の話を聞いて以来、二人もちゃんと悟飯の物足りなさを理解しているのだ。

「気持ち嬉しいけど……。」

「あーもう！厚意は素直に受け取る！」

それでも取りそうにない悟飯にムツとした表情を浮かべながら強引に腕を引っ張って取らせようとする、思わずなのはとすずかは苦笑いを見せてしまう。

だが強引な方法を取らなければ、悟飯はせっかく自分に差し出されたおかずもご飯も受け取るうとはしない。アリサによってようやく彼は受け取るのだった。

「う、うん…。」と悟飯は玉子焼きやウィンナー、ご飯を少し三人から分けてもらい「ありがとう…。」と後に彼は感謝を口にする。

暫くの間は食事の時間。屋上から見下ろす風景の眺めの良さに感心しながら時間を費やしていく。やがて、今現在はお弁当の蓋を閉じた食事の終わり頃。

「あ…そういえば、新しいゲームを買ったから、学校がお休みの日にお家に来る…？みんなでやってみたいなって…。」

「わたしは大丈夫だよ。おにーちゃんも忍さんに会いに行くみたいだから。」

「アタシも行く！なのは、その時にユーノ連れてきてくれない？久しぶりに見たいし。」

「うん。いいよ、ユーノも連れて行くね。」

「悟飯、アンタも来なさいよね。話してなかったけどユーノってばすつごく可愛いんだから。」

話の外野にいる悟飯は、実はアリサからユーノの話などまったく聞いていない。突然「ユーノ」という言葉が出てきて彼は目を丸くしていたのだ。

確かにすずかとなのはの話は聞いていたが動物の事は耳にしていな。そのせいで話に入れないといった状況なのだ。

更に返事をする前にアリサは勝手に決めてしまう。もはやアリサの中では確定事項のような物である。実際の所、アリサはただ単純に悟飯にユーノを見せたいだけだが。

（やっぱりアリサちゃんって、ブルマさんに似ているなあ…。）

悟飯の知るブルマはアリサと共通した部分を持っているように感じられた。気が強く強引である所がそうだ、それでいてしっかり者であるという所もだ。

思わず似た部分を持つているアリサを見ては此処に来る前の自分の世界を少し思い出してしまふ。父親の事やあの戦いの事や大勢の仲間達の事を。

「ちょっと悟飯、聞ってるの！」

「えっ！？ あ…ごめん、聞ってるよ。」

「……本当に？」

先程まで別の事を考えていたせいですぐに反応する事ができずにいた。それをアリサに気づかれ、ジトと疑いに満ちた目を向けられてしまう。

悟飯はその目にどう対応すればいいかわからずに、ただ苦笑いを浮かべて誤魔化そうとする。「本当だよ。」と言えば少々不満が残りながらアリサは身を引いた。

時間は経過していき、全ての授業が終了した頃。放課後になって大勢の生徒達はもうこの時間には帰宅できる時間帯だった。

アリサ達も同様に他の生徒と同じように自宅へ帰ろうとしていた。そして今は帰り道、三人の少女と一人の少年が道を歩いている。

「悟飯くん、わたし達は塾があるから…。」

「あ、そういえば…悟飯、一人で帰れるわよね？」

「大丈夫だよ。家までの道は覚えているから。」

すずかの声で全員の足が止まると悟飯は振り返り様に答える。自宅、つまりアリサの家へのルートは複雑な経路ではない、そのおかげで彼は一回で頭に入っていた。

「ならいいけど。じゃアタシ達はこっちだから、またあとでね。」

「悟飯くん、また明日ね。ばいばい。」

「…気を付けてね、悟飯くん。また学校でね。」

すずかとなのはは優しい笑みを悟飯に向ける、アリサはただ彼を見つめており、塾の事を考えているのか反応が薄いように彼は感じてしまう。

「うん、またあとで。バイバイ、なのはちゃん、すずかちゃん。」

彼の声と同時にアリサ達は塾がある方角へと向かっていく。三人と

別れた悟飯は相手の背を見送った後、再び歩き始める。自宅へ向かってだ。

暫く歩き続けていると太陽は沈み始める、空は水色から藍色へと、白い雲はオレンジ色に染まりきる、朝や昼には見られない光景が夕方方には広がっている。

平凡で毎日ごく普通の生活の繰り返し——それは本来、子供が送るべき生活であり孫悟飯がある意味では送るはずだった生活なのかもしれない。

「おい！なんか言えよ、調子のとてんじゃねえぞコラー！」

道路を歩いていた悟飯は急に立ち止まった。目に見えるほどの近くの広大な海の方から潮風がこちらへやってくる、それとほぼ同時に風の音と共に聞こえてくる男の声。

あまりにも挑発的で誰かを威嚇しているような怒鳴り声だ。人によつては聞いているだけで不快な気分させられる程の低音の声。悟飯は聞こえてきた方面へと目を向ける。

それは下方面だった、其処にもちゃんとした道路が設置されており、声の正体と思われる不良のような男がいた。更に近くにも似たような男もいる。

「……………」

「テメエ、さつきからシカトしてんじゃねえぞ！とつと車代弁償しやがれっ——！」

その声を向けられているのは、まだ幼い悟飯と同年代かと思われる少女。長い金色の髪をツインテールにさせ、黒い服を着たその少女はただ相手の目を見つめるだけ。

更によく観察してみれば男達の近くには車があつた。だが不自然な事に車は目の前のガードレールを突き破ってしまったている。そのまま前進すれば海の方面へ落下してしまう距離だ。

「……………」

「このガキ…痛い目をみねえとわかんねえようだな。」

遂に苛立ちを抑えきれなくなった男は少女の肩を掴む。それは誰もが暴力行為を予想できる行動だった。

「——やめてください!!」

だが抑えきれなくなったのは悟飯も同じであり、その動機は男達とは異なるものの、見ていられなくなり道路から下に位置する道路へと一気に飛び降りる。

そのまま地面に怪我もなく見事に着地し、強い視線を男達に向ける。——突然のトラブルに遭遇してしまう悟飯。そして無表情を浮かべる金髪の少女は一体何者なのか。

第5話 悟飯、初めての学校（後編）（後書き）

ヤバイ…思ったより長くなった……。

第6話 もう一人の金髪の少女

悟飯は眼前の男に目を真っ直ぐに向ける。向けられている本人は突然、少年が乱入してくる事に驚きを隠せずにした。

だがそれは金色の髪を伸ばした少女も悟飯の登場には表情を変化させていた、先程の無表情ではなく、ぼんやりと彼を見つめている。

（コイツ、何処から現れたんだ…？）

身長差のある少年を見下ろしながら男は思う。男達からすれば悟飯は気がついたらその場にいたのだ、男は少年を激しく睨む。

「あん？ 誰だデメエは…。」

「坊主、これはお前みたいな子供が首を突っ込むものじゃない。さっさとお家に帰りな。」

今まで会話に挟まず、ただ様子を見ていた筈のもう一人の男が口を出してくる。その男は何処かもう一人の者とは違い、やけに冷静な態度だった。

そんな事をしている間にも少女の肩を掴んでいる男の手にはどんどん力が込められていく、確実に強くなっていることを少女は実感しながら男を睨む。

男は更に力が強くなっていき、それと同時に少女は肩から痛みが走る、徐々に表情が歪みに満ちていった。

「その子から離れてください！イヤがつてるじゃないですか。」

「なにいゝ？おい、兄貴の言う事が聞けねえのか！」

それを見た悟飯はすぐに声を上げて呼びかける、金髪の少女は未だに痛みを耐えて男を睨みつけているが何もしてくる様子はない。

男が怒りにも満ちた声で突然荒げる。それは感情に任せての言葉であり、少年を怒鳴りつけるように言う。

「まあ、待て。坊主…勘違いしているようだが、俺達の車がこうなつたのはお嬢ちゃんの所為なんだ。

車を走行している途中にお嬢ちゃんが道路を歩いてて、ぶつかりそうになって避けた所こうなつた。つまり俺達は被害者なんだよ。」

ガードレールを壊してしまっている車をもう一度、悟飯は確認する。確かに衝突した事自体は事実のように見える。

だが本当にこの少女が原因なのか疑問に思う。確かにぼーっと歩いていたらそんな自体になつた可能性は否めないが。

悟飯は何故か信じられることができずに、何も言い返そうともしない美しい金色の髪をしたその少女へと問いかける。

「今の話本当なの？」

「……………」

やはり何も返つてはこなかった。せめて首を振る、頷くなどの動作を悟飯は期待したがそれさえも叶う事はなかった。

ただ何かこの少女が行動を起こした物といえば、「俯いた」という事ぐらい。前髪が表情を隠して、下から顔を覗き込まない限りは顔を把握するのは困難だった。

「それにしても、さつきから無口だなこのガキは。その癖生意気な態度を取るし、こりや親に請求しても意味ねえか。

仕方ない、お嬢ちゃんを売ってその金で勘弁してやるよ。お嬢ちゃんは見た目とか大したタマだしな…。」

俯いたという事は少なからずこちらに反応はしてくれている。その反応は男や悟飯が望んでいる態度ではないが。何処かこの少女は異質さを感じてしまうのだ。

その異質さの原因は他には見ない綺麗な外見と性格だ。何も喋る事もなければ無表情のまま。男達もこの少女に対して何か他とは違う異質を感じ、不気味に思っていた。

先程の話が仮に本当であるなら、少女には少なからずこの事件の原因となってしまう。かといって売るという行為は決して許される物ではない、悟飯は思わず拳を強く握り締める。

悟飯は今すぐにでも行動を起こしたい。それが本心だった。だが此処で事件を引き起こせばアリサにも少なからず何かの影響を届いてしまう事になる。

自分だけ影響が来るのであれば何も問題は無い。だが無関係であるアリサまで巻き込む事になるという事実がある限り悟飯は下手に動けないのだ。

「ま、恨むなら此处を通った事と、そんな性格に育てた馬鹿な母親を恨むんだな。」

何時までも無言。不気味そうに男は言いながら、どういつ教育をすれば此处まで無口になれるのか不思議に思う。掴んでいた物が肩から腕へと変わり、強引に連れて行こうとする。

それを見た悟飯は怒りに震えていた。どうする事もできない悔しさや優しさから来る衝動的な感情、それはピークを迎えて動き出そうとした瞬間に――。

「やめて…母さんを馬鹿にしないで!!」

突然、その場で聞いていた声とは違う、聞いた事の無い声が叫ぶように響く。悟飯は驚いて少女を見れば彼女の真っ赤な瞳が視認できる。

そして瞳の先には男がいた。真っ直ぐに睨みつけている、先程の弱気で何も感情を抱いていないような無表情を浮かべる彼女とは違っていた。

今は強気ではつきりとした怒りに満ち溢れ、人によっては急な態度の豹変に驚いて恐怖でさえ覚える。それほど彼女の反応はあまりにも唐突過ぎる。

だがそれは少女の初めての反論であり抵抗でもあった。掴まれている腕を振り解くように手を弾く、何も喋らない故に油断していた男はすぐに弾かれてしまう。

「——この…クソガキッ!!」

激怒した男は容赦なく少女を突き飛ばす。その衝動はあまりにも力が強すぎたのか、足元のバランスを崩しながら、ポケットから金色の三角形の宝石が零れ落ちる。

当の本人である彼女自身はたまたま突き飛ばした方向が悪かったせいで突き破られていたガードレールの方角、つまり海の方角へと落下していく。

男達は驚いてしまう。突き飛ばされる方角が海になるとは予想していなかったのだ。計算外の出来事に戸惑いを隠せない様子で重力に引っ張られていく少女を見る。

それは誰でもわかる死への前触れだった。この距離から海へ叩きつけられれば全身の痛みは半端な物ではない。コンクリートに叩きつけられるのと同じ激痛が襲い掛かるのだ。

海の中へ入ればもう生きて帰れない。死はもう直前だ。命の綱となるような物は周りには存在していない、例えあってもそれを掴む事ができるかどうかも定かではない。

(……母さん、ごめんなさい……。)

最後に彼女が思ったことは自身の母親への謝罪だった。もう彼女は

悟っている、この浮遊状態の中で直感となって前身に危険信号を発していた。

少女の金色の髪が揺れ動く中で悟飯はすぐに崖を真つ向から飛び降りる。少女を追いかける為、そのまま少女と共に落下していく――

「げっ！ ど、どうでしょう兄貴――！」

「慌てるな。幸い俺達を見ている奴等はいない……今のうちにズラかるぞ。」

手下のような男は「へい！」という声と共に車を置き去りにした状態でその場から走りながら立ち去っていく。男達は、犯罪に該当する人殺しという行為をやってしまったのだ。

そのせいで一人の男は慌てていた。確かに怒りで半分、我を失った状態ではあったが何も殺意がなかったわけでもない。兄貴と称される男の声でやっと落ち着きを取り戻しながら去る。

「（このままじゃ間に合わない……）……はッ！」

一方、落下していく悟飯は自分より先に落ちた少女を追っていた。空中にいる間の瞬間、武空術という気を使って空中を浮く術を使用する。

それにより悟飯は宙に浮いた状態となり、体制を立て直すと同時に急降下する、少女が海へ叩きつけられる前に、横抱き――別名、お姫様抱っこの状態で受け止めた。

「え……?」

小さく漏らす声。目を開けてみれば自分と同じぐらいの少年が自身を抱えている事によりやく気がつく。このまま海へ叩きつけられると直感的な判断により理解していた少女は、空中を浮くという非現実的な形で助かっている事実を頭に入れる。だがその頭に入れる間、はとも時間を用意してしまう。ぼんやりと悟飯を見つめていると彼は優しく微笑んでいた。

浮上していくと道路にまで戻ってくる。其処にはもう今まで少女を脅していた男達はいなくなっとなっていた為か、ほっとした安心感を感じる。やがて悟飯は少女を道路へと下ろす。

「……ありがとう。後、さっきのは……?」

改めて悟飯と目が合う。そして呆然と彼を見つめながら問いかける。さっきのは、という言葉の内容はつまり武空術で飛んだ事に対する説明を求めているのだ。

「どういたしまして。あ、あれはその……。」

だがその求められる説明が悟飯にとって説明しづらい物である。見つけてくる少女の視線に向き合う事さえも困惑気味だった。少女といえば、悟飯の困り果てた様子に首をかしげているだけであ

る。上手く悟飯の状況が飲み込めていないようにも見える。

そんな事をしている間にも、車方面から複数の足音が二人の耳に入ってくる。何事かと思い二人はそちらへ目を向けた。

「おっ！あつたあつた。ふう〜危なく財布を置いていくところ……………」

「

少女を恐喝していた男が戻ってきていた。発言から見て恐らく財布を忘れて取りに戻ってきていた所なのだろう。

「おい、財布はみつかった……。…………な、なんでお前達が…っ!？」

しかし男達は自分の姿を見るなり体を一瞬フリーズさせてしまう。まるで化け物でも見るかのような目で二人を見ているのだ。

「くっ、ガキ共が生きている理由は知らねえが、俺達の事を警察に通報される前に急いで逃げるぞ！」

突然、二人に背を向けた。そのまま慌てて男達は道路を逃走していく。警察に通報される可能性を恐れての疾走であり疚しい事である。だがそんな態度を取ってしまう男達に対して、悟飯は彼等への印象は最悪最低な物であり、正義感から来る感情で許せない行為そのものだ。

金色の髪を風に揺らす少女はただ啞然とした様子でその場に留まっている。もはやどう対処すればいいかわからなければ何を口に出せばいいのかもわからなさそうに。

「……りゃああつー！」

悟飯は逃がす訳にはいかないとすぐ近くのガードレールを壊している車に目を向けた。彼は車を片手で持ち上げると男達の方面へと投げつける。

車は現実離れた凄まじい速度を持って走り続ける男達の真上を通過して真つ黒な巨大影が出来上がる。手下の男が見上げるとその物体に思考を忘れ頭が真つ白になってしまう。

其処には自分達とぶつかれば簡単に命を奪い取る事ができる巨大な車が前方へと落下していた。衝撃破のように轟音が響き渡ると同時に車は地面へと叩きつけられる形で衝突した。

「ほんぎゃあああああああああーっ！……！」

あまりにも目の前の恐ろしい現象に青ざめた顔で絶叫と共に気絶をしてしまう、だがそんな反応をしても無理はない。空から車が降ってくるなど、何処のおとぎ話にも存在していない。

少女もまた悟飯の馬鹿力に目を丸くしている。そして彼女は次々と引き起こす少年の超常現象を目撃して、只の少年ではない事ぐらい容易に理解する事ができた。

暫く、あまりにも衝撃的な現象から暫く少年に目線を向けていると彼は少女の前方に手を広げる。謎の動作に思わず少女は首をかしげ

て手をしぶしぶ見つめていた。

「はい。これってキミのでしょ？」

「！！…バルディッシュ……。」

悟飯には聞こえない程の小さな声で少女は口にする。彼が手に持っていたのは美しい金色に輝く三角形型の宝石だった。太陽の光に照らされ、黄金に輝いているようにも見えた。

今時、このような形をした宝石は目にしない。悟飯は三角形型の宝石を物珍しく思いながらも、少女のポケットから落とされる宝石を見逃していなかったのだ。

「うん…私のだよ、ありがとう……。」

出てきたのはお礼の言葉だった。男達に絡まれていた時は無口無表情な態度を崩さなかったが、今は少しだけ喋るようになってきており、先程よりも会話のしやすさを悟飯は感じる。

思わず悟飯は微笑んでしまう。その態度に何故か少女はびくつと体を震わすように反応するが、悟飯にとってその反応がよくわからなかった。

——しかし、少女は悟飯から目線を逸らしてその後ろの方角へと驚いた表情を見せた。かくいう悟飯自身も何か背後からおぞましい殺気を感じ取り後ろを振り向く。

「このガキがああああッ!!」

「…危ないっ!!」

兄貴と言われていた男がいたのだ。普段の冷静さを見失った男はまるで我を忘れたように自暴自棄になりながら悟飯に殴りかかってきたのだ。

しかし殴りかかろうとする刹那、一瞬の間に男の前から悟飯は姿を消していた。狙っていたターゲットが視界からいなくなっている事に男は一瞬だけ啞然としてしまう。

そのターゲットにされている本人は今度は襲い掛かってくる男の背後を取っていた。今にも殺気を放っている目の前の男の首筋に「だあっ!」という掛け声と共に手刀を叩き込む。

動作は僅かな時間を要するだけ、人間離れた信じられない身体能力を発揮していく少年に金色の髪の少女はもう目で追いつく事はできなかった。

手刀を入られた男といえば、叫び声が急に消え去って地面に倒れこんでしまった。殺したのではなく気絶したのだと少女はすぐにかる。

「後は警察に任せれば大丈夫かな?」

「……大丈夫だと思う。私はそろそろ帰らなきゃいけないから……。」

「じゃあ、ボクが家まで送っていくよ。」

さっきのような事件を通したからこそ悟飯はその言葉をかけた。またこの少女はあのような男達に絡まれる可能性がある、もう太陽は沈みきり夜になろうとしている時間帯。

もし夜になった時間帯で一人歩くのは危険な行為だった。また其処に悟飯のように助けに入る人物がいるとは限らない、今回の事も悟飯が通りかかるといことはとても運が良い。

「私の家は近いから、心配いらないよ。……本当にありがとう。」

その少女はとても元気がなさそうに悟飯は見えてしまう。表情には暗い影が残りながらもその場から立ち去っていく、綺麗な金色の髪を悟飯は見つめながら後を見送る。

暫くの間、時間は流れ過ぎ去っていった。アリサと同じ金色の髪を持った少女と出会ってから、男達との一件もあつて悟飯が思った以上に時間は経過していたのだ。

それを物語るように暗闇が周りを包み込む夜となっている、あの少女が無事に家まで帰る事が出来たのか少し不安に思いながらも悟飯はアリサの家へ戻っていく。

（すっかり遅くなっちゃったな…。）

だが、悟飯は扉の前で立ち止まってしまふ。というのも彼はアリサと別れる間に交わした言葉を不意に思い出してしまったのだ、「家にいる」という言葉を。

つまり自分が帰る前にはもう家に戻っているという内容なのだ。何

時まで扉の前に立っているわけにもいかず、悟飯は恐る恐るその扉を開けてそーっと中へ入ろうとするが…。

「こゝはぐんぐん……？」

「あ…アリサちゃん……。」

唐突に後ろから見慣れた少女の声が聞こえてくる、それは悟飯が今もつとも恐れていた人物であり、できる事ならなるべく避けて通りたかった人物が前方にいたのだ。

白い制服を着た、自分と同じぐらいの年齢で、今日出会った少女のツインテールの長さほどもある、腰に届くほどの長い金色の髪を持った少女――。

「おーそーいー！　今までどこで道草食ってたのよ！」

「え、えーっと…それは……。」

――その後、悟飯は遅くまでアリサに何をしていたのかみっちり追求されたのは言うまでもない。なにはともあれ、悟飯の長い一日が終わりを迎えようとしていたのだった…。

第7話 「友達」との再会と不思議な球（前編）

——夜は明け、朝が訪れる。太陽は起きてくる者を出迎えるように日光が部屋に入り込んでくる。それは悟飯も例外ではない。今、彼がいる場所はアリサの家であり、自分の自室だ。窓から光が入り込んでくる事で室内はとても明るく照らされていた。

今日はさすがの家に行く為にも私服を着込んでいる。彼にとってこの世界の衣装を身に纏うのは何処か着心地が違ふような感じがして最初は慣れない体験の連続だった。

だが今ではもうすっかり慣れてしまったのか、特に悟飯は何も感じることはなく、そして悟飯は不意に自身の日常で起こるありふれた事を思い出す。

よくこのタイミングになるとアリサが自分を呼ぶ声が家中に叫ぶように響くのだが、今回の悟飯は早起きをする事でそれを回避していたのだ。

毎回毎回、アリサに何度も呼ばれるというのは悟飯自身、何も思わないわけではなかった。

「アリサちゃん遅いな〜。」

早速準備ができたので家の玄関で悟飯は待機していた。だが何時も待ってくれている筈のアリサの姿はいなかった。で、退屈そうに待ち続ける。

「おはよう悟飯。珍しいわね、アタシより早く起きてくるなんて。」

待ち望んでいた人物が顔を出す。アリサはピンクに近い赤色の服装を纏っており、対して悟飯は青いパーカーに水色の半ズボンだった。

「おはようアリサちゃん！あはは…多分、昨日は早く寝たからじゃないかな。」

「ふーん、まあいいわ。鮫島が待っているから早く行きましょう。」

予想通りに、悟飯を呼ぶ声が響くことはなくスムーズに展開は進む事になる。玄関の靴を履いた後、扉を開けて外へ出てみれば大きな庭にたどり着く。

アリサはお金持ちという事だけあって普通の家と比べかなり豪華な家であった、当初悟飯は怪我が治って改めてアリサの家を歩いていて気がついた事の一つだ。

肖像画が壁に飾られていたり部屋が何個もあつたり犬を何匹飼っていたりと家に住み慣れていなかった頃の悟飯にとっては冒険をしているかのように新鮮な物だった。

思い返してみればそんな短期間の間にも悟飯にとっては幾つもの数え切れない思い出が出来上がっており、学校での出来事も思い出の一つであればこの家もまたそうである。

「お待ちしておりますましたアリサお嬢様、悟飯様。」

鮫島が黒いベンツ型の車の近くで自分達を出迎えてくれた。そのま
ま彼は後ろの席の扉を開けると同時にアリサと悟飯はその中へ入り、
席に座る。

だが悟飯にとっては、このような車を使うようよりも自分自身の身
体能力を駆使してすずかの家へ行く方がよっぽど早いのだ。その辺
り少々複雑な気分にもなる。

とはいえこの世界ではそれが「常識」なのだ。それはきちんと悟飯
は理解しているつもりだった、だからこそアリサと同様の行動を行
っていた。

「待たせてすみません、鮫島さん。」

「待たせたわね鮫島。もう出発していいわよ。」

「かしこまりました」、と彼はすぐに応答する。車は庭の門を出て
すずかの家へと向かっていくのだった――。

数十分後、庭の門を潜り抜けてすずかの家へと到着する。アリサに
とってはとも見慣れた光景なのか特に何も反応を見せる事は無く、
軽く窓から覗き込んでいた。

それはアリサの家に負けないほどの立派な建物であり、豪邸と呼ぶ
に相応しかった。そんな家にアリサは何度も来ている為かもうなれ
た様子だった。

（うわぁーアリサちゃん家と同じくらい大きいなあ。）

それに比べて、悟飯がすずかの家に訪れたのは今回がはじめての経験である。故にアリサとはまた異なった反応を見せており、珍しうに窓からあちこち見回している。

やがて車が停止するとアリサは扉を開けて外に出る。すぐにアリサは迷い無くすずかの家まで歩いていく、しかしアリサの後から外に出た悟飯は相変わらず珍しそうに見渡していた。

その行動は初めてアリサの家に訪れたときのような態度であり、置いていかれている事に悟飯は気がつくとアリサを追いかけるようについていく。鮫島は用が済んだ為、そのまま車で帰宅する。

先に扉の前にいるアリサがチャイムを鳴らすとすぐに扉は開く。開けてくれた人物はとても身長が高いのか悟飯は見上げてその顔を目にする。

「アリサお嬢様、悟飯様、いらっしやいませ。すずかお嬢様がお待ちしております。」

彼等を出迎えてくれたのは薄い紫色のショートヘアーの髪型をした、大人の女性である。白い服を身に纏っており、立ち振る舞いや言動から鮫島のようなお世話係の人のだと悟飯は理解する。

そのまますずかが待っている部屋へと女性はアリサ達を案内する、そして部屋に入ると彼等の視界に入ってきたのはテーブルの椅子に座るすずかがだった。

更によく見渡していると部屋中には大量の猫――。黒い猫もいれば茶色い猫もあり、まるでアリサが飼っている沢山の犬を猫に変えたような光景だ。

そして目に見えてきたのはすずかによく似た女性が優しく微笑を浮かべながら椅子に座ってこちらに目を向けている。そして先程の女性のような服装をした女の子も同様に。

「アリサちゃん！悟飯くん！おはよう。」

「悟飯くん！アリサちゃん、いらっしゃーい！」

薄い水色の髪をした、背中ぐらいまで伸ばした女の子は明るい笑顔で挨拶をする。同じ服装をした女性はとてもクールな美女、そしてすずかとよく似た女性はとても落ち着いた印象を受け取る。

だがそんな落ち着いた大人な雰囲気を持つ女性達と違って、その女の子だけは何処か明るい少女といった印象を強く悟飯は感じてしまう。自分達より年上だが、他の人と比べれば幼さが残っている。

「すずか、おはよう。それと忍さんもファリンさんもおはよう。」

「おはよう、すずかちゃん……と……。」

だが悟飯は戸惑いを隠しきれずにいた。まったく見知らない人達に囲まれている環境下、そして何故か自分の名前を知る女性達に困惑気味だった。

どう対処していいかわからず、悟飯は言葉に詰まってしまふ。礼儀

云々は母親から教えられてはいたものの、今のような特殊な状況下では年齢相応の反応を見せていた。

「失礼しました、悟飯様。この子はファリン・K・エアリヒカイト。そしてこちらの方がすぐかお嬢様のお姉様、月村忍お嬢様です。それと私はノエル・K・エアリヒカイト。ファリンの姉です。」

「よろしく願いますね、悟飯くん！」

「君がすぐかのボーイフレンドの悟飯くんね、よろしくね。」

ファリンと忍は明るく優しそうな笑顔を浮かべるが、忍だけ悟飯の反応が楽しみなような、何処かファリンとは雰囲気異なった笑顔だった。

「へ？いえ、違います——。」

「ちがいます!!」

意外にも過剰に反応したのは悟飯ではなくアリサの方であり、忍の術中に嵌ってしまった。だがアリサの反応はからかってきた本人も多少驚いていた。

「あら、ごめんなさい。アリサちゃんの彼氏だったのね。」

「な…！？　ちが…！！」

アリサの慌てぶりには誰もが見てわかる程であった、頬を真っ赤に染めてわたわたと視線が泳ぐ、その様子を見てすずかとファリンは少し苦笑い気味に眺める。

途中、その視線は悟飯と目が合う事になるが、何故アリサが此処まで困り果てて動揺してしまっているのか悟飯には理解できず不思議そうに首を傾げていた。

（悟飯くんってにぶいんだね…。）

そんな悟飯の態度を見てすずかはすぐに勘付いてしまう。彼は今の状況を的確に捉えていない事に。恐らくそれはファリンも同様に思っているのだろう。

ノエルはただその場を見守っていた――。そうしている間にも時間は過ぎていき、悟飯はすっかりその間に会話をすることで初対面の相手とも仲良くなっていくのだった。

だが仲良くなれたのは人間だけではなく、動物ともだ。彼等が座っているテーブルの周りには大量の猫がいる。悟飯が座ろうとしていた椅子にも猫が寝転がっていた。

「お茶をご用意いたしますが…悟飯様、アリサお嬢様、何がよろしいですか？」

「任せるわ。」

「ボクは…わあっ!？」

が、どけようと悟飯が猫を持ち上げようとした瞬間、猫は突然悟飯に飛び掛る。そのせいで足を崩し、尻餅をつくと同時に他の猫も飛び掛っていく。

だんだんその猫の数は増え続けて悟飯の姿が確認しづらくなる中でアリサは少しため息を漏らす。それと同時にアリサはノエルに言う。

「…悟飯の分も任せるわ。」

「かしこまりました…ファリン。」

「はい、了解です。お姉様!」

そのままノエルとファリンは一度、悟飯達に頭を下げてお辞儀をするとお茶を用意する為にその場から出て行く。少し静かになった部屋だが悟飯と猫のせいでそうは感じられない。

「悟飯って相変わらず動物に好かれるわね。」

アリサがその様子を見るとそれに対しての感想を呟く、その間にも悟飯は大量の猫に埋もれていき身動きが取れない状態になっていた。

「相変わらずって、アリサちゃん家でも…?」

「うちの犬に好かれて、丁度こんな感じにね。」

呆れ半分、微笑ましき半分、そんな心境でアリサは語っていた。すずかは少し呆然としながら悟飯を見ている、彼女にとって此処まで動物に好かれる人物は初めてなのだ。

「あはは！くすぐつたいよ〜。」

猫に覆われているせいで悟飯の姿が確認しづらくなってきた、しかし声が聞こえてきたので大丈夫であると二人は少し安心する。

「…いいなあ、悟飯くん。こんなに好かれて…。」

「アタシもそれ思った！」

思わず、悟飯の様子を見ながら言うてしまう。それはすずかにとつての本音であり、猫好きだからこそ思う本音だ。しかしその本音はアリサも同じ事を感じている。

アリサの場合は猫に対してではなく犬相手ではあるものの、悟飯のこの懐かれぶりには少し羨ましくなってきた。二人の視線を浴びながら悟飯は猫のくすぐったさに笑っていた。

——すると、突然、足音が廊下から聞こえてくる。それはしつかりとアリサもすずかも忍も、猫に埋もれている悟飯もちやんと耳に

入ってくる。

悟飯を除く全員の視線が扉に注目すると、全員にとっては予想通りの展開となる。ノエルが扉を開けた、其処には全員が待ち望んでいたのはとなのはの肩に乗ったフェレットと、忍と同じくらいの年代の男がいた。

「なのはちゃん…恭也さん…！」

「すずかちゃん…って、ふえええ！？」

すずかは親友であるなのはが来てくれたことに思わず椅子から立ち上がって微笑を浮かべる。なのはも同じように嬉しさのあまり笑顔を彼女達に向けてしまう。

——が、なのはの笑顔は一瞬で崩される事になる、たまたま目に止まった猫に包まれている悟飯。しかし猫のせいでもはや悟飯である確認できないほど猫の集合体と化していた。

「あ、あれって…なに…？」

「そういえばなのはは知らなかったわよね。悟飯が動物に好かれやすいつてこと。」

アリサの言葉にきょとん、とした顔でなのはは見つめてしまう。すずかはそんな態度を取ってしまうのはに苦笑いを彼女に向けてしまう。

まるで猫と合体した奇妙な物体にも見える悟飯を見て、もはや好か

れやすいというレベルを超えてしまっているようになるのはは感じていた。

「助けなくていいの…？」

「まあ、何時もの事だからほつつておいても大丈夫よ。ウチでも毎日こんな状態だしね。」

「い、いつもなんだ…でも、動けなさそうに見えるけど…。」

戸惑いを隠しきれずにいるのはは悟飯に目を向けながら彼女達に言う、確かに先程から何も言葉を発さない悟飯にはアリサも違和感を感じ始める。

「…さすがに、ちょっとまずいんじゃないかな…？」

「そう言われてみれば…すうー…こらー！！　悟飯からはなれなさーい！！」

危機感を示し始めるすずかに同調するようにアリサも椅子から立ち上がる。少し息を吸い込むとそれを全て吐き出すように大声で猫達に怒鳴りつける。

無論、猫も驚いて悟飯達から次々と離れ始める。というより他の者から見ればアリサから逃げているようにも見られるが、次々と猫が出入り口へと逃げていく。

「はい、お待たせしましたー！ いちごミルクティーとレモンティーと、クリームチーズクッキーでーす！」

「ファリン、あぶないー！！！」

「お、お菓子がー！！！」

「うそー！！！」

心が晴れるような明るい笑顔でファインは紅茶や菓子を持ってきてくれる、が、ファインが通ってきた通路は猫が逃げていった通路でもあり、足元に大量の猫が配置されていた。

猫の大群を避けようと試みる彼女だがあまりにも数が多すぎてバランス感覚が崩れ「わっ、わっ……。」と短い悲鳴を上げながらもなんとか足のバランスを保とうと必死になる。

しかしその努力が結果的に更に悪化させ、猫がいなくなった頃にはファリン自身は目が周ってすっかりバランス感覚が完璧に崩されていたのだった。

なのはとすずかとアリサはほぼ同時に飛び出て、なのははファリンの左腕を支え、すずかは右腕を支える、そして最後にアリサはファリン自身が倒れぬように背中を支える。

そのおかげでファリンは倒れる事も無ければ手に持っていたお茶や菓子を落とす事は無く——恭也や忍にはそう見えたがよく見てみると皿が地面へと落下しようとしていた。

「お皿が……！！！」

刹那の間に、忍の声と同時に恭也が動いていた。皿が地面に衝突する前になんとか手を伸ばしてそれを掴み取ろうとする、その速度は常人とは思えない動きだった。

「——！！」

だがそれを軽々と容易に超えてしまう少年がいた、先程まで猫のせいで地面に倒れこんでいた悟飯が、年齢にも差のある大の大人の恭也よりも速く皿をキャッチしていたのだ。

それも一つも逃さずに、改めて悟飯という少年の姿を確認する恭也であったが、まだまだ幼さの残るなのと同じぐらいの少年である事に、彼の身体能力に驚きを隠しきれなかった。

「ふう、なんとか間に合った…。」

「悟飯ナイスう！」

安心したため息を吐く、更に乗っている菓子も特に損傷するわけもなく無事なようだった、アリサは悟飯の見事な行動に笑顔を浮かべながら褒めていた。

しかし、三人は特に驚く様子も無く寧ろ大惨事にならずに済んだ事にほっとするが悟飯の行動を見た恭也と忍、ノエルはもはや人間離れしてしまっている悟飯の身体能力を見て夢でも見ているような気分だった。

「はうあゝ！？ 三人ともごめんなさあーい！！」

「にやはは…大丈夫だよ、ファリンさん。みんな怪我もなかったんだし。」

「うん…ファリンこそ平気？」

「私は、みんなのおかげで大丈夫ですー…。」

ファリンは暫くの間、目が回っているせいで少し意識が途切れつつあったがようやく自分が三人の少女に支えられている事に気がつく事ができる。

足の感覚を取り戻し、体勢を立て直す。悟飯は安心した表情を見せてテーブルにお菓子が乗った皿を落とさないように置いていくのだった。

その間の行動に誰かからの視線を感じた悟飯は感じた方角へと目を向ける、そこには恭也がおり、そのまま目があってしまう。

（今の動き…只者ではないな……。）

「あ、悟飯くん！こっちはわたしのおにーちゃん、高町恭也だよ。」

二人に気がついたなのはが輪に入ってくる、恭也と悟飯はこの時点で初対面でありせめて自己紹介でもしておこうとなのはは踏んでいたのだ。

「よろしく願いします恭也さん。ボクは孫悟飯です。」

悟飯は年上だからこそ、頭を下げておく。母親からの教育で敬語をしつかりと話す悟飯に対して恭也は悪い印象は受けず、しつかり者のようにも見えていた。

「高町恭也だ…よろしく悟飯くん。所で君は…いや、なんでもない。なのはと仲良くしてやってくれ。」

何も微笑を浮かべるわけもなく無表情で彼は答える。悟飯にとって今まで出会ってきた中で一番に彼は少し浮いた存在でもあった。年齢という面からでもそうだが性格もそんな風に見えるのだ。あまり口数が多い印象を受けず、無口のようにも感じてしまう。だが悟飯にとって、彼が浮いた存在になるのは年齢と性格、この二つの面だけではなかった。

（恭也さんから強い気を感じる……。）

沈黙の中にも何か強い気を感じてしまうのだ、悟飯にとってはこの世界の中で一番に強い気を感じた相手。だからこそ、このメンバーの中で一番に浮いた存在だった。

「…じゃあ、私達は部屋に行くから。行きましょ、恭也。」

「ああ…。」と恭也が言うと忍と手を繋ぎ、ノエルが後に部屋までお茶と菓子を用意する事を伝えると二人は部屋から出て行く。後に続くようにノエルとファリンも同じように部屋から出る。

——自己紹介を終えて、あの騒動があつてから悟飯達は場所を変えて紅茶と菓子を飲んだり食べたりしながら会話をしているのだつた。

「クアッ、クアックアッ！」

一方、全身を紫色で覆われた小さな奇妙な生物が草陰でごそごそと動き回っていた、目が大きく何処か愛らしい外見をした生物はすずかの家の外、庭の位置にいる。

猫でも犬でもない、この世の動物にも属さない異形の生物は途中ですずかが飼っている猫と遭遇したが、この生物は威嚇するわけもなく相手にすることも無かった。

「クアッ、クアッ！」

ドラゴンのような生物はまるで誰かを探しているようだった、しかし見当たらずに途方にくれている様子である。

この生物は大勢の猫に睨まれながらも攻撃するわけもなく、ただす

ずかの家へと近づいていく、だが途中でその生物は歩みを急停止させる。

—— オレンジ色の球体をした、ボール。丁度、子供が片手で掴み取れるほどの大きさをした球体を紫色の生物は見つけたのだ。その生物は球体をよく観察をしてみる。野球ボールぐらいの大きさを持つオレンジ色のボール、そして真ん中に青い星のマークがついた丸い綺麗な宝石。

日光に浴びる事で更にそのオレンジ色の輝きが強く増す、美しい色を持った宝石のような球体に生物は近づいていく。

「……クアッッ？」

目の前まで行くと、首を傾げた。ドラゴンが注目しているのは一つの青い星であり、それを数分間、見つめ続ける。

やがて生物は大きく口を開けて球体を飲み込んだ。すると突然、ドラゴンのような容姿をした生物は体全身が発光し始める。

強力な光が全身から発し、太陽の光がその生物に浴びると更にその光は強くなっていき、まるで突然変異でも起こるかのように生物は巨大化していく——。

やがて光が止んだ先には、非現実的な進化を遂げた超巨大なおぞましい容姿をしたドラゴンが太陽の光を遮るように立ち塞がっているのだった。

—— 果たして、この生物の正体、そしてこのドラゴンが飲み込んだ青い星のついたオレンジ色のボールとは…？

第7話 「友達」との再会と不思議な球（前編）（後書き）

ようやく、原作に入れた〜。そして、あのドラゴンの正体が分かった人はかなりのDB通だ！

第8話 「友達」との再会と不思議な球（中編）

時間は少し遡って――。

「ユーノくん、おいで！」

外のテーブルにて、四つの椅子にそれぞれ悟飯達が座りテーブルを囲う中、なのはは肩に乗ったユーノと呼ばれるフェレットをテーブルにおろす。

人に囲まれていながらもそのフェレットは取り乱す様子は無く、落ち着いた態度でその場の全員の視線を浴びていた。

（あれ？ この子からもなのはちゃんと同じようなものが感じられる…。）

目の前のフェレットは確かに猫や犬と変わらない、動物であり生き物だ。それは見た目からしてそう判断する事は容易なことである。

だが悟飯にはどうしても腑に落ちない気持ちになっていた。前になのはを治療した時に感じられた異質な力をこのフェレットからも感じ取れるのだ。

「これがなのはの飼ってるフェレット、ユーノって言うのよ、悟飯。アンタは見るのが始めてだったわね。」

「うん…そうだよ。」

悟飯はユーノから目を離すことは無く観察するように目線に向け続ける。此処まで悟飯が夢中になって動物を見るのはアリサは少し違和感を感じてしまう。

ユーノといえば、真っ直ぐに見つめてくる悟飯に同じように視線を向けており、まるで睨めっこでもしているような風景になのはとすずかは苦笑いを浮かべて見守る。

「悟飯くん…フェレット、見るのは初めて？ ユーノくん、少し困ってるよ…。」

「えっ？ あ、ごめん。ちょっと珍しかったから…。」

よく見てみるとユーノは冷や汗を流していた、表面はとても落ち着いて凛々しい態度ではあるが焦りをこの生き物は感じているような、奇妙な雰囲気を発している。

だがそんな中で改めて悟飯は思い返してみるとパオズ山にはフェレットはいなかった事を思い出す。リスは見かけたがフェレットという生き物は見た事が無いのだ。

（……………！！）

唐突に発せられる力。違和感を覚えさせてくれる強すぎる力を悟飯となのはは同時に感じ取ってしまう。それは、この世では通常あり

えない現象だった。

更にその力を調べ上げていけば、自分達の近くに力の正体は隠れ潜んでいる。ユーノは悟飯の視線を逸らしてなのはの方へと目を向け、彼女と目が合う。

「それにしてもこの猫、カワイイわねえ。」

「うん…里親が決まった猫もいるから、ちょっと寂しいけど…。」

悟飯となのははこの力の正体を放置してしまうのは非常に危険な行為であると理解していた。それほど自分達を感じ取った力の集合体は危ない存在だ。

本来ならこの世にはない筈の強すぎる力が、世界に存在してしまっているような。今も悟飯となのはが焦っている事にアリサとすずかは猫と戯れているせいで気がついていない。

悟飯となのはの本人達はこの場をどう切り抜けるか考え出す。頭を精一杯に思考させていた、その間にも力の正体は動き続けている事を二人は確認しながらも。

「！……ユーノくん！？」

突然、ユーノはテーブルから飛び降りて地面へと綺麗に着地する。そして休む暇も無く何処へと走り去っていく、飼い主であるなのも急な行動に驚きながら見届けてしまう。

悟飯はその様子を見守ると同時に気を再び探り出す。気がついた事は、ユーノが走った先の方角には奇妙な力を持った生物がいる場所

であるという事だった。

「あらら…ユーノどうかしたの？」

「うん…何か見つけたのかも…ちょっと、探してくるね。」

「一緒に行こうか？」

「大丈夫。すぐ戻ってくるから待ってて！」

さすがにユーノの起こした行動にアリサとすずかも気がつき、なのはに目を向ける。なのはは少し慌てながらも二人に怪しまれないように冷静な態度を装う。

なんとかなのははこの場を抜け出す事に成功し、椅子から立ち上がってユーノを追いかけていく。アリサとすずかは何処がおかしくも感じながら呆然と見届けていた。

（大変だ！　なのはちゃんの向かった方向は…。）

一方、悟飯は落ち着けない状態でありとてつもない焦りを感じていた。なのは達が向かった先は危険な力を持った存在が潜んでいる場所なのだ。

しかもその場所を目的として向かっているかのように動いている事が気を探っていてわかった事だ、別の方角へ向かう事は無くの確にその場所へと行く。

「ぼ、ボクちよつとトイレに行つてきます!」

「え?ま、まつて悟飯くん!トイレはそっちじゃないよ...!」

悟飯はすぐに椅子から立ち上がつてなのは達を追いかけていく。後のすずかの声など彼の耳には届いてはいない、呆然と取り残されたアリサとすずかは小首を傾げて見送るしか術はなかった。

「……クアゝツ?」

——なのは達が走り続けた先に見えてきたのは紫色に覆われた愛らしい小型のドラゴンだった。「え...?」となのはは驚きのあまり声を漏らしながら立ち止まってしまう。

この世に存在していない筈の生物が目の前にいるという事実に困惑しており、中々頭でその事態を飲み込む事ができない。それでもユ一ノは構えを取る。

「此処だと人目が...結界を作らなきゃ!」

「結界...ってどういうことなの?」

「最初に会ったときと同じ空間!魔法効果で生じている空間と通常空間の時間進行をズラすの!」

フェレットであるユーノは人間のように言葉を話すと同時に彼を中心とした真つ白な魔方陣が浮かび上がる。強力な白い光を発しながらのは少し目が眩んでしまう。

そして暫くするとユーノが展開した魔法が発動する。風景が一瞬で暗転していき、白と黒の二色で彩られる世界へ塗り替えられていく。魔法効果により、時間進行にズレを生じさせる――。

普段見慣れた風景とはまた違う、二色で全てが表現された世界なのは目を奪われて周辺を見渡す。

先程のいた世界とはまた何かが違う、それは見た目から出ているが
この場所は魔法という強力なエネルギーで操作された空間。それは
360度から魔法を全身で感じ取れる。

「クアアアアアアアアアアアーッ！！！」

「な……！？ ゆーくん！ あれ……！」

耳を塞ぎたくなる程の巨大な雄叫びが空間全体を揺るがす勢いで響き渡ってくる――、なのはが目に見えた先には紫色に全身を覆われた巨大なドラゴンが視界に飛び込んできたのだ。

「な、なんであんなに大きくなってるの〜!？」

「多分…ジュエルシードを飲み込んだからだと思う。それよりなんでもこの世界にドラゴンが…確かこつちでは存在していなかったはず

じゃ……！」

何処からどう見ても伝説上に存在していたドラゴンであり、今は現実の生き物として彼女達の前に立ち塞がっている。その事実を飲み込めないのはとユーノは動揺していた。

更に言うなら、このドラゴンは強い。それを直感的に二人は見抜いていた。何か凄まじく巨大なパワーを秘めており、動物的本能として危機感を二人は感じ取る事ができるのだ。

「どうしているのかわからないけど……このままだと危険だ、はやく元に戻さないと！」

「そうだね……レイジングハート、お願い！」

なのはは紐で首にかけている赤い宝石を片手に取って呼びかけるように声を上げた。

『——S t a n b y r e a d y ・ S e t u p . 』

赤い宝石から流れる機械的な音声をしつかりと二人は聞き取り、宝石に浮かび上がってきた桜のようなピンク色の文字がなのはの目に入ってくる。

眩しい桜色の光が宝石から溢れ出し、やがてその桜のように輝く光はなのはを包み込んでいく。数秒後、桜色の光が消滅すると先程の私服から一変していた。

真つ白な服を着込み、胸には大きな赤いリボン。手には赤い宝石が埋め込まれた白い杖を装備している。なのは自身は真つ直ぐにドラゴンへと目を向けて前へと出る。

「クアアアアアアアアアアアーッ！！！」

再び絶叫が空間を支配する、ユーノはドラゴンの叫び声だけで怯んでしまいそうなほどの絶叫を耐える。当の本人であるドラゴンは自身の巨大な腕を周りの木へと振り下ろしていた。

樹木は木っ端微塵に破壊され跡形も無く塵のように壊されていく。

次々と休む暇も無く破壊行為は連続して繰り返される中、なのは杖を握り締める。

「このままじゃすずかちゃん、の庭が壊されちゃう……！」

ドラゴンの持つ凶悪な力は周辺に多大な影響を与えるほどだった。

桜色の魔方阵が彼女の足元に浮かび上がる。なのはは魔方阵による桜色の光を浴びながらも杖をドラゴンに向ける。

それは攻撃準備であり、威嚇行動とも取れる。だが今のドラゴンはとても凶暴な性格へと成り代わってしまった、額に埋め込まれたオレンジ色のボールが怪しく煌く。

「——まって、なのは！防御張って！！」

「え…!？」

目に写る物を全て破壊しようとするのが今のドラゴンの状態であり、視界に入り込む威嚇的な行為をとっているなのは制御不能な凶暴性を露にしているドラゴンにとっては絶好のターゲットである。

ドラゴンは全身を動かし、尻尾でなのはに攻撃を仕掛けてくる。それはなのはが攻撃行動を取るよりも早く、土に埋められた木を粉々に砕き地面を削り取りながら重圧な一撃が彼女に襲い掛かる。

『 P r o t e c t i o n 』

彼女の唱えた魔法は接触する物体に対して強固な防御性能を誇る優秀な魔法である。更にダメージを防ぐだけではなく物体を吹き飛ばすという厄介な性質も秘めている。

桜色のバリアを展開させ尻尾による物理攻撃を完全に防御しようとしてみるのはだが、ドラゴンの力は彼女の予想を遥か斜めに上回るほど絶大な破壊力が込められていた。

尻尾がバリアに激突すると対象である尻尾を吹き飛ばそうとするがその性質は叶う事はできず、桜色のバリアは大きく音を立てながら亀裂が入り込むと同時に粉碎されてしまう。

「きゃあああああーっ!!!」

「なのは…っ!!」

防御魔法を発動させたにも関わらず虚しく攻撃を直接なのは自身が受け止めて吹き飛ばされる事になってしまう、悲鳴を上げながら樹木へと背中を激突させられる。

それと同時に激痛が全身へ襲い掛かってくるとなのは気を失いかけていた、目の前に浮かんでいる光景が揺らぐ中、なんとか意識を保とうとしつかりと意思を固めている。

ユーノは敵となのはとの圧倒的なレベルの違いに今までに感じたこととの無い焦りを覚えながら守るように彼女の前方へと立つ。敵であるドラゴンに対して鋭く睨みつけながら敵意を浴びせる。

（やっぱり、今のなのはじゃ無理だ…僕がサポートするとしても、あのドラゴンに勝てるかどうか…。）

——勝つ事が前提条件である彼女達にとって今までにない最大のピンチでもあった。そして彼女が発動した防御魔法「プロテクション」は完璧に意味を成さなかったわけではないとユーノは傍から見て気づいていた。

恐らく少しだがダメージを防ぐ事はできた。にも関わらず彼女は気絶寸前まで追い込まれている。もし防御を発動せずに直接攻撃を受けていれば一発で戦闘は終わっていたかもしれないとユーノは感じていた。

「クアアアアアアアアアーツ!!!!」

「くる…!!!」

ドラゴンは暴走していた。それは戦っている二人には誰よりも強く感じ取れた。その原因を探る暇は戦闘をしている二人にとってはそこまで余裕を持ち合わせてはいない。

追撃が来るであろう動作を見るとユーノの足元に銀白の魔方陣が再び展開する。ドラゴンはこちらに目を向けて殺気にも似た威圧感を放っている。なのは達にとってはこれまでにないプレッシャーである。

ユーノが防御魔法を発動させる寸前、遮るように撃ち出される高速の金色の魔法弾。目で追いかける事すらできない一撃がドラゴンの方角へと向かって命中させ直撃となる。

「あの魔法は一体…!？」

「……やっぱり効かないみたいだね。」

なのはは今、起きた現象を気を失いそうになりながらもしっかりと目で確認する事はできる程の体力は存在していた、ユーノが驚く声も耳で聞き取れる、未だに痛みがなのはに襲い掛かつてはいるが先程の状態よりは良くなっていた。

自分の目の前に守るようにユーノが立っており、そしてユーノが顔を向けている所は金色の髪をした黒衣の衣装を身に纏う少女。まるでなのはと対蹠的な少女は黒い長斧を片手にドラゴンへ向けていた。

「もう一人の…魔法使い…?」

直撃したドラゴンは傷を負うことも無く新たなターゲットである金色の髪を持つ少女へと殺意を浴びせていた、まるで伝説上の生き物としての威厳がブレッツシャーとなって、この世界にいるという現実感を喪失させてくれる。

それ程、場を目に見えない物から制圧する事が出来る生き物に対してもこの少女は無表情であった。何も心に響く事はないのか一切表情を変化させる事はなくただ敵であるドラゴンに目を向けているだけだ。

「あの、女の子……。」

「なのは！大丈夫……？」

「うん、大丈夫……ちょっと痛いけど、平気だよ……。」

なんとかなのはは苦しそうな表情を浮かべながらも自分の持つ武器を地面に突き刺して杖代わりにして立ち上がる。未だに彼女のダメージは残るがそれでも戦わなければならなかった。

しかしユーノはもはや勝負を諦めていた。ドラゴンとなのはの間には圧倒的なレベルの差があり、今のはではそのレベルを埋める事は不可能と断言するほど至難の業なのだ。

仮に自分が入っても勝利を掴む事はできないかもしれない、だがあの金髪の少女もこの戦闘に入ってくれるのならもしかしたら、勝てるかもしれないとユーノは思考してた。

「……なのは、今回の敵はいくらなんでも強すぎる。僕もちゃんとし

たサポートをしていくから、あの子が攻撃した隙を狙ってジュエルシールドを封印しよう。」

「あの子が攻撃した隙を狙って…？」

目を丸くさせながらあの子に該当するであろう金の髪を持った少女へと視線を向ける。赤い目がとても美しく綺麗に感じながらものはは軽くユーノに頷く。

なのは達にとっては金色の髪を持った自分達と同じ魔法使いは未知の存在である、何を目的としてどんな魔法を使うのか、何故こんな事をするのか、まったく理由がわからない。

「……シーリングフォーム。」

『Sealing form・Setup.』

金髪の少女の掛け声と共に機械的な武器は反応するように形状を変化させていく。先端が槍のような形になると金色の翼が生え、そして足元には金色に輝く魔方陣が浮かび上がる。

「攻撃する…！　なのは、攻撃の準備をして！」

「わかった、ユーノくん！　シューティングモード！」

『——Shooting Mode.』

なのはも先程の金色の髪を持つ少女と同じように機械を変形させて槍のような形になり、それを両手で握り締め狙いをドラゴンへと向ければ桜色の魔方陣が彼女の足元に出現する。

二人の攻撃を放つという事は、近くにいたら巻き添えを食らう可能性があった。ユーノはすぐになのはから距離を取って遠くから援護しようと考えていた。

どちらも攻撃を唱える直前、二人は意識を集中させていく。その間、ドラゴンはこちらに気づいたのか再び絶叫を上げながら重厚な翼を激しく羽ばたかせる。

「クアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

巨大な翼を何度も羽ばたかせると突風が発生する、まるで台風のような強風が吹き荒れる中ユーノはドラゴンに目を向けて始めて気がつく、強風がまるで衝撃破のようにこちらに向かっている事に。

意識を集中させている二人には敵がこちらに目を向けている事や台風——別名、衝撃破が接近している事に気がついたとしても防御魔法は間に合わない。それはユーノが今唱えても結果は同じである。

「嘘……きゃああああああああっ！！！」

「え……？ う……っ、ぐ……！！！」

ユーノの予想通りの展開となり、衝撃破に対して二人は正面衝突してしまう、勢いよく吹き飛ばされ空中を浮上すれば二人は激しい目

眩を感じながら視界が目まぐるしく回転する――。

「クアアアアアーッ！！！」

「まずい、このままじゃ二人が……！！」

更にドラゴンは休む暇も無く重厚な翼を羽ばたかせた上での飛行を始める、巨大な図体とは裏腹の猛烈な速度を持って二人に体当たりを仕掛けようとしていた。

ユーノの地面に白い魔方陣が浮かんでいく。その動作をかける間だけでもドラゴンはもうなのはの目の前にまで来ていた。想像以上の速度がなのはと金髪の少女に襲い掛かっていったのだ。

（あの体当たりにあたったら、なのはは……なのはは……！！）

――命が奪われるかもしれない、とユーノは最悪な展開を思考してしまふ。なのはの視界一杯にドラゴンが飛び込んでくる状況下で彼女はゆっくりと目を閉じてしまふ。

ユーノの防御魔法は届くかどうかともわからず、その刹那の間に緊迫感や焦りや困惑などのあらゆる感情がユーノを満たしていく、金髪の少女も今の光景に焦りを感じてしまふ。

「もう、ダメかな……ごめんね、みんな……すずかちゃん、アリサちゃん……悟飯くん……。」

小さく誰にも聞こえない言葉を口にする。今までに感じたことの無い強烈な痛みが自分を襲うのかと思えば恐怖で体が震えるが空中を浮上している今の状態では奇妙な感覚が残る。

宙に吹き飛ばされている状況、いずれくる痛みに耐えようと待つ――が、暫く待ち続けても来ない。未だに空中を浮上している感覚が体に残るが痛みも衝撃も来ない。

「あの子、前に会った……。」

金色の髪を持つ少女は目を見開いてその風景を確認すれば小さな声で呟いた。黒いマントを翻して地面へと着地すると少女は今の状況は夢ではないかと一瞬疑ってしまう。

「悟飯くん……？　なんで、悟飯くんが……。」

「よかった、間に合って……。」

なのはは目を開ける、何時までも痛みや衝撃が来ない事に不振に感じての行動であつた。其処には彼女達にとって信じられない光景が出来上がっている事に気がつく。

それはユーノも同じ事を考えていた。誰もが驚く状況に彼は一瞬だけ目を奪われてしまうがすぐになのはに視線を向けて魔法を唱える。

彼が唱えた魔法はなのはが地面に叩きつけられるのを防ぐ為の魔法だった。空中に浮かぶ白い魔方陣がクッション代わりとなって地面

に下ろされる。

「なのは、大丈夫…!？」

「わたしは平気…けど、どうして悟飯くんが……う…!」

悟飯がドラゴンの体当たりを片手で受け止めているという状況だった。これには三人とも目を疑う、あのドラゴンは計り知れない強大なパワーを持った破壊力があるのだ。

にも関わらずあの少年は片手で受け止めてしまっている。恐らくあの少年は自分達やドラゴンとは比べ物にならないほどの桁違いな実力があるのは間違いなかった。

なのはは再び立ち上がるうとするが酷い激痛が全身から響く、衝撃破により想像以上のダメージをなのはは背負っているのだ。立ち上がることにすら儘ならない。

「動かない方がいい、僕が治療するからその間なのははじっとして…。」

「…ありがとう、ユーノくん。」

「クアアアアアアア……ッ!!!!」

更に今まで以上の力を込めてドラゴンは悟飯を強行突破しようとするが、悟飯はびくとも動かない。それどころかまだ力を残している

ような、傍から見れば余裕も感じ取れる。

「ごめんね…ハイヤードラゴン。はっ！」

悟飯はドラゴンの頭を掴んだ状態で気を溜めて、一気に解放させる事で衝撃破を放つ。その威力は今まで見てきた中で一番に恐ろしい力が込められた攻撃であり、簡単にドラゴンを吹き飛ばしてしまう。ドラゴンはそのまま大きく地面を削り取りながら転がって巨大な樹木に全身を強打させてしまう、樹木はその衝撃に耐えられず折れて地面に倒れる。

「凄いパワーだ…見た時から変な感じはしてたけど、まさかあれほどの力を持つてるなんて…」

「悟飯くんの事は前に話したけど…サイヤ人ってすごいんだね。」

「ハイヤードラゴン…あのドラゴン、知ってるの？」

地面にいる金色の髪をした少女は空に浮かぶ悟飯を見上げながら問いかける、先程からこの少年の言葉を聴いているとまるで知り合いのように言葉を口に出しているのだ。

「うん。姿、形は違うけど、気でわかるんだ。目の前にいるドラゴンはボクの大切な“友達”だよ。」

「……友達？」

二人の会話はなのは達には届いていなかった。ただ金髪の少女は友達という言葉が上手く理解できていないのか首を傾げ、悟飯は真っ直ぐに倒れこんだドラゴンに視線を向ける。

ドラゴンは悟飯の方へと睨みつけるように目を向け、丁度目が合った状態だった。——友達同士の激突…悟飯は一体どうやってドラゴンを元に戻すのだろうか…。

第9話 「友達」との再会と不思議な球（後編）

悟飯はじつとドラゴンを見つめていると其処から視線を外して地上で自分を見上げる少女へと目を向け、そのままゆっくりと彼女の隣にまで降下していく。

その二人は久しぶりの再会でもあり、思わぬ所で出会う形となっていた。顔だけは知っているが名前は知らない自分達でもよくわからない関係。だが金髪の少女にとっては少年は命の恩人でもあった。

「…あのドラゴンをどうするの？」

「もちろん止めるよ。なんとかして元のハイヤードラゴンに戻さない」と。

——どうやって元に戻るか。それが悟飯の課題だった、なんとかするとしてもその方法が浮かばなければ何もできない。

必死に悟飯は大切な友達であるドラゴンの為、元に戻る方法を考え出そうと頭を回転させる。途中、ドラゴンとの思い出が脳内映像となつて浮かんでくるせいで助けようという気持ちが強くなり、更にフル回転させる。

「なんとかする方法はあるよ。」

「えっ!？」

だが悟飯にはあらゆる攻撃手段は通用しない。ドラゴンに対して恐怖も敵意も感じていない。実力の差と大切な友達という掛け替えのない存在が彼を攻撃から守っているのだ。

しかしそれ等はあくまで悟飯を対象にただで、金色の髪を持つ少女とユーノには少なからず精神と肉体に大幅な疲労がかかっている。それを物語るように武器を構えて警戒体制を取る少女。

「話は後！とにかく額にある青い星がついたボールを狙って！悟飯！」

「わかりました。…あっ！？あれってドラゴンボール！」

悟飯はすぐに額にあるオレンジ色のボールへと目を向ける。其処には自分が最も見慣れてしまった物体が埋め込まれている事に衝撃を隠しきれなかった。

太陽の光に反射するようにオレンジ色に輝く球体、よく目を凝らして観察してみると真ん中には青い星マーク…形は確かにドラゴンボールではあるが真ん中だけが可笑的い。

「…ドラゴンボール？」

「君の言ってるドラゴンボールはあのオレンジ色のボールの事だよ。あのボールとジュエルシードが合体してるんだ。」

「合体？ でも、なんで合体なんか…。」

金髪の少女は彼が驚いた事実が理解できなかった。ユーノはドラゴンボール、別名ジュエルシードを回収している事もあって詳しくすぐに説明を入れる。さすがにボールの名前まではわからなかったが、だが悟飯が抱く疑問は更に強くなっていった、ドラゴンボールが他の物体と合体するという話はまったく耳にしたことがない。

「クアアアアアアアアアアアッ！！！」

暴力的な翼を再び瞬時に羽ばたかせるとそれだけで風圧は破壊力を
持つて周辺に撒き散らしていた、そしてドラゴンは絶叫を上げなが
ら悟飯達へ突進する。

この生物の衝突は間違いなく少女やユーノにとつては一発当たるだけで戦闘するに必要な体力を全て削られる程の攻撃力は持っていた。

「くっ、はあっ！！」

「クアアアアアアアア……ツツ！！？」

悟飯は両手に自身の気を集中させ一気に突進するドラゴンへと数多の金色の球体、気弾という形で放っていく。

そして全て、額に埋め込まれたドラゴンボールに向かって確実的な集中狙いで放っていく——彼の動作には隙など存在していない。

ドラゴンは気弾に球体が命中する度に激痛が走り、悲鳴を上げながらも突進の勢いは少しずつ和らいでいく。無論、悟飯の攻撃は全て

手加減されておりドラゴンが重症を負う事はない。

「やった…？」

「……クアアアアッ！！」

しかしドラゴンは自ら持っている有り余る力を持って再び叫び声を上げると同時に悟飯達へと頭突きを食らわせようとする。その際に見えた額の球体はまったく傷はついていなかった。

金髪の少女は金色の羽が生えた武器をドラゴンの額へと突きつける、それは間接的にドラゴンと少女は近距離という位置に値され、ドラゴンの突撃によって更に距離は縮められている。

太陽の光に反射され煌く金色の魔方陣が少女の足元に出現する、少女の目に写るのはオレンジ色の球体、ドラゴンボールである。

「サンダースマッシュャーッ！！！」

『Thunder Smasher』という黄色い文字が少女の持つ武器に埋め込まれた金色の宝石から浮かび上がる、金髪の少女が唱えた魔法は先程と同じ魔法だ。

金色の砲撃が近距離で額に埋め込まれた球体へと発射され、一瞬で直撃してしまう。絶大な威力を急所部分であるドラゴンボールに叩き込む事によって先程のダメージとは比にならない程の威力だった。

「クアアアアアアアアアアアアアアアアー……ッ!!!!」

直撃する事で伴う電撃が素早くドラゴンを捉え、全身を覆うように激しい痛みを浴びせていく。漆黒の衣装に身を包む少女はすぐにドラゴンから離れる、電撃に巻き込まれない為にだ。

それは悟飯がドラゴンに与えた攻撃よりも、この少女が放った魔法の方が明らかに攻撃が通っている。球体がそれに反応するように強烈な光が零れた事をユーノと悟飯は見逃さなかった。

急所を突いたにも関わらずここまで大きな差を生み出していた。悟飯とユーノも電撃に巻き込まれないようにドラゴンから少し離れた位置にすぐに移動する。

「…もしかして、魔力じゃないと意味がないのかもしれない。」

その途中で彼は独り言のように呟く。「魔力……？」と悟飯はすぐにユーノへと問いかけていた、彼にとっては聞いた事のない言葉であり疑問を感じざるをえない。

「うん……あの球体への衝撃は魔力ダメージじゃなきゃ通用しないんだと思う。だからあんなにダメージを負ったんじゃないかって。」

「そう……ですか。ボクにも魔力があればハイヤードラゴンを助けられるのに……。」

ユーノはダメージを受けた時の球体の反応を見ながら必死に思考を

繰り返した上での回答だった。恐らく魔力じゃなければ意味がない、ユーノから見れば球体が反応していないように見えるのだ。

「……多分、魔力はあると思う。僅かだけど君から感じられる。でも――」。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
！！！」

空中を自在に移動しながら少女は悟飯の隣にまで移動する。少し落ち着いて、精神を集中させてみれば彼からは魔力を感じ取る事ができるのだ。

だが彼女が最後まで言い切る前に突然口を止めてドラゴンの方へと赤い目を向ける。巨大な生物は今も怒り狂って暴れるだけ暴れて更に被害を拡大させていた。

樹木を踏み潰せば地面に多大な傷をつけ、傍から見れば凶暴なドラゴンであり悟飯の友達としての面影はまったくくない。

「それより早く決着をつけた方がいいかもしれない。」

「そうだね… 悟飯、なんとかして動きを止める事はできる？」

会った時のドラゴンと比べれば今の状態の方が遙かに悪化しているように見えた、辺りに衝撃破を何度も打ち放ち狂ったように暴走するドラゴンには迂闊に近寄れない。

一発でも食らえば金髪の少女はすぐに倒れてしまう可能性があり、それはユーノにも同様の事が言えた。故に今の状態は二人にとって厳しい状況であり攻撃する事は安易に許してはくれない。

「動きを止める……そうだ！」

悟飯は何か思いついたように表情を一変させると突然、大暴れをするドラゴンの前に立つ。ドラゴンは悲痛に暴力を振るい続けるが視界に入ってきた悟飯に対して殺気が籠った眼光を浴びせる。

今のドラゴンにとっては視界に入り込んできた者は全て自身の敵であるという判断を持っている、只の思い込みに過ぎなくてもそうドラゴンは考えるのだ。

自身の腕を叩きつけようと薙ぎ払う――が、動作は一時中断。突然停止すると同時に鳴り響く口笛の音色が今いる空間内を全て制圧するように聞こえてくる澄んだ音。

「……口笛？」

後ろの位置にいる二人からすれば言葉を失ってしまうほどの奇妙な光景だった、悟飯は何もしていない。にも関わらずドラゴンは薙ぎ払おうとする腕を停止させたまま。

一向に動作を行う様子を見せないドラゴンに二人は目を丸くして様子を窺ってみる。よく見てみれば悟飯は口笛を吹いており、先程のメロディーは彼の物だったのだ。

「~~~~~」。

先程から暴れ狂い、そして全てを破壊する事を思考の一つとして働いていたドラゴンがこの音色を聞いただけで停止させてしまうのは絵に描いたような光景だ。

元々彼とドラゴンとの最初の出会いは山火事で助けた事から始まる。火事によって木が倒れ、挟まって動けないでいるドラゴンを見つけた時に悟飯は助けたのだった。

助けてから以後、ドラゴンの背に乗って何処かへ飛んでいたり共に何かをして遊び、その際に何時も吹いていたのが口笛だった。この口笛を聞いたドラゴンは嬉しそうに何時も踊っていたのだ。

「…………クアアアア…クアアアア…ツ。」

絶叫が木霊していた空間で遂にそれが止んだ瞬間、つまりこの間とはとも二人にとっては信じられない光景だった。ドラゴンは制御不可能な状態であり停止させる事は力づくでしか方法はなかった。だがその凶暴な状態を停止させるという事は悟飯だからこそ出来る事であり、何より一番にドラゴンと共に時間を共有している彼しかできない技なのだ。

予想しない幻想的な風景に二人は混乱するが、とにかくこれは悟飯が与えたチャンスでもある。金髪の少女はすぐにドラゴンの頭上にまで飛び上がり、今も動かないドラゴンを見下ろす。

「…サイズフォーム。」

またもや武器の形は一変、先端部分が姿を変えると今度は金色の刃が伸び鎌のような形状を取る。魔力消費の激しい魔法を二回も使ったせいで息が乱れ始めるがこの一発で終わりにしようと少女は考えていた。

「はあああああ……！！」

鎌を掲げ、一気に急降下を図る。少女の目に飛び込んできたのは涙を目に溜め続けるドラゴンだった。遠くからではその様子を見る事は出来ないが少女には間近で確認する事ができる。

目指すはオレンジ色の球体、ドラゴンボールであり其処へ金色の刃を突き刺すように球体へと勢いをつけて撃ち込む。耳に聞こえてくるのは未だに鳴り響く口笛の音楽と悲鳴だった。

「クアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア……ツッ！」

（あれが魔力……。不思議な力だ。）

球体から発生する強烈な光を浴び少女は目が眩む。反発するような圧力が鎌から少女へと伝わってくるがそれでも容赦なく一步も引かない、やがて光に飲み込まれ辺り一面が白い光景へと豹変する。更にその光は球体から溢れ出し、増大していくと巨大なドラゴンでさえその光に全身が飲み込まれてしまう。純白の光が太陽のように

輝いている光景は目を瞑りたくなるほど眩しすぎた。

口笛を止めると悟飯はその光の中を見通そうとする、僅かに光の中に見えてくるのは巨大なドラゴンと金髪の少女だった。外部から見れば巨大な銀色に煌く光の柱が立っているように見えるのだ。

（つく…！ 思った以上に手強い…！）

（一体何が起きて……。）

内部では少女が武器を両手で強く握り締め、離さずに球体へと撃ち込んでいた。光が圧力となって自分を反発するがそれでも引く事はできなかった。

強大な圧力を前に少女は怯みそうになるがそれでも白い風景の中で見えるオレンジ色のボールから目を離さない、この環境下にも慣れてきた所で球体がドラゴンの額から離れる。

（今の内に封印しなきゃ……母さん…！）

そつと心の声を少女は呟いていた。光は更に増幅し続け、底知れぬ銀白の海のように悟飯達に押し寄せてきていた、ユーノによる魔法によって生じた空間を全て光の海が飲み込んでいく。

「あれは…！？」

木っ端微塵に破壊され蹂躪されていた樹木や亀裂が入り込み挟まれた大地、見上げれば視界に入り込む筈の青空が全て一変、光に包まれた何も見えない真っ白な風景が目に見え込んでくる。

上を見上げてても下を見下ろしても見慣れた光景は目に入ってこない、それでいてこの光は反発力を持ち全身に叩きつけてくる。痛みのない圧力が360度から押し寄せて居心地の悪さを感じてしまう。

「！……消えた……？」

ユーノは啞然とした表情で目の前で起きている現象に驚き、唐突に光が消えた事で目の前を見つめる。自分の前には大暴れしていた筈の生物は存在していなかった。

光が消えた事で自分が見える風景は今まで通りの見慣れた景色だった、緑に溢れる大地に沢山の木が供えられたすずかの庭。ドラゴンとの戦いがまるでなかった事にされているような景色。

（やっぱり気とは似ているけど違う……。）

「悟飯……！ 大丈夫？」

呆然と立ち尽くしている悟飯を見つけ出すとユーノはすぐに彼の傍まで走り問いかける。しかし悟飯から回答は得られず、金髪の少女に目を向けるだけだった。

「ジュエルシードは回収した…バルディッシュ、行こう。」

空中に浮きながら少女は武器へ語りかける。光が消えたという事はドラゴンの額に埋められた球体を回収したという事だった。

そのまま何処の方向へ顔を向けて飛び去ろうとする動作を見せた途端に悟飯は少女に向かって大声を上げる。

「待つて、キミは！」

「…君には魔力がある。でも、まだ使いこなせるレベルじゃない。」

先程、彼に投げかけようとした言葉を最後まで言い切ると改めて二人は目が合う。赤い目に悟飯が写り、沈黙が二人を包み込んでいた。

「それじゃあ、どうす——。」

「クアッ、クアクアクアッ！」

悟飯が改めて質問をぶつけようとする前に紫色に覆われたドラゴンが姿を現す、何処かあの暴れ狂う巨大なドラゴンと似た姿を持っている。

「ド…ドラゴン…!?」

小さな動物、フェレットは声を上げる。今まで戦っていた伝説上の生き物であるドラゴンの面影がある目の前の小さな愛らしい生物に身震いしてしまう。

「クア〜ッ？」

「ハイヤードラゴン！　よかった、元に戻ったんだね。」

先程の巨大なドラゴンと比べればとても小さく大人しい印象を持ってしまう、悟飯は元に戻った事で途端に笑顔を浮かべて喜び始める。一番に恐怖を抱いていたユーノといえば「え…？」と拍子抜けな声を漏らす。彼はまったく二人の輪に経ち入る事ができずにいた。

「……………」

喜ぶ二人を一切表情を変化させる事もなく見下ろす少女、二人が喜んでいいる内の際についてその場から逃げるように飛び去ってしまう。ユーノはその姿を見れば追いかける事もなく見過ごしてしまう。今は彼女を追いかけるより未だに気絶しているであろうなのはの方を優先する事にした。

「それよりも早く戻らなきゃ、さっきの光のせいで僕の魔法も解けたみたいだし。誰かに見られるかもしれない…。」

「そうだね。急いで戻ろう…。」

「ど・こ・に…戻ろうとしてるのかしら？」

「あ、アリサちゃん…なんで此处に…。」

聞こえ慣れてしまった声が耳に入り込んでくると思わず振り返ってしまう。其処には金色の髪を伸ばした少女が仁王立ちしてこちらを睨みつけるように目を向けていた。

そして隣には紫色の髪を伸ばした少女、月村すかがいた。これでは戻る意味がなくなってしまうたように感じ、ユーノは慌てていた。

「まったく、何時まで立っても戻ってこないから様子を見に…って、きやあ!？」

「クアクアツ、クアーツ!」

挨拶をするように小さなドラゴンはアリサ達に鳴き声を上げると短い悲鳴を叫ぶアリサ、挨拶をしただけで悲鳴を上げられドラゴンはわけがわからず首を傾げてしまう。

「わあー、かわいい…。」

「ちょっとすずか!のんきに言ってる場合じゃないわよ! 悟飯、一体どういう事が説明しなさい!」

勢いに任せて押し寄せてくるアリサに悟飯は動揺を隠しきれずどうすればいいかわからずにいた。

「——悟飯、とりあえず適当にごまかして！」

突然、脳裏にユーノの声が響き渡る。驚いてフェレットを見下ろせばこちらに静かに視線を向けており、余計に悟飯は動揺してしまう。

「（えっ！？ ごまかせて言われても…。）」

「そつえばなのはちゃんは…？」

悟飯とフェレットは確かにいる。だがフェレットを追いかけていた筈なのはが見当たらない事にすずかは気づくと周りを少し見渡してみる。

そこには木に隠れて見えないが人の手があり——。すずかは息を飲んで恐る恐る木の近くににいる人物に目を向ける。

「なのはちゃん…！？ アリサちゃんと悟飯くん！なのはちゃんが倒れてるよ…！」

「なのはが！？ もう一体何がどうなってるのよ…！」

いきなりワケのわからない事が起こりすぎてアリサはパニック状態だった、一方すずかはさすがになのはが気絶している事に気づけば慌てだす。

「え、えーっと…そこにいるハイヤードドラゴンの気を感じて、その方向になのはちゃんが向かってたから追いかけたんだ。」

「…つまりなのははこのドラゴンを見て気絶したってことね、まあ気持ちはわからなくもないし…っていうか、このドラゴン本当に何なのよ。」

「それより、なのはちゃんを部屋に運んだ方がいいよ。怪我してるもん…。」

すずかは心配そうになのはを見下ろす。ドラゴンを見て気絶した、という理由だけでは説明できないほどの大怪我であり、アリサも頷く。

そうしている間にも悟飯は隣にいるハイヤードドラゴンに申し訳なさそうな表情で視線を向けて謝罪の言葉を口にした。

「ごめんね、ハイヤードドラゴン…。」

「クアーツ！」

何も気にしていないような明るい鳴き声を上げる。——そして後

に悟飯はなのはを部屋まで運ばされ、怪我については転んだという嘘を吐く事となった。

だが今回の出来事は数多くの疑問が残される事となった。高町なのはとユーノについて、ドラゴンボールとジュエルシードとは、黒衣の少女は一体何者なのだろうか…。

第9話 「友達」との再会と不思議な球（後編）（後書き）

悟飯「更新が大幅に遅れてしまつてすみません。」

アリサ「ホントよ。まったく作者は何やってたのかしら?」

すずか「まあまあ、きっと作者さんにも色々事情があつたんだよ。」

黒衣の少女「うん…最近忙しかったから。大目に見てもらえると嬉しい。」

なのは「にやはは、作者さんも次からは氣をつけるって言つてたしね。」

アリサ「どうかしらね。ま、アイツも反省してるなら許してやらない事もないわよ。」

悟飯「あはは…これからも「異世界に迷い込んだ超戦士」をよろしく願います!」

第10話 波乱の温泉旅行（前編）

「…ねえ、なのはちゃん。大丈夫？」

現在は学校の休み時間。すずかはほんやりとしたなのはに呼びかける。あの出来事から数日が経ち、それ以降からなのはは何処か元気をなくしていた。

ハイヤードラゴンの一件は悟飯が誤魔化しきれずにアリサとすずか、そしてなのはに事情を説明する事になった。事情を理解してもらった上でアリサの家に泊めてもらう事になったのだ。

だがなのはの一件はユーノとなのはが事情を説明しないでほしいという意向によって二人には事情を説明していなかった、唯一事情を知る者は悟飯だけである。

「え…う、ううん。なんでもないよすずかちゃん。ありがとう。」

「もし…何か悩んでるなら、相談に乗るよ。」

「ありがとう…でも何も悩んでないから大丈夫だよ。」

「本当に…？ 私達に何か原因があるなら遠慮なく——。」

「悩んでないから…二人は気にしないでいいよ。心配かけてたならごめんね。」

今回はなのはが何故悩んでいるのか、二人には原因が今一つわから

ない。二人にとっては原因がわからない悩みほど心配させられるものもなかった。

何か原因があるのなら慰める言葉や話題がある程度は浮かんでくるが原因がわからない以上、なのは自身から打ち明けてこなければ何もする事ができなかったのだ。

事情を知る者である悟飯はなのはの様子には複雑な心境であり声をかけにくくもあった。魔法について問いかけようとしたがキツカケが見つからない。

「別に、ないならいいんだけど……。」

「……………うん。」

気まずい空気が四人を包み込んでいた。アリサは話を聞きたくてもなのはが打ち明けてくれないせいでどういう態度を取ればいいのか悩んでいるように見える。

すずかはゆっくりとなのは自身を待ってはいるものの、なのはが悩む前の状態と比べてみれば元気がなく、なのはと同じように暗い表情を浮かべる事も多くなった。

なのは自身の考えている事は悟飯から見れば事情に絡んだ一人として大体が推測できた。恐らく黒衣に身を包んだ、金色の髪を持った少女について考えているのだろう。

「……悟飯、なのはについてどう思う？」

「……………」

だが悟飯もまた悩みを抱えている、なのはの元気がなくなるとほぼ同時に悟飯も元気がなくなっていた。彼自身の考えている事はやはり昨日出会った金髪の少女。

そしてドラゴンボールとジュエルシード、自分が持っている魔力やなのはとユーノのこと。あまりにも考える事が多すぎる、そのせいで疲れを感じていた。

「…ちよつと悟飯、聞いてるの？」

「へ？えつと…ごめん。」

考えているせいで聞いてなかった。アリサはむすつとした表情を浮かべて機嫌を悪く問いかける。

「…っていつか悟飯も何かあったの？」

改めて思い返してみれば悟飯の様子もおかしい。その事にアリサは気づき始める、故に彼女は心配そうな目線を悟飯に向ける。

「うん、ちよつとね…。あ、でも心配なくていいよ。」

「…それなら別にいいんだけど…何かあったら言いなさいよね。」

心配している、それを素直に表現する事ができないせいで悟飯から目線を逸らしてしまう。本当はとても心配で心配でたまらないが結局、これ以上の言葉はアリサの中には思い浮かばなかった。

それはなのにも同じ事が言える。せめて打ち明けてくれれば力になれなくても一緒に悩んであげられる、だがこれ以上に浮かぶ言葉も見つからない。すずかもアリサと同じ気持ちである。

二人の表情を互いに目にしながら悟飯は少し途方にくれていた。そんな中でなのはは雰囲気を感じて気遣いを見せる事にした。

「…そういえばわたし達、家族旅行で温泉に行くの。三人とも一緒に来る？」

「——温泉！？もちろん行くに決まってるじゃない！」

「温泉か…。ボクもいいよ。」

「うん…温泉って最近行ってなかったからなのはちゃん達と行きたくない。」

見事に全員賛同する、アリサとすずかはさっきまでの暗い顔から切り離してぱつと明るい笑みを浮かべてくれた。上手く気持ちと雰囲気の切り替えができたことになのはは無意識に微笑を浮かべて――。

「じゃあ連休にみんなと一緒に温泉旅行…ってことで。」

なんだかんだでなのはの家族とお友達との温泉旅行という計画となった。それを聞いたアリサとすずかは何時も通りの普段の二人に戻って、なのはと悟飯は何時も通りとまではいなくても、少しは元氣を取り戻したように見える。

元々なのはの家族は連休の期間を利用して日頃の疲れを癒そう、という計画があった。それになのはの友達や関係者達も揃って一緒にという彼女達にとってはとても楽しい計画だった。

——そしてあれから数日が経った。悟飯は結局、未だに魔法のことについてなのはから聞けず、金髪の少女やドラゴンボールについてもまったく進展がなかった数日間でもある。

ごく普通にありふれた期間の繰り返し。だがこの期間のおかげでなのはは少し元氣を取り戻してきたようにも見える。あの出来事から少しずつ落ち着きを取り戻してきたのだろう。

「すごい緑ねー…。」

「ホントだあ……。」

アリサとすずかの声が車内で聞こえてくる。今は温泉に行く途中であり道路を横切っている最中だ。車の中、窓から覗く光景は緑だらけというより森だらけであり、自然が多く其処にはあった。

悟飯は好奇心につられて窓から二人の見る光景を覗き見する。暫く

見ていた後、どうにも隣がやけに静かに感じて視線を隣の方へ、
なのはの方へと向ける。やけに彼女は静かに思えた。

「なのはから話を聞いたんだけど、悟飯くんは武術をやっているみたいだね。」

高町なのはの父親である土郎は運転をしながら悟飯に質問を投げかける。車に乗る前に両親へ自己紹介を済ませた後、武術についてなのはが話していたような気がした。

目は相変わらず前方へ向けたまま。予想としては7歳ぐらいかと土郎は考えていた。アリサ達もこちらの会話に気づいて興味津々そうに視線が向けられる。

「体つきからでもかなりの鍛錬をしているように見えるよ。」

「そ、そんな事ないですよ…。」

控えめに謙虚に振る舞う。思った以上に良好な関係を築けそうなのでなのはとアリサは少し安心する。

「誰から武術を習ったんだい？」

「お父さんとピッコロさんからです！ あ、ピッコロさんはボクの武術の師匠で…。」

「（ピツコロさん…外人か？）そ、そうなんだ…何歳頃から始めたんだい？」

「あ、はい…4歳頃からです。」

「（4歳だと…！）…あ、あはは。どんな鍛錬をしてきたんだい？」

「小さい頃はピツコロさんに半年間生き残れと言われて、荒野に置き去りにされて…。」

「お、おとーさん！ 前見て！」

すっかり高町家の大黒柱である土郎は目が点になってしまった。話の途中からアリサが強引に手で口を塞いで話を中断させる。なのはは危うく車が壁にぶつかりそうになる前に父に指摘。すぐに我を取り戻した土郎は再び操作に戻る事となる。

「…なんか、アンタの強さがわかったような気がするわ。」

悟飯の過去については容易に話すべきではないのかもしれない。あまりにもこちらの世界の常識とかけ離れすぎている。

しかも悟飯の性格上、それをすっかり忘れてベラベラと話してしまうという性質を持っている。アリサは思わず先が思いやられたようなため息を吐いてしまうのだった。

そうしている内にも気がつけば海鳴旅館に到着していた。あれから

悟飯と高町家の父親の会話はシャットダウンするようになるのはアリサが輪に入ってごまかしておいた。

車が二台、旅館の前に停止すると扉が開く。なのはの兄である恭也やすすかの姉である忍、父親と母親の士郎と桃子が外に出てくる。子供の中で一番先に出たのはさすがであり、地面に着地した。

——が、突然彼女の体がフリーズでもしたように凍り付く。意味がわからずアリサは怪奇な表情を浮かべ「何してるの？」と声をかける。

「ア、アリサちゃん…！　たいへんだよ、あれ…！」

「一体どうしたっていうのよ…せつかくの旅館なのに…え？」

次に出てきたアリサもすずかが指をさした方角を視界に入れると口が止まってしまふ。よく見てみると恭也や忍、ファリンまでもがすずかが指をさした方角を注目している。

しかも身内以外にも大の大人達もそろそろ集まってきている、これには驚いて悟飯となのはも慌てて外に出てみると二人までもが拍子抜けな声を上げてしまふ。

「これってハイヤードラゴンだね…？」

「にやはは…の足跡、だと思っただけど…」

「けどまだ決まったわけじゃないわよ、もしかしたら大きな人がいるのかもしれないじゃない。」

地面に巨大な足跡。しかも靴の形にしては少し歪であるため、まるで巨大な熊の足跡に見えるのだ。少なくとも成人男性の足のサイズより倍以上、目に見ただけで判断できる。

（この足跡って……まさかね。）

悟飯は想像してしまった展開にならないように祈っていた。

「……おとーさん。私達は先にお風呂に入ってくるね。」

なのはは海鳴旅館に来るのはこれが始めてではない。連休に何度も来ているおかげもあってこの旅館にはすっかり慣れてしまっているのだ。

何やら話し合う大人組みに子供組みは何処か居づらさを感じてしまう。あんまり割り込みしない方がいいような、そんな気がしてしまうのだ。

「わかった。それと、くれぐれも外には出ないでくれ。いくぞ恭也！ 美由希！」

何やら三人は外に外敵がいると判断したのかなのはの姉と兄を連れ、父は旅館とは別の離れた場所に行ってしまう。

仕方なくなのは達、四人だけで先に温泉に入る事にした。フェレットであるユーノも一緒に連れてきてはいたものの、なにやらユーノが頑なに悟飯と一緒にいる。

——と、彼女達と入るのは全力否定してくるので仕方なく悟飯に預けてなのは達とは別れる事になってしまった。その事でののははとても残念そうにしていた。

「ユーノと一緒に入りたかったけど、なんであんなに嫌がるのかしら……。」

「うーん……どうしてなんだろう、悟飯くんに懐いてるからかな？」

「悟飯くん、動物によく懐かれるみたいだからそうかも……。」

着替え中の会話である。本当にユーノのあの全力否定だけは何処か奇妙な違和感を感じてしまい、なのはもとても不思議に不可解に感じられた。

もう過ぎた事なのであまりその事はなのはは気にしすぎず、タオルを身体に巻いた後は早速なのはとすずかとアリサ、三人で温泉を堪能する事にするのだった。

「なんとか、避けられた……。」

悟飯とユーノは女性陣が温泉に向かう頃にはもう温泉に浸かってお

り、先程から冷や汗を流し続けるフェレットに悟飯は首を傾げざるをえない。

といつても温泉の暖かな湯に浸かっているおかげでリラックスしてきたのか徐々にフェレットは落ち着きを取り戻していつているようにも見えた。

「あ、あの…ユーノさん…。」

「え？ああ…ユーノでいいよ。歳も君と同じぐらいだから。」

誰もいない温泉風呂、二人しかいない空間。それは悟飯にとっては今まで聞いたかった質問を投げかけられるチャンスでもありユーノもまた話しやすい環境であった。

「そうなんですか？ でも、動物ですよ？」

「いや、えっと…実はそうじゃないんだ。色々訳があつてこの姿をしているだけで…。」

すると突然、フェレットは光に包まれ発光し始める。優しい緑色の光が湯に反射して鏡に反射しながら姿が変わっていき――。

「…とまあ、こんな感じなんだ。」

「――！？ ユーノさんが人に変わった…。」

光が消え去ったときには色素の薄い茶髪のを髪を持つ少年が湯船に浸かっていた。フェレットの姿は跡形もなく、まさしく真正正銘の人間の子供が其処にいたのだ。

「いや、本当は元の姿がこれなんだけど…動物の姿の方が色々都合がいいから、普段はフェレットのままにいるんだ。」

「そうだったんですか…。あ、そういえばユーノさんとなのはちゃんは何でドラゴンボールを？」

「これも色々理由があつて…けど、ドラゴンボー……。」

ユーノは唐突に言葉を止めると壁の方へと視線を向ける、そのままジーツと睨むように緑の眼光を浴びせながら湯船から立ち上がった近くまで、壁に寄る。

「…悟飯、なにか声が聞こえない？」

「声？ 確かに聞こえるような……。」

静かに耳を済ませてみれば女の人の声が聞こえてきた。しかも一人ではなく、二人ほど、いや三人ほどいるだろうか。何か騒いでいるような叫び声。

ユーノと悟飯は互いに顔を合わせながらどうするか迷ってしまつ、

話し声でここまで大きな声は出さない筈だ。だとしたら遊んでいるのか、盛り上がっているのか。

——悟飯は超人的な身体能力があるからこそ聴覚がとても優れている。そのおかげで、この叫び声は決して遊んでいる時に出す声ではないと彼は判断した。

「…なんか、様子がおかしい。」

「そうですね。向こうの方から聞こえます。」

ユーノは呟く。この言葉には同意するように頷く悟飯は湯船から立ち上がってユーノと同じ位置にまで歩けば壁を二人で見つめる。睨み続け、視線を浴びせて。

「クアツクアツ！」

「「「きゃあああああああ——っ！！！！」」」

「「「…へ？」」」

悲鳴と間拔けな声がそれぞれ重なって反響しているせいでもはや状況を把握する事は難しい。突然、壁が音を出しながら崩れた先にはハイヤードラゴンがタオルを巻きながらこちらに突進しているなど信じられない光景だった。

しかも後ろには三人の少女が背中からドラゴンに捕まっている、金

色の髪、茶色の髪、紫色の髪、見慣れた少女達であるのはとすずかとアリサがドラゴンと共にこちらに向かっている状況。

「……！！？」

「ハ、ハイヤードラゴン！？」

ユーノは火が吹き出てきそうなほど顔面を真っ赤にさせながらフェレット状態に一瞬で戻る、といってもフェレット状態でも冷や汗を流してかなりの焦り様で悟飯の肩に乗った。

しかし悟飯は何故ユーノがここまでオーバーな反応を見せるのか疑問に感じながらハイヤードラゴンを静止する為に受け止めようとする――が、不覚にも悟飯は足を滑らせる。

「うわわっ！！」

「悟飯……！？　　って落ちる――！！」

「クアッッ」

ハイヤードラゴンは悟飯に出会えた事に喜びの鳴き声を上げると同時――不意に足が滑ると同時にドラゴンの勢いに負けてバランス感覚は崩れ湯船の中へ派手な効果音と共に落下。

身体の温度が一気に熱くなったような感触を覚える中、やっとハイヤードラゴンが止まった事に安心のため息を吐くのはとすずか。そしてフェレットはドラゴンの頭の上に湯をかぶりながらぐったり

倒れている。

「……やーっと捕まえたわよ、これでもうにげ……………」

「ふうっ、ビックリした。あれ、アリサちゃん？」

キョトンとした顔で純粹に見つめる悟飯、一方では顔を赤くしながら両肩を握り締めているアリサは体系的にまるで押し倒しているような構図。一糸纏わぬ姿で彼女は気がつけばそうしていた。

ユーノが顔を真っ赤にさせた理由はアリサが今感じている事だ。なのはとすずかもドラゴンの背中に乗っではいるもののアリサと同じような状態でありそのせいでユーノは今も目を回したように冷や汗を流している。

あまりにも純粹無垢で何も感じていない悟飯、だがそこまで把握するほどの余裕を持ち合わせていないアリサはすーっと息を吸い込み……。

「……………いやあああああああーっ！！！！！」

アリサの絶叫は風呂場で木霊し、反響し合い更に音量がボリュームアップしたせいでとても五月蠅く聞こえてしまい、身近にいた悟飯はすぐに耳を両手で塞ぐのだった。

そして数分後の時間が流れて、何故ハイヤードラゴンがいたのか四

人は考え出すと知らない間に悟飯を追ってきたのではないかという結論で終わる。

相当、悟飯に懐いている様子なのでそういう結論に至っても不自然ではなく、ハイヤードラゴンが悟飯に向かって突進してきたのが証拠と成りうるからだ。

「ダメだよ、勝手に家を抜け出しちゃ…。」

「クアツ、クア…。」

「けど、なんで此処にいるってわかったのかな…？」

「うっん、わからないけど…あの足跡はハイヤードラゴンのものになるよね。」

思い出せばあの異常に大きい足のサイズの持ち主はハイヤードラゴンだったのではないかと予想もできる。脳裏に地面にあった巨大な足跡が蘇ってくる。

「うん…そうなると思うよ。でもハイヤードラゴンが壊しちゃった壁、どうしよう…？」

青色の瞳はやがて大きな穴が空いた壁へと向けられる。その先には女湯である女性専用の風呂場が見え、その間が通路となって男湯と女湯が繋がってしまったのだ。

「ハイヤードラゴンがした事だからボクが旅館の人に謝るよ。」

「でも、わたし達がやったつてお店の人は信じてくれるかな…?」

「信じてくれないよね…そういえばアリサちゃん、大丈夫?」

会話に入り込んでいていないアリサは先程の件をかなり引きずっているらしく、中々言葉が出てこない。羞恥心に打ち震え今も精神的なダメージは大きい。

「……みんなで謝るしかないわね。」

結局、彼女が思い浮かんだ発案はそれしかなかった。他ののはやすすずかもお手上げ状態なのかこれといった案は浮かばない、ただ謝るとしか。

ハイヤードラゴンは人の言葉がわかるのか反省するように「クアッ…。」と元氣のない鳴き声を上げて申し訳なさそうに落ち込む。ユ一ノは動物状態であるせいで下手に何か言えない。

「…でも、せつかくみんなで温泉に行けたから、背中流そうよ。」

「クアッ、クアックアッ!」

「うん、そのあとでも大丈夫…だよな。」

「じゃあ——。」

金色の髪をツインテールにさせているアリサはその髪を揺らしながら呆然と見つめているユーノを両手で掴む、ユーノといえば目を丸くしてアリサを見つめる。

「アンタはアタシが洗ってあげる。」

「じゃあ私はハイヤードラゴンの背中を流してあげるね。」

「クアークアツ！」

「わたしは悟飯くんの背中かな、悟飯くんもそれでいい？」

「うん、ありがとうなのはちゃん。」

ハイヤードラゴンは嬉しそうな声を上げるとすずかは軽く微笑む。アリサとユーノはやたらとアリサが気に入っているせいでユーノは苦労しているようにも見える。

なのはと悟飯は互いに嬉しそうに微笑を浮かべ合う、先程の一件から気を取り直して温泉を楽しむという方向性に切り替えた四人は互いに笑い合っていた。

背中を洗い流して一通りの事は終える。未だに店の職員は壁が倒壊している事は気づかず、アリサの絶叫でさえも届いていなかった。というのも職員もあのハイヤードラゴンの足跡を追って外にいるものだと内部に気が回らず外部にばかり集中していたからに過ぎない、

それは高町家もそうである。

それが結果的に不幸中の幸いということになっている事にユーノは温泉から出た後に気づいたのだった。

「……そういえば、アンタのお父さんってどんな人だったの？」

背中を洗い流した後、アリサが悟飯の髪を洗っている間に思ったことだった。たまたま目に入ってきた悟飯の背中を見て気づいたのだから鍛えられている事に。

前に家族について話をしたがその時の悟飯が言うには自分の父親はもう死んでしまっているのだという。だが悟飯は父親の話をするときはとても笑顔で明るく話す。だからこそ気になった。

「……お父さんは強くて優しくて、ボクの憧れなんだ。どんな強敵が現れても絶対に諦めず、何度も地球を救ってくれた。だから、ボクもそんなお父さんのようになりたいと思ってる。」

「……そう。まあ、アンタならなれるわよ。」

意外な返答でもあって予想外な答え。彼が憧れとしている父親は確かに悟飯の話を聞いている限り、とても凄い人なのは間違いないとアリサは思う。

地球を救うなんてそう簡単にできるわけがない。なのに悟飯の父親はそれを何度も救っているのだという、世界が違うのだと実感させられる。

「ありがとう、アリサちゃん。それと…さっきはごめんね。」

こちらが何か言葉を言う前に悟飯の方から謝罪の言葉が飛んでくる、別にそれを求めていたわけでもないこともあり、このタイミングで突然言ってきたことに少し驚いてしまう。

「…まあ、事故だったんだし…もう気にしてないわ。ほら、そろそろ上がるわよ。」

本当はまだ引きずってはいるが、悟飯は悪気があつてやったわけでもなければ事故だ。なるべく気にしないように彼女は心がける事にする。——そしてハプニングがありながらも悟飯達は疲れを癒して温泉を後にするのだった…。

第11話 波乱の温泉旅行（中編1）

—— 悟飯はハイヤードラゴンをこれからどうするのか、暫く考えた後に一つの結論に至った。とりあえず今日の夜まで何処かに隠れてもらう事にしたのだ。

その何処かとは、海鳴温泉の外にする事にした。高町士郎達がハイヤードラゴンを検索してからもうかなりの時間が経っているのだから、そろそろ諦め時ではないかと思ってきたのだ。

「此処なら見つからないかな。じゃあ、また後でご飯持ってくるから大人しくしててね。」

「クアーツ、クアツ。」

高町士郎が確認した後の茂みにハイヤードラゴンを隠しておく。恐らく確認した所はまた見る事はないだろうと悟飯が計算した結果なのだ。

すぐに悟飯は高町士郎達に見つからないように温泉旅館に戻る。得意の身体能力を駆使しての速やかな走行で物音も立てずに旅館に入っていく。

「ふう……。」と安心のため息と共に廊下を歩く。木の板で作られた廊下は木特有の匂いもあるが特に気になるほどではなく、寧ろ和風な雰囲気を追いついていく。

不思議とその光景を見ているだけで気分が良くなっていくような気がした。心身を癒す目的で此処を選んだ理由がなんとなくわかったような気がしながら衾の戸を開ける。

「――なによあれ！！　昼間から酔っ払ってんじゃないの！？」

「ど、どうしたのアリサちゃん……。」

いきなり鬼のように怒鳴るアリサを見て思わず表情を引きつらせてしまう。何かトラブルがあったらしい。

「ちょっと聞いて悟飯！さっき話しかけてきた人が……。」

クドクドとアリサは先程自分達に話しかけてきた女の事を長つたらしく愚痴を零す。なのはとずかは苦笑いを浮かべながら事情を説明される。

どうやら話しかけてきた時の態度がかなり生意気で失礼極まりない酔っ払い人のような女性だったとか。相当アリサはその女のせいで気分を悪くしていた。

――だが少し引つかかったのはずかもアリサの言い分に同意した事だ。物腰の柔らかい優しい彼女が半分だけ同意するほど酷い人だったらしい。

現在はテーブルに並べられた食事を堪能する前。その女は勘違いでなのはに絡んできたとか、結局は勘違いではあるが謝罪する時の態度もまたムカツク、とアリサは言う。

「わあ……これおいしそうだよ。」

「でも、悟飯くんにこれだけだったら足りないんじゃないかな？」

「そうねえ… やっぱり男の子はよく食べるのね。」

座布団に正座をしながら並べられた豪華な食事に目が奪われる、確かに高町桃子、なのはの母親の言う通り悟飯からすれば一人にこの食事は少なすぎる。

「あとでまた食事を運んでくれますので多分大丈夫だと思いますよー。」

「そうなんだ… それなら大丈夫なのかな？」

「まっ、もし足りなくなったらアタシのを分けてあげるわよ。」

「わたしも残ったら悟飯くんにあげるね。」

「ありがとう、みんな。」

思わず悟飯は嬉しそうな微笑を浮かべてお礼を述べる、その光景に高町桃子は薄っすらと柔らかな微笑を浮かべて会話のやり取りを見守っていた。

「モテモテね… わたしも可愛い男の子がほしかったところだし、なのはと結婚してくれないかしら？」

「素直でいい子だし。」と悟飯を絶賛すると同時にからかう母親。
なのは「ふえっ!？」と顔を赤くさせて慌しくオドオドし始めた。
そして最後の台詞は「恭也と違って。」と言ってしまう。

さすがにここまで言われると悟飯も困ったような反応を見せる、最後の捨て台詞のせいで恭也の視線も貰ってしまう始末であり、何を言えばいいのかサッパリわからない。

「お、おかーさん…!わたしと悟飯くんは…。」

「ダメー!!そんなの絶対ダメ!悟飯が結婚なんてアタシがぜーっ
たい認めないっ!」

「あ、アリサちゃん…?」

「っ!?! ……勘違いしないでよね、別に悟飯が取られたくないとかそういうのじゃなくて!」

墓穴を掘っている事に気づいたアリサはすぐに言い訳を考え始めるが更に墓穴を掘ってしまう彼女に母親は苦笑いを浮かべてしまう。

「えーと、ほら!悟飯ってまだ子供だし鈍感だし大食いだしドジだし…。」

「アリサちゃん…ちょっと言いすぎだよ、悟飯くんが…。」

「あはは…ボクは気にしてないよ。子供で大食いなのは本当だから……。」

物凄く気にしているようなショックを受けているような素振りを見せながら気にしないと言われても誰も信じるわけがない。アリサは途方もない罪悪感が芽生えてきてしまう。

食事の時間、想像以上の食べっぷりを発揮する悟飯にアリサ達以外の人物は驚きを隠せずにいた。その途中に温泉の壁が壊されたという緊急事態にも等しい情報が入ってくる。

尚、その事件に関わった四人は知らない振りをしながら話を聞いているとどうやら犯人が捕まったらしい。思わず背筋が凍りついたが女である事を聞いて明らかな勘違いである事がわかる。

食事が終わった頃にアリサから自分達に人違いで話しかけてきた女ではないかという話を聞く、「ざまあみなさい！」と勝ち誇った少女であった。

——そして時は流れすぎ、睡魔が襲ってきそうな夜の時間帯となる。途中までファリンが本を読んで面倒を見てくれたが今ではもう彼女も眠ってしまったっている頃だろう。

全員が寝ているせいなのか沈黙が部屋を包み込む、明かりがついていないせいでも不気味に感じられたがそれでも悟飯は起き上がる。そして違和感を覚えた。

「あれ、なのはちゃんは…。」

小さな独り言を呟くとなのはの布団を見つめる。其処には寝ていない。彼女の彼女がいない、部屋を見渡しても姿は見当たらない事から部屋から出た事がわかる。

（トイレにでも行っただのかな…？）

出かけた理由がそれしか思い当たらない為、そう思っておくことにする。悟飯はハイヤードラゴンの様子を見る為に部屋から出る事にするのだった。

実はという食事をしている最中におかずやご飯を気づかれない内にテーブルの下へ隠してビニール袋に包んでいたのだ。あまりの早業に誰も気づいてはいなかったが。

（ハイヤードラゴン、今頃お腹を空かして待ってるだろうなあ…急がなきゃ。）

無論、この行動に出たのはハイヤードラゴンにご飯を与える為。すぐに悟飯は室内を物音も立てずに抜け出る、コソコソと動き回る行為は今日で二回目だ。

茂みに隠れたハイヤードラゴンをきょろきょろと探すように視線を張り巡らせていると気配を感じ取る。誰かがいる——その気配を探ろうと森の中へと茂みに入っていく。

「おい！ハイヤードラゴーン！！」

「クアーツ！クアツクアーツ」

悟飯の声に反応するように茂みの奥から飛び出てくるドラゴンは目を輝かせながら彼の前にまで立つ。葉っぱが身体についているが特に気にする様子もない。

「あ、いたいた。遅くなっちゃってごめんね。」

すぐにビニール袋に包んでいたおかずやご飯を与えようとするがハイヤードラゴンの口元に悟飯は注目する。真っ白な星形の宝石を咥えていたのだ。

「あれ？ ハイヤードラゴン。その宝石どうしたの？」

「クアツクアツ！」

まるで悟飯に見せ付けるように地面に落とす。純白に煌く宝石はとても美しく悟飯はそれを片手で拾い上げながら観察をする。星型といても先の角は尖っておらず、丸い形をしていた。

「多分、落し物みたいだから後で旅館の人に届けよう。」

とりあえず浴衣のポケットにその星を押し入れてしまっておく。誰が落としたのか知らないがきつと落とした人物は困っているのだろう、と悟飯は落とし主を想像しているのだった。

真夜中の森は不気味な風の音が鳴り響いていた、ロイヤルブルーに染め上げられた空に浮かぶ月が森を照らしていたがそれでもこの気味の悪さは晴れない。

寧ろ暗闇の中を通る光は怪しく輝いているようにも見えるのだ。それが更に不気味さを煽っている、その中に金色の髪を揺らした少女が足音を立てながら周りを見渡していた。

「こんな時間に悟飯はなにやってるのよ……。」

アリサはうろつくと外を歩き回りながら悟飯を探していたのだ。彼が部屋から出て行く姿をたまたま目が覚めて目撃して以来、少し心配になって彼を追いかけていた。

だが悟飯の身体能力は尋常な物ではないせいで追いかけることはできず、姿を見失った結果が外で迷子のようにうろつく羽目になってしまっていたのだ。

「…っ!？」

真つ暗闇のせいで視界が悪く、足元が疎かのせいもあつて何かに躓いて地面へと転倒してしまう。付着した砂を払いのけながら立ち上がればその躓かせた正体に目を配る。

「なにかしらコレ？」

視界に入ってきたのはオレンジ色に輝く球体、真ん中に青い星マークが印象的な野球ボールぐらいの物体。中々見たことない珍しい物である事からアリサは暫くボールと見つめてしまう。

現実存在する輝きとは思えない程の美しさを持つ宝石のような物体を両手で拾い上げれば自分の顔に近寄せ、間近でそれを見つめてみる。とても綺麗な球体で皆に見せたいほどだ。

「…それを渡して。」

「……アンタ誰よ？」

まったく気配に気づくことができずに、アリサの後ろには金色の髪をツインテールさせた黒い服を着込む少女がいた。年代は恐らく自分と一緒に、ただこの時間帯に何故こんな所でうろついているのかとても疑わしい。

一つ言えるのは、何故かとても警戒せざるをえないということ。理由はアリサ自身もよくわからないがとにかく目の前にいる金色の髪をした少女は油断してはいけない相手のように思ってしまう。

「あゝらあらあら、子供がどうしてこんな所にいるのかしらねえ？」

赤茶色の髪をした、なのは達に話しかけてきた女もまた金髪の少女の隣からアリサを見下ろしていた。相変わらずの生意気な態度に思わず眉を顰めるが余計に強く危機感を感じてしまう。

「アンタは…さっきの!？」

「あたし等はそのボールが必要なわけだから、大人しく渡さないと…ガブツといくわよ？」

先程までのおどけた態度とは違う本気の警告、獣のような青い眼光が脅迫的にアリサに襲い掛かってくるせいで恐怖と危機感が同時に湧き上がってくる。

なんとなく察しがついたのはこの二人は只者じゃないということ。何処かの犯罪組織とは比べ物にならない力量の差、誘拐された身だからこそわかる直感的な物がそれを告げていた。

「…このボールで、一体何をするつもりなのよ!」

「さあゝねえ…答えてあげる理由が見つからないよ？」

「…大人しく譲るなら、私達も手出しはしない。」

「……………」

此処で譲らなければ——先程、彼女が警告した通りの事が起きる。只の脅迫の可能性は決してゼロじゃないがそれは逆も然りである。数々の疑問がアリサの脳裏で一瞬の内に浮かんでくるが今はそんな事を考えている暇などない、とにかくこのボールを渡すかどうかが問われているのだ。

「……誰がアンタ達みたいな怪しい奴に渡すもんですか！」

「——言ってくれるわねえ。」

更に眼光は青く輝く、その不気味な輝きはアリサにとっては恐怖以外の何者でもないがそれに負けないほどの目線を相手に送りつける。このボールを相手に渡せば嫌な予感がする、それは根拠のない女の勘といっても過言ではないのだがそれでも胸騒ぎのような危険信号のような物を感じてだ。

だが一方、赤茶の髪を持つ女性達も焦っていた。実はあの警告は単なる脅しに近い、一般人に手を出すのは彼女達にとって躊躇いのある行為である。

「……………」

故に次に襲い掛かるのは沈黙。両者が互いに睨み付けた目線をぶつけ合う、金髪の少女は表情を曇らせた瞬間——茂みから何かが動いた物音が聞こえてくる。

「キキーツ！」

「キキツ！！」

突然、正体を現したのは青色の異性物や赤色の異性物、形だけは全員共通しているが色がそれぞれ違う奇妙な生物達の集合だった。

「なんだい、あんた達は……！？」

「キシヤー……！！」

「な、なんなのあの気持ち悪いの……。」

醜悪な形を取った生物は合計で五体、どれもこの世界に存在しているような生物ではなくまるで宇宙人のような異型の生物である。赤い眼がギリリと暗闇の中で光る。アリサは見たこともない生物を目にして身震いをさせながら一歩後退りをすれば赤茶の女性も警戒体制を取る。

「キキー……ッ！！」

「な、なによ……！」

「……あれは、敵……なのかな。」

黒衣の服を纏う少女は焦りを隠しきれずにいる、見たこともない醜悪な存在を目の当たりにしてどういつ対処を取ればいいのか迷っているのだ。

倒すべきか、彼女を助けるべきか、それとも逃げるべきなのか。そもそもあの生物は一体何者か、この世界の生き物ではない事は確かだが。

あらゆる思考が少女の脳内で巡る中、アリサ自身は何故か自分に視線を向けている生物が気味が悪くて仕方ないと同時に命の危険も伴っていた。

「なんで近づいてくるのよ…!？」

「グギギギ…!」

言葉に言い表せない醜い鳴き声と共に五体の生物は全員、何故かアリサを見ていたのだ。注目の的であるアリサは戸惑いを隠しきれず本能的な危機感に苛まれる。

向こうが一步こちらへ近づいてこればアリサ自身もまた一步と下がり続け、球体は肌身に離さずに鋭い目つきで睨みつけるがこの異型の生物には何も効果は及ばない。

「グギギギギギ、キキーツ!…!」

（——だれか、助けて…!）

緑色の生物は地面から一気に飛び上がった腕と思われしき部位でアリサの全身を叩きつけようとする、それはありえない速度と力を持つての行動だ。

刹那に包まれた間がとても長く感じる、本来なら一秒という短い時間であるにも関わらず異様に長い。短く長いという矛盾で出来上がった時間が過ぎていくと同時に近づくのは――。

「――はあっ！」

一秒も経たない間に駆け抜けたのは異型の生物ではない、孫悟飯だ。横から来る重い蹴りが見事に生物に一撃を食らわす、そのまま叫び声も上げる暇もなく吹き飛ばされていく。

彼は元々気を探るという能力を身につけている。彼が油断をしていない限り誰が何処にいるかなどお見通しなのだ、異常に高い気を感じ取りすぐに駆けつけた結果がこれだった。

「キ、キキー…ッ!？」

「悟…飯…?」

吹き飛ばされた生物は一瞬の内で森をなぎ倒しながら地面を削り取りながら叩きつけられていた、突然の助っ人に他の生物も驚きを隠せない様子で殺意を込めた眼光を悟飯に浴びせる。

（栽培マン！？ どうして此処に… それに前に見た時のと雰囲気が違う…。）

「キキイーツ……！！」

「ふん、あいつがフェイトの言ってた例の少年ってわけねえ…。」

悟飯はこの醜悪な存在の正体を知っている。サイヤ人の開発したバイオ兵器、栽培マンだ。だが悟飯の知っている栽培マンは全て緑色であり此処まで異なる色を持った栽培マンは初めて見る。

だからこそ嫌な予感が漂ってしまう、何故此処にあの栽培マンがいるのか。金髪の少女とまた赤茶の女性がいる事にも、数々の疑問が浮かんでくるがただ一つ悟飯が今決めた事は――。

「アリサちゃん。ボクがあいつらを引き付けるからその隙に逃げて。」

栽培マンを倒す、アリサに危害を加えようとした生物を全て倒す。彼の中では栽培マンはオレンジ色の球体ドラゴンボールを狙っているという予想が立てられていた。

だとすればドラゴンボールを所持しているアリサは非常に危険な状態にあるのだ、今此処に何時までも彼女を留めておくのは命を落とすという最悪な事態が予想される。

「……キキイーツ……！！」「……」

残りの赤、青、黄、黒の栽培マンは怒りに身を任せながら悟飯へと突進していく、それは仲間がやられた事に対する怒りであり余計に力が倍増していた。

次々と高速の速度を持って殴る、蹴りの連発を四人一氣に同時に悟飯を食らわそうと仕掛ける——それは多勢に無勢であり、数的に見れば圧倒的に不利な状況である。

だがすべての攻撃を悟飯はそれ以上の速度で回避していく。悟飯から見れば栽培マン達の攻撃などスローモーション状態で全てが襲い掛かっているような物なのだ。

（やっぱり、以前よりも栽培マンの気が強くなってる…！）

「『ギギギギギイイーッッ！』」「『ッッ』」

一斉に四体の掛け声が合わさりながら激しい連撃は止む事はない、悟飯は内心では栽培マン達の強さに少し焦りを感じていた。それは負けるという焦りではなく強さに対してである。

それでもこの程度の強さなら悟飯には問題がなかった、故にそこまで気にするほどの事でもないので強さに関しては今は無視することにしたのだ、何より今は戦闘中なのだから。

「…私とアルフ、二人で挑んでも勝てないかもしれない。」

「えっ！？ アイツそんなに強いのかい？」

「なんとなくだけど…前にあの子が戦ってる所を見て、そんな気がするんだ。」

フェイトと呼ばれる少女は至って冷静だ。——だがその裏は悟飯の実力に驚かされっぱなしでもあり、下手に手を出すべき相手ではないと険しい表情のまま語っていた。

一方、アリサは謎の金髪の少女が悟飯に気を取られている事がわかと少しずつ彼女達から距離を置いていた。一歩ずつ、一歩ずつ気づかれないように物音を立てないように離れていく。

「『ギギギギヤアアアツツ——！！！！』」「『』」

今も続く数々の連続攻撃を一回も当たる事はなくすべて避け、上空へ誘い込むように悟飯は飛行していた。だがいくら圧倒的な実力を持った悟飯でも気を抜けばやられる可能性はないと言い切れなかった。

——それは彼の服装に原因がある。温泉旅行という事で青い浴衣を着ながらの戦闘行為であり、元々浴衣は戦闘用の服装ではないので非常に動きづらいのだ。故に彼はハンデを背負いながらの戦闘だった。

「キキイーツ！！」

「ギギギギ——！！！！」

「ギギギヤアアーツ!!」

「キイイギヤアアーツツ!!」

突如、栽培マン達は悟飯から急スピードをかけながら離れていく。そして四対のそれぞれの掛け声が合わさった瞬間に重圧のかかった拳や足が一気に間合いを詰めて襲い掛かってくる。

それは彼等にとって渾身の一撃であり破壊力の高い一発だった。足一つ拳一つと油断をしていれば一瞬で死を与える一撃の数々だ。それにも関わらず悟飯は逃げる素振りを見せない。

浴衣状態で両手足を伸ばすと「ドオオン」という衝撃音と共に一気にそれ等を全て受け止めてしまう。岩石を砕く事の出来る一撃であるとも悟飯からすれば片手で受け止められるぐらいの攻撃力なのだ。

「だああー……っ!!」

「……グギヤアアアアアーツツ!!!!」

両手足が彼等と触れている状態で一気に自身の持つ気を解放する事で衝撃破を放つ、それは悟飯を中心としており彼に近ければ近いほど威力は高い物へと変貌する。

栽培マン達は勢いよく後方へと吹き飛ばされ空中を飛来しながらもなんとか途中から体制を立て直し、悟飯を鋭く睨みつける。いくらハンデを背負った悟飯でも栽培マン達から見れば強敵だ。

「…それにしても、どうしてあんな生き物が此処に……。」

「さあね…あたし達と同じでジュエルシードを狙ってきたのかもしれないよ。」

「——そういえばジュエルシードは…？」

少女はようやく気がつく、ジュエルシードを持った少女がこの場から姿を消している事に。栽培マンと悟飯の戦闘で気を取られていたが何故か彼女は見当たらないのだ。

「しまった、まんまとやられた…！」

「追いかけよう、アルフ！まだ遠くには行っていないはず…。」

天使のような真っ白な服を着た少女は茶色のツインテールを揺らしながら上空を移動していた、更に上を見上げると少年と気妙な生物が空中戦闘を繰り広げられており目を丸くする。

「ユーノくん、これどうなってるの…？」

「わからない！とにかく悟飯を助けなきゃ…っ！」

桜色の魔力で構成された羽を散らしながら、彼女の肩に乗るユーノは険しい目つきで様子を見守る。赤い宝石が埋め込まれた杖を片手に装備すれば狙いは栽培マン達へ――。

…向けるはずだったが、なのはは何故か彼等から視線を逸らしてしまつ。何時までも魔方阵が出てこない事に不振を感じたユーノはなのはが向けている視線を辿っていけば動揺した様子を見せる。

「あれは…まさか、あの金髪の子って…。」

「アリサちゃん…！？それにジュエルシードを持つてる…！」

なのははアリサを見た瞬間に戸惑いが生まれてしまつ、自分が今まで隠してきた秘密がバレてしまつ一瞬だ。しかしその戸惑いも漆黒に包まれた魔法使いを見て吹き飛んでしまつ。

すぐに桜色の羽と共になのはは一直線に急降下していく、其処には何も迷いもなく金髪の少女の前へと立ち塞がるように地面へと着地する。それはまるでアリサを守るようにも見えてしまつ。

「…子供はいい子で、って言わなかったけね？」

「え…！？ あの時の……。」

なのはを人違いだと言って話しかけてきた人物が目の前にいた、先程から驚きの連続ではあるが、一々動揺していられる暇もなくなってきた、とにかくアリサを此処から逃がさなくては。

そして幸いにもアリサは必死に逃げているおかげでこちらには気づ

いていないようだった。ただ自分を追いかけてくる敵がいなくなっ
たというだけで、間接的に此処から逃がす事は成功している。

「あたしさあ、親切に言つたよねえ？大人しくしないと、ガブツて
いくよつて。」

「……！！」

突然、赤茶の女性は髪が伸び始め姿が変形してく、それは生物学上
という物を超えて人から狼へと変わっていく過程でなのは信じら
れないような目で彼女を見る。

「やっぱりあいつ……あの子の使い魔だ！」

「……アルフはジュエルシードを追いかけて。此処は私が食い止める
から。」

「——了解！！」

「まてっ！！」

赤茶色に包まれた巨大な狼は地面を走行、なのはを一瞬で通り抜け
ていけばアリサを追いかける。だが小さなフレットもまた狼を追
いかけるようになのはの肩から降りるのだった。

何も告げずに行ってしまった事に少し戸惑いを覚えてしまうがすぐ
にその感情も振り払う。目を向けるのは目の前の綺麗な瞳と綺麗な

髪を持った金髪の少女へと。

「…話し合いでなんとかなるってこと、ない？」

「私はロストログアの欠片を…ジュエルシードを集めないといけない。」

できることなら、戦いは避けたい。今もそう願うのはだがその願いが叶うはずもないことぐらいは理解していた。

「そして、貴方も同じ目的なら…私達はジュエルシードをかけて戦う敵同士ってことになる。」

「だから！そういうことを簡単に決め付けないために話し合いって…必要なんだと思う！」

それが今のなのはの本音であり、大事な事だからこそ少しでも話し合いが必要なのだとどうにか訴えたかったのだ。

「話し合うだけじゃ…言葉だけじゃ、きっと何も変わらない…。」

だが返ってきたのは予想もしない返答。赤い眼光がギリリと輝く姿は不気味で冷たい印象を受けてしまう。

「伝わらない…！」

戦意が込められた瞳がなのはの目に見えた途端、一気に少女は加速してくる。気がつけば自分の背後を取られている事に気づき振り向いた瞬間には黒い斧のような武器が接近していた。

眼前にまで迫り来る武器を腰を屈めて姿勢を低くする事でなんとか避けきる、思った以上の速度に翻弄されながらも桜色の羽が彼女を空中へと導いていく――。

「どうして使い魔を作れるほどの魔導師がこんな世界に来ている！？」

動物は森を駆け抜けていく、いくら走り抜けても景色は変わらないがそれでもアリサには近づいていつている。というのも、この動物の走行速度は並大抵の物ではないからだ。

「じゅちゃーじゅちゃーうるさいっ！」

だが狼は小さなフェレットには構う暇もない、視界に入り込むのは金色の髪が揺れ動くアリサの後姿。それをちゃんと目に入りターゲットとして狙いを定めている。

魔方阵が足元に出現すれば周辺に緋色の魔力が出現していく、走り

続けるアリサに向かって緋色の魔力弾は次々と発射して行き彼女に襲い掛かるうとする。

「きゃああああっ!!」

「あいつ、なんてことを…!」

魔力弾は地面に接触した途端に炸裂を何度も引き起こす、彼女は走行していたという事もあって直撃は避けられたがそれでも爆風という名の衝撃破は避ける事ができなかった。

衝撃によって身体が不自然に浮いてしまう、その感覚はとても気持ち悪く一気に地面へ身体が叩きつけられると近くの木にまで転がり気絶してしまうのだった。

「ふん!大人しく渡さないからさ。——ってジュエルシールドは!?!」

そもそも目的であるジュエルシールドだけが見つからない、倒れているアリサはいても肝心の物体は見当たらない。慌てて周りを見渡して目線で探し続ける。

「あの爆発でジュエルシールドが吹き飛んだのか…!」

「ちいっ!」

狼は鋭い舌打ちをすればすぐに周辺を探すために駆け抜けていく、彼女が何を企んでいるのかはまったく見当がつかないがとにかく奴等に渡してはいけない品物なのは確かだ。

ユーノはそれを頭で整理をつけると赤茶の狼を探すように自身もまたオレンジの球体を探す事にした。球体があつた狼が見つかる前にゲツトしておけば何も被害が及ぶ事はないと計算してのことだ。

尚、アリサ自身はもう狙われる事はないだろうと彼はそう思っているのだった。

「「「「キキキキキキイイイイーッッッ！！！」「」」」

「

絶叫するような掛け声と共に栽培マン達は悟飯を囲んで拳と足の連撃を何度も何度も飽きることなく繰り返す、目に見えない速度での攻撃は全て悟飯に避けられ今も当たる見込みはなかった。

常識を超えた戦闘が巻き起こる中で悟飯には心配事が一つある、それはアリサの事。彼女はもう旅館に逃げたのだろうか、もうこの近くにはいないだろうかと思いが湧き上がる。

「「「「ギギギギギギイイイイー！！！！」「」」」

回避し続けて見えた視界には金髪の少女どころか人自体が写っていない、つまり近くに人がいないことになる。少なからず自分の周辺

には誰かがいない事がわかれば悟飯は遂に回避を止めた。

「うおりゃあぁーっ!!」

「『グギギギギイイイ……!!?』」

刹那、彼の足が横から栽培マンの肉体に入り込む。強烈な痛みが襲い掛かる中で次々と他の栽培マンにも連続して襲い掛かり一瞬で地面へ落下させ叩きつけてしまう。

同時に強大な衝撃破が地面へと重圧をかけ、一気に地面が砕けてクレーターを発生させていた。信じられないほどの怪力が彼等に襲い掛かっている事が目に見えてわかる。

「グギヤッ……!」

「ギギギイ……。」

それでも栽培マン達は息が絶える事はない。苦しみが侘びた声を漏らしながら目を回す。その直後、光り輝く球体に青い星のマークがついたオレンジ色に包まれた物体。

それが彼等の頭にぶつかると振ってきた。転がる球体に空かず一匹の栽培マンが手を伸ばして掴み取る。

「……キキキキイイイ……!!!!?」

強烈な白銀の光が接触した栽培マンを包み込んでいく、唐突な出来事に触れた本人でさえも驚きを隠せない様子であり光からは逃れる事ができずにいた。

更に周辺の栽培マン達も姿が見えなくなるほど次々と覆っていく、球体から零れ落ちる白い光は止む事はなく溢れ——それは悟飯の視点でもはつきりと確認する事ができる。

「…………グギギギギギギギギギイイイイイ……………！！！」
「…………」

「あの光はまさか…！」

これとよく似た物を経験している、何故か悟飯の脳裏には巨大なドラゴンと戦っている映像が思い浮かんでくる。目に見えている映像と頭の中の映像がごちゃごちゃに混ざるような感触だ。

五体の声が重なり合い、気は更に爆発的に増幅していくように白銀の光は止む事はない。そして光が消失した先にはグレーで体が覆われた人間のような形をした生物が一人。

「……………」

「なんだ、このとてつもない邪悪な気…いや、気の他に何かが混ざってる…！」

果たして、この闇色に染まるオーラを纏った邪悪な生物の正体とは

——。そしてユーノとアルフ、なのはとフェイトの勝敗はどう転ぶのだろうか…？

第11話 波乱の温泉旅行（中編1）（後書き）

悟飯「すみません。前中後編だと文章が上手く纏められなかったみたいなので更に中編を分けるみたいです。」

第12話 波乱の温泉旅行（中編2）

「バルディッシュ…！」

『Thunder Smasher』

彼女達もまた空中戦闘を繰り広げていた。魔法使い同士のぶつかり合いが初めてであるのははこれほど緊張する物もないせい、少し精神的な疲労も伴っていた。

だがそれでも此処で負けるわけにはいかないのだ、金髪の少女が空中で夜に浮かぶ金色の魔方陣を輝かせながら出現、片手を彼女へ向ければ一気に金色の砲撃が撃ち放たれる。

「レイジングハート…！シューティングモードだよ！」

『Shooting Mode』

桜色の魔方陣と共に槍のような形状へと変貌した杖はまっすぐに金色の砲撃を見据えるように向けられ、なのはは魔法名を口にした。

「—— デイバイン バスター！！！！」

「

杖を纏っていくのは桜色のリング、そのリングは更に魔力が増幅されるように先端からの桜色の砲撃を発射する事で金色の砲撃へと立ち向かっていく。

互いに衝突すれば激しい強風が巻き起こり両者は互角の威力を誇っていた。なのは自身は砲撃関係の魔法を得意としており、実力が上のフェイトでも充分に通用するほどの高いレベルである。

「…うつ、くつ！」

「レイジングハート、お願い！」

『All right.』

術者の思いに答えるように杖は反応を返せば更に砲撃の威力は格段と上昇していく。それはもう十分すぎるほどに金色の砲撃よりも飛び越えた破壊的な一撃と成り代わっていた。

金髪の少女自身もそれには気づいていた、金色の砲撃はなのはの放つ砲撃によって飲み込まれかき消されていく。真っ直ぐに目標を狙い打とうとその一撃で飲み込もうとする。

「え…？ なにか、おかしい…。」

砲撃は容赦なく彼女を呑み込んでいく——筈だが、手応えがない。何か物に当たった独特の衝撃がないのだ。何もなかったように通り過ぎていったような気分になってしまう。

『Scythe Slash』

「…っ!？」

なのはが上空を見上げた途端、振り下ろされるのは眩い金色の刃。電撃がバチバチと弾くような音が耳に聞こえる。全体的な構図は、金髪の少女が横からなのはの首へと刃を突きつけられていた。砲撃を放つ事で夢中になっていたせいもあり、何がなんだか状況がよくわからない。ただ彼女なりに推測できるのは砲撃に当たる前にこの少女は回避したのではないだろうかということ。

『Pull out.』

「レイジングハート…!？ 何を…!」

そして結果が今に至るわけだ。突如、赤色の宝石が光を点滅させると漆黒の服に包まれた少女の目当ての品物が浮かんでくる。

「きっと、主人思いのいい子なんだ。」

なのはが動揺をしている間にも少女は球体を奪い取ってしまう。そのまま地面へとゆっくり降下していくと球体を静かに見通す、青い星マークが二つほどあった。

「…あなたは、一体…。」

「できるなら…もう私達の前に現れないで。もし次は、今度は止められないかもしれない。」

こちらの返事など真つ向に返すつもりはないのか、ただ背を向けて冷たく言い放つ。表情は見えないが言葉の冷たさに胸が苦しくなるような感覚を覚える。

「あの…！名前、あなたの名前——…っ！？」

「…あれは！」

だが最後の質問になるであろう言葉をなのはが口にしようとした途端、途方もなく現れた白銀の光が口を遮ってしまう。強烈な光は夜であるにも関わらず周りを照らし明るい光景を導き出す。

もはや夜ではなく昼のような景色が広がっている。強烈な光を生み出す塊がまるで地上の太陽のように輝いており、なのはと金髪の少女は焦りを隠しきれずにその光の元へと向かっていくのであった。

闇色に包まれたオーラを全身から放出する謎の生物を目の前に悟飯は精神的な圧迫感を感じていた。というのも、数々の難題が一瞬で浮かんできてしまったのだ。

恐らく栽培マンが先程手にしたのはドラゴンボール、触れた事により力を手に入れて五体の栽培マンが一気にひとつの固体へと合体したのでないかと推測できる。

（まさか栽培マンが合体するなんて…それにドラゴンボールも…。）

飯にそれがわかったとしてもどう倒せばいいのか。これが一番の難題であり重要視するべき問題だろう。このピンチを切り抜けなければドラゴンボールどころか、自分の身でさえ危うい。

さつきまでと同じように目の前の敵を倒すとしても、悟飯の頭の中の予想では“通用しない”。過去にその実績を残したドラゴンがそうであったからだ、もし前と同じであるのなら――。

[illegible]

!!!!

醜惡に満ちた声が木霊すると突然、栽培マンが頭突きを食らわそうと接近してくる。

「——ぐうっ!? (速い…!)」

思考の最中に不意打ちとも呼ぶべき攻撃が顔面へと激突してしまう。

——明らかに先程の栽培マンより速度は比較にならないほど上昇している、それは悟飯の速度と互角の実力だった。

更に拳と足の連撃が高速を超えた刹那に迎え入れられる、悟飯は圧倒的に上昇した速度のせいで完璧に避けきる事は困難な物に成り代わっており次々と全ての攻撃を悟飯は両手足で防御していく。

（さっきとは違ってパワーもスピードも格段に上がっている…！！）

精神的な焦りが悟飯を支配していく、戦闘において相手の強さが飛躍的に上昇されるといふ事はかなりのプレッシャーになるのだ。同時に発生する戸惑いと緊迫感。

次々と連続攻撃を両手足で受け止めていたがそれも限界に近づいてきたのか、防御していた部位が徐々に麻痺してきてしまう。絶大なパワーを相手に何度も受け止めるのは戦闘において良い結果には繋がらないのだろう。

「ギヤアアアア！」

「う…ぐっ…。」

激しい攻防を繰り返した末に押されたのは悟飯だった、相手は想像以上の手強さが備えられているせいもあって防御をしていた両手足が完全に麻痺してしまったせいで上手く使い物にならない。

僅かな刹那の間ではあるがそれでも栽培マンは見逃す事はなく一気に人体の急所部分である腹へと自身の重圧な拳を塗りこませる、言葉では言い表せない吐き気にも似た激痛が悟飯を襲っていた。

「が…あああ…」

「ギギギッ！」

身体に直接負担がかかったような衝撃が感じられる。故に他の部位に攻撃された時の痛みとは比較にならないダメージであり、嘲笑の声と共に腹を手で押さえて蹲るような体制を取ってなんとか和らげようとしていた。

「グギイツッ！」

「——うわあああぁっ！！」

だがそれでも容赦なく栽培マンは両手を組んだ状態から一気に背中へと叩きつける、更に追い打ちかけるような激痛が悟飯の背中から浴びせられると衝撃により一気に地面へと叩きつけられそうになっ
てしまう。

一般人ならばそのまま人体が貫通して容易に挟られる領域の力が悟飯に襲い掛かってきていた。合体していない栽培マンの状態でも岩石ぐらいは簡単に破壊できるパワーを持っている。

そのパワーとは比較にならないほど飛躍的に増強された力が、直接身体に響かせられた悟飯の視界は目まぐるしく回転する最中に栽培マンは落下していく彼を更に追撃を加えようと急降下を図っていた。

「ギギギギギギ…！！」

「くう……っ。」

殺意が込められたような嘲笑が短く耳に聞こえてくると同時に悟飯は身体の痛みを我慢しながらも全身の体重を片手で地面に立ち、もとい全身を支えながら一気に後方へと転回させ攻撃を速やかに避ける。

両足が地面に衝撃を与えながらも更に全身の体重をかけ、一気に前方へと足を出せば栽培マンへと高速を遥かに飛び越えた爆発的な威力を顔面へと叩き込もうと駆使する、その際にオレンジ色の球体が腹に埋め込まれている姿が見えてきた。

「だあああーっ!!」

だがそれにも構わず横から栽培マンの顔をなぎ払うように蹴り飛ばして「ドカツ」という音と共に直撃させる。それだけで周辺は衝撃による強風が巻き起こっていた。

——しかし高威力を誇る蹴りに栽培マンは痛がる表情を見せなければ吹っ飛ぶ様子はない、手応えは確かにあったはずだ。それを証明するように当たった光景が目視できる。

「なにっ!?!」

「ギヤアアア!!」

すぐに悟飯の足を栽培マンは両手で掴み取れば乱暴に暴力を持って

振り回した後、上空へと勢いよく投げ捨て空中を無理矢理泳がせてしまう。

「ギへへへへ…!!」

悪辣で気持ち悪さが漂う声と共に悟飯へ大量の闇色に包まれた邪悪な気弾を次々と音速を飛び越えた威力と速度を持って発射されていく。

悟飯では到底、目で追いつけられる速度でもなく肉眼で攻撃を目視する事すら適わない。ただ何かが近づいてくる事を瞬間的に直感で捉えられるだけで対処自体がまったくできない。

「うわあああーっ!!」

——それは圧倒的な実力だった。気弾は次々と容赦なく炸裂を引き起こしていき連続的に攻撃を加えていく。全身の激痛にひたすら耐えながらどうにか動作を起こそうにもそれさえ叶わない威力と激痛である。

戦闘用の服装じゃないせいで浴衣自体もボロボロになり爆発で吹き飛ばされ地面へと強く自身を叩きつけ大きく肌と土を擦り剥き削り取りながらようやく勢いは止まる。

その際、浴衣にしまっていた先端が丸く削られた純白の星が地面に零れ落ちた。あれだけの凄まじい威力を持ってしてもこの星形の宝石は罅も入っておらず、悟飯はその固さに目を疑ってしまう。

「クツクツ、遂にオレは究極の力を手に入れたぞ。これでオレは自由だ、奴等に従う理由もない…。」

（栽培マンが喋った！？ いや、それよりも奴等に従う…って事は…。）」

どうやら合体した際に知能も大幅に発達したように窺える。悪意だけが込められたような野心的な感情の一言に悟飯は驚きを隠せずにいた。

だがそれ以前に発言の意図がよくわからない。奴等に従う？血液が流れ大幅に身体的なダメージを受けた今でも頭は回転させられるほどの体力は残っていた。

その体力を使って全身全霊、頭を回転させていく。奴等ということでは仲間か、栽培マン以外に敵がいるということであり、しかも従うという事は栽培マンよりも強い存在が何人もいて…。

「はあ…はあ…なんで栽培マンがこの世界にいるんだ…。まだ他にも仲間が来てるのか…！」

「栽培マン？ 違うな、オレは究極のバイオ戦士だ。貴様にもわかるだろう、この圧倒的気と魔力の高さを…。」

確かに彼の言う通り、今の悟飯では到底倒す事ができない相手でもある。圧倒的な気がそれを物語っているように肌身で彼は感じられるのだ。しかしそれでも退く事は許されない。

（氣と魔力……——そうか！氣と一緒に混ざっていたのは魔力だったんだ。確かに物凄い力を感じる。）

「それと仲間については知る必要はない。なぜなら貴様は此処で死ぬのだからな！」

死刑宣告のようにも聞こえた。片手を悟飯へと突き出したバイオ戦士は強大な邪悪の気と魔力を駆使して気弾を作り上げようと行動を起こす。それは死が目の前に近づいてきているような気もするのだ。

(このままじゃ……やられる……。)

浴衣状態というのがハンデとなって更に悟飯を弱体化させていた。動かない体に鞭を振るうように起き上がりとしても、もはや自身の体は使い物にならない領域にまで入っている。

Thunder Smasher

「——サンダああ——スマツシャああああ——っ！！！」

それを中止させるが如く叫んだ少女の声は雷撃が伴う煉獄の砲撃をバイオ戦士へと一直線に発射された。狙いは勿論、腹に埋め込まれ

たジュエルシードである。

一瞬で到達させる事に成功すればドラゴンボールへと命中した、それを証明として雷撃がバイオ戦士を包み隠すように発生し激しい金色の線が何度も破壊し尽くす。

「……これで、なんとか…。」

大きな衝撃音と共に爆発を引き起こし、周辺を一方的な暴力によりかき荒らしていく。金髪の少女と悟飯は彼から距離があるにも関わらず音はとても五月蠅い。

例え彼がどんなに強くても前回のドラゴンと同じ例であるのならジュエルシードに直接魔力で攻撃したなら急所を捉えた事にもなり大ダメージを食らう筈なのだ。

（凄い…今のは的確にドラゴンボールが埋め込まれてる部分を狙ってた。これなら…！）

「……今、何かしたのか？」

やがてシルエットが爆発の中から浮かび上がってくるとようやく姿が見えてくる――が、闇色に包まれたオーラと共に彼は無傷の状態で佇んでいた。

というより痛くも痒くもないといった表情を露にされて金髪の少女と悟飯は戸惑いを覚えてしまう。前回は確かにこの方法で上手いっただけなのにこの結果はどういう事なのだろうか？

「どうして、効かな…。」

「——今すぐ逃げるんだっ…！」

原因を探る前に木霊したのは倒れている悟飯の声だった。意味がわからず金髪の少女は叫んだ彼へと振り向くとその最中に醜悪な生き物は笑みを浮かべていたのだ。

更に金髪の少女へと急接近していく、バイオ戦士は唐突にそんな行動を図った。本気を出していないせいもあって悟飯に目でもちゃんと捉える事ができていたからこそその言葉である。

「フェイトおおおおおおおーっ…！！！」

「あ、アルフ…！？」

唐突な展開の連続で混乱を覚える中、フェイトと呼ばれる少女の前に立ち塞がるのは女性の姿をしたアルフだった。両手を広げて後ろのフェイトを庇うように眼前の生き物を見据える。

無論、いくら手加減をしているからといって充分に彼女を殺傷できるほどの威力を持っており此处で止る事さえできない。その前に止まろうともしないのだろう。

「きゃあああああああああーッッ…！！！」

バイオ戦士の突撃を体全身で命中させられる。信じられない程の怪力が彼女に襲い掛かり、そのまま樹木へと強打すれば、血液が口から吐き出しそうな嘔吐感と骨や肉からくる痛みを一瞬感じた後には意識を失ってしまっていた。

「悟飯くん……！！……え？」

「悟飯！なのはっ！これは一体、何が起きてるんだ……！？」

駆けつけてきたのはなのはとユーノであり、樹木の近くで地面へとばさっと倒れている口から血が流れたアルフに目を向けては信じられない光景が広がっている事に気づく。

怒りに震えている金髪の少女と地面に倒れているボロボロの悟飯。そして目の前には身の毛がよだつほどのおぞましい闇色のオーラに包まれた異型の生物が其処にいた。

一瞬で彼女達はこれまでにない危機感を本能的に捉える事ができたのだ。今までは悟飯がいてなんとか立ち向かう事ができたが、この状態は正に悟飯が押されており前回の事件とは比べ物にならないほどの非常事態である。

「あいつは、前のドラゴンよりもつとやばい奴かもしれない……。」「

「悟飯くんでもあんな状態って……。」「

言葉では言い表せない範疇を超えてしまった絶望感が過る。本当は

どうにかしなくてはいけない事態ではあるが目の前の敵を見ていると無力感にも襲われてしまう。

「よくも…よくも、アルフを…!!」

だがそれ等を超える怒りがフェイトの胸の内に湧き上がってくる。邪悪なオーラを纏う凶悪な生物を視界に入り込めば更に増強される怒りに漆黒の斧を握り締めたまま震え出す。

「（まずいつ！完全に逆上して周りが見えなくなってる…!!）なのはちゃん！あの子を連れて遠くに避難して…!!」

「うん、わかったよ！ええっと、そのっ…フェイトちゃん！ここは危ないから逃げ…。」

「うわああああーっ…!!」

その怒りは周辺に撒き散らしているようにも見え、他者を精神的に威圧する目に見えない何かが襲い掛かり上手く言葉を口に出ることが出来ない。

「フォトンランサー、連撃…!!」

「フェイトちゃんってば…っ!!」

完全に周りの声などシャットアウトされており、斧を相手へ向ければ次々と金色の魔法弾を高速の勢いで撃ち続ける――が、バイオ戦士に触れる前に蝋燭の灯火が消えるようにかき消されてしまう。

「無駄だ。この魔力オーラがある限り貴様の攻撃はオレには効かん。」

「――魔力オーラだって!？」

「ゆ、ユーノくん!魔力オーラって……。」

「魔力オーラっていうのは一定の魔力さえあれば誰でも使えるんだ。そのオーラを纏っている間は身体能力や技の威力が上がったり、自分の魔力より低い魔力の攻撃ならオーラが打ち消してくれる。」

でも、長時間使用すれば魔力消費が激しくてあまり実践じゃ使われないんだけど……。」

「もしかして、ジュエルシールドのせいで……。」

「よくもアルフを……!許さない、許さない……!」

突如、強大な金色の魔方陣が出現すると凄まじい魔力を使用しているのが周辺が電撃音に包まれていく、何度も響くバチバチという音にユーノは余計に焦りを覚えてしまう。

「まずい……なのは!無理矢理にでも此処から離れさせよう!」

「そうだねユーノくん…フェイトちゃん、ごめんね。ちょっと強引な事するよ…！」

すぐに彼女の詠唱を邪魔するように腕を引っ張れば魔方陣が消滅する。だがフェイトは抵抗して「離して…！」と暴れるがなのはなんとか強引に反抗する手を抑えながらその場から離れさせていく。その二人の取り乱しさに「ぎぎぎ…」。を歯を食いしばる悟飯。未だに自分の体が動いてくれない事に怒りが溢れてくる、悪意に満ち溢れた巨体に無力感を抱けば抱くほどそれに反比例するように膨れ上がる殺意。

「何処に行くつもりだ未熟な魔導師…。」

「お前だけは絶対に許さない！！アルフの仇だ……っ…！」

「フェイトちゃん落ち着いて！今フェイトちゃんが行っても…！」

「危ないっ！なのは！フェイト…！」

「——っ…！？」

眼前に迫り来る死を導き出しかねない闇の気弾に対して光り輝く桜色のバリアを発生させる。彼女達が気がついた頃にはもう避けられる位置を越していた。

しかし防御魔法を容易に破壊すれば二人へと恐ろしい衝撃音と共に凄まじい爆発を引き起こす、もはや音が物理的な破壊力を伴って

いそうなほどの破壊力を不意打ちという邪道の形で二人に叩き込む。

「きゃあああああああー！！！！！！」

「うわあああああああつっ！！！！」

幸いにも防御魔法を使用したおかげで威力は下げられているとしても、ありえない破壊力が二人に襲い掛かっている事に変わりはない。

そのまま大きく吹き飛ばされてなのはとフェイトはまったく別の位置に地面へ叩きつけられ倒れていた。

「う……くう！フェイトちゃん、早く避難……させ、ないと……っ！」

起き上がろうと身体に力を入れるも思うように力が入らない、それどころか激痛が更に悪化する始末。意識は保っていられるがそれでも体が起き上がらなければ意味がない。

近くには少女が持っていた漆黒の斧が自分達と同じように地面へと倒れていた。意識が途切れそうなほどの全身からくる苦痛を耐えながらもフェイトを探そうとする。

「なのは……！今すぐ治療を……っ。」

「ありがとう。でも、フェイトちゃんは……？」

「うわあああ……ぐっ、うう……！」

「おっと、貴様の製作者には随分とコキ使われたからな。タップリとお返ししてやろう。」

目を向けた先には倒れているフェイトの長い金色の髪を掴んで無理矢理、持ち上げるバイオ戦士がいた。目も当てられない悲惨極まりない状況に絶句してしまう。

常識を飛び越えた弱肉強食の世界を改めて嫌というほど実感させられるが、だからこそみ上げてくる怒りは我を忘れさせてしまうほどである。

「安心しろ。すぐには殺さん……じわじわと痛めつけてやる。」

「う……ぎぎ……やめろ……やめろ……。」

「いやああああ……！」

おぞましい巨体にフェイトは恐怖で全身が震え上がるがそれでも容赦なく鋭い爪を煌かせ、彼女の漆黒の衣装を切り裂いていく。バリアジャケットが破壊されたせいで抵抗力は殆どなくなったと言えるだろう。

目の前の痛ましすぎる風景におぞましさも感じてしまう。恐怖が体を強張らせて余計に身動きを取れなくさせてしまうのだ、あまりにも悲惨な状況は精神的にも辛すぎる面があった。

悟飯はもはや怒りや憎しみ、悔しさとあらゆる負の感情が自身の中

で蠢き頭で処理できるレベルを飛び越えようとしていた。

「うわああ…！！ うあつ、ぐつ…！ぐつ…あ…。」

「やめて、やめてあげて……。 」

そして体が動かない事が負の感情を倍増させて悪循環となっているのだ。無意識に純白の星を強く握り締め、全身が震えながら押し潰す勢いでただ力任せに握り続けていた。

フェイトは口から血が流れ出しながらも必死に耐え続けてる、いっそ意識がなくなっただ方がどれだけ楽なのか。

何度も少女の小さな腹に手加減された怪力が押し当てられる、しかしフェイトからすれば充分すぎるほどの威力を持ち合わせており生死を彷徨わせる事ぐらいは容易だった。

「ギーッヒヒヒィ！」

蹂躪し続けた醜い化け物は爽快そうな声を上げる。少女は嘔吐感や酷い激痛も何故か感覚がなくなる錯覚を覚え、拳が腹へ打ち込まれる刹那も遅く感じながら――。

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおー
—————つつつ!!!」

その空間内を支配するのは絶叫とも呼ぶべき静止の音が木霊していた。今まで以上に最後の体力を振り絞って全ての負の感情が込められ空間内を制圧する叫び声が響き渡る。

突如、銀色の光が星から溢れ出していけば気と混ざり合い悟飯はもはや使い物にならない筈の全身を起き上がらせ立ち上がる。そして光は衝撃破となって樹木や地面を破壊的に叩きつけていく。

「きゃああつ…!? 悟飯くん…!」

「つく!なんてパワーだ……。」

地面を無造作に抉り取り、樹木をなぎ払っていく凄まじい衝撃破と共に銀白の光が悟飯自身を包み込んでいく――。

そして銀白の海から姿を現したのは戦闘の際に使用されるセルゲーム時に着用した師匠であるピッコロと同じ紫色の道着に白いマント。両腕には白い星が埋め込まれた青いリストバンドを装着しており、金髪碧眼の姿へと成り代わっていた。

「はああああああっ!!」

黄金の炎に全身を纏った悟飯は怒りを露にする。自分の友達であるコーノとなのはを傷つけた事、そしてフェイトの仲間であるアルフに酷い重症を負わせた事。

そして最後に、何度も何度もフェイトを意図的に痛めつけた事に対する猛烈な負の感情が澄んだ銀色の光を芽生えさせていた。そしてやがて銀色のオーラが金色に積み重なる形で纏っていく。

「なんだと!? まさか貴様も魔力オ―……――がああっ!!」

顔面へと大きく塗り込んだ怪力を誇る蹴りが音速とは比較にすらならない爆発的な速度を持った上でバイオ戦士の顔を歪ませ、金色の髪を掴んでいた手が放す。

意識が途切れかかって視界はまるで靄がかかったように上手く見通す事ができないフェイトだが、すぐに悟飯は彼女を抱えて一瞬でなのはの近くに降ろす。

「後はボクに任せて。」

「……あ、うん。」

枯れてしまった声で返答する。もはや体力の限界、ということもあるせいでゆっくりと目を降ろすとそのまま気絶してしまう。

「な、なんだ今のは……。」

「——お前はもう謝っても許さないぞ!!」

スーパーサイヤ人となった悟飯は全身の痛みを忘れて鋭い眼光を向ける。ここから悟飯の大反撃が始まるうとしていた。

第12話 波乱の温泉旅行（中編2）（後書き）

アリサ「超魔導戦士の誕生ね！悟飯、あいつをギッタギタのポッコポッコにしてやりなさいっ！」

すずか「アリサちゃん相当怒ってるみたいだね。気持ちはわからないけど…」

なのは「にはは…次は後編になります。」

第13話 波乱の温泉旅行（後編）

「——フィジカルヒール！」

「……………」

ユーノが唱えた魔法は回復魔法である。大怪我を負った彼女をこのまま放つてしまえば死んでしまう可能性は否定できない、すぐに彼は回復魔法で治療していた。

致命傷を負ってからかなり早い段階で回復魔法を使ったことにより恐らく人体への致命傷は免れるだろうとユーノは頭で思考する。

「…そういえば、どうして悟飯くん…服装が変わったの？」

「多分、バリアジャケットだと思う。悟飯が無意識に思い浮かべた服装があのだ着だったんだ。」

今、この戦闘で一番に望ましい服装は紫色の道着に白いマント、それを悟飯は無意識に思い浮かべて防御魔法バリアジャケットという形で見事に再現していたのだ。

「…もしかしたら、浴衣のままじゃ戦いづらかったのかもしれない。」

まさにユーノの言う通りであり、「浴衣」は戦闘用の服装ではないのでハンドを背負いながら戦っていた事になる。これが彼にとって負ける原因の一つでもあった。

馴れ親しんだ道着こそが合体する事でパワーアップし、そしてジュエルシードの力で更に信じられないほどに飛躍的な戦闘力を上げたバイオ戦士を前に一番に望ましい服装なのだ。

「じゃあ悟飯くんは魔法を…!？」

「うん、そういう事になる…それあの銀色の光は魔力オーラだ。」

「……でもユーノくん。金色も混ざってるけど…。」

魔力オーラは魔力を使用し続ける事で身体能力を上げる。その増強ぶりは魔力の強さで変わるがバイオ戦士のようにジュエルシードの力を借りて発動すれば爆発的に上昇するだろう。

「金色はよくわからないけど…でも、あの怪物は一つのジュエルシードの力だけじゃない。」

「えっ!?それってどういうことなの…?」

「多分、最低でも三個ぐらいのジュエルシードの力はあるはず……。」

「

あれだけの圧倒的な身体能力を発揮するにはそれぐらいの数が必要であり、あの悟飯をボロボロの状態にまで追い込むにはそのぐらい

の数が必要とするはずである。

倒す事はできても根本的な解決にはならない、悟飯にとっては最悪の特性を持ち合わせているせいであのような結果を生んでしまった事も原因の一つなのかもしれない。

だが仮に魔力オーラを使用した状態で戦えば、魔力ダメージが追加された状態での格闘戦なので根本的な解決も図れるのだ。

「これ以上誰も傷つけさせない……!!」

「ほざけ！パワーアップして自信をつけたようだが、それでもオレの方が上だ……っ!!」

バイオ戦士は次から次へと両手から音速を超える禍々しい気弾を連射する、雨のように降り注ぐ気弾は嵐を巻き起こすかのように爆発の連鎖を引き起こす。

とてつもない爆風が周辺を乱れ撃ち、それだけで森に多大な被害を与えようとするような問答無用の強風であった。なのは達はその彼等の様子を見据える。

「フハハハ！ どうだ、これで貴様も……」——「なんだとっ!？」

「……………」

「さっきの攻撃、当たった筈なのに……すごい、悟飯くん……。」

爆風が止めば金色の光と銀色の光に包まれた悟飯の姿があった、まったく怪我の様子など見受けられず無傷の状態のまま静かにバイオ戦士を睨みつけていたのだ。

「ば、バカな！今の攻撃はオレの気に最高の魔力を上乗せした筈……まさか、貴様の魔力はオレよりも上だと言っのか……！」

――刹那、言い終わった直後に悟飯の姿がすぐ目の前に映し出される。その場にいる全員は彼が移動した事すら把握できないほどの超絶な速度を誇っていた。

「だだだだだだだだっ……！」

音速を飛び越えた反応速度をバイオ戦士が持ったとしても到底反応できない悟飯の壮絶な破壊力を秘めた連続的な拳が雨のように降り注ぐ。

避ける事もできなければ防御する事も声を出す事も叶わない制裁の攻撃の数々だ。痛みが頭へと伝わる前にはもう何十発もの数え切れない打撃が全身に叩きつけられているという恐ろしい光景でもあった。

「だああー……っ……！！！」

「ぐああああー！！！！！！」

彼等の戦闘では一分という60秒間はとても長い戦闘である、60秒だけで数々の攻撃が繰り広げられるほどの長い時間であった。

そして最後のバイオ戦士を大きく吹き飛ばす事のできる重圧な一撃を食らわせば一瞬で吹き飛ばされてしまう。

痛みに耐える暇もなく視界が悟飯から遠ざかっていく中で彼の姿は消えてしまう、そして彼の位置を特定する前に早かったのは悟飯の攻撃であった。

「りゃあっ！」

更に上空へと足を蹴り上げる、吹き飛ばされる速度よりも早く、彼が認知するよりも早い悟飯の行動の数々はもはやバイオ戦士にとって対処不能である事は間違いない。

だからこそバイオ戦士の眼前に悟飯が目視する事すらできない。視界に入ってくる前に頭上から激痛が走り出す。上空へと吹き飛ばされていた筈が一気に地面へと落下していく。

「ぐあ……！！ このオレがこんなガキに負けてるだと……ふざけるなあああっ！！」

地面に傷跡を残しながらも強大な威力を持って全身から激突、よう

やく連続攻撃が止まって何が起ったのか理解する。見上げてみれば空中から悟飯が自分を見下ろしているのだ。どうやら上空に吹き飛ばされている間に彼から攻撃を食らい、頭にダメージを受けてそのまま地面へと落下する形になってしまったことを理解する。紫色の血液を口から零しながら。

「ゆ、ユーノくん…さっきの攻撃、見えた？」

「いや、全然……かな。」

しかしこれ等の悟飯の攻撃は全て目視する事ができずにいた。バイ才戦士が吹き飛ばされたりする所は辛うじて目に見えるがあまりの速度に何が起っているのかすらわからない。

今はバイ才戦士が地面へと叩きつけられ血液を吐いて重症を負っている事が確認できた所なのだ。自分達が目に見えない間に彼はどんな攻撃に出てどうやってあそこまで追い詰めたのか理解できない。

「いいだろう…オレの本気の一撃で貴様を跡形もなく消し飛ばしてやる！」

バイ才戦士にとっては追い込まれるという事実はプライドが傷つけられたも同然であり、自身の力に酔いしれているせいで尚更怒りを膨らませていた。

自分の持つ気と魔力、二つの力が混ざり合った闇色のオーラが燃え上がり両手を突き出して漆黒のエネルギーが蓄積されていく。

高密度に圧縮された闇色に輝く気弾はその場にあるだけで強風を巻き起こし、地面へと亀裂を入れていく。狙いは上空の悟飯だ。

「くたばれええええつ!!」

突然、放たれたのは一直線に続く漆黒の光線。闇の光線がそのまま一気に悟飯へと常人では目視する事もできない速度で貫こうと襲い掛かってくるのだった。

だが悟飯は額の方へ両手を向ければ瞬時に自身の持つ魔力と気が合わさったエネルギーが凝縮される、そして一気に両手を突き出す。

「はああああー!!!」

通称、魔閃光と呼ばれる悟飯の技が発動。銀色のオーラに包まれた青白い光が漆黒の光線へと立ち向かっていく。光線と光線は空中で激しく衝突する。

光線の周りには暴風とも呼ぶべき衝撃破が響き渡り、乱暴に樹木を傷つけていく中で光線同士はおぞましい火花を散らしながらも闇の光線は魔閃光によって貫通していく。

「はああああつ……!!!」

「ぐ……がが……オレが押されてるだと……あと少しで自由が手に入る所だったのに……たす……けて……ゲロ……さま……ヒギヤアアア……!!!」

死の光とも呼ぶべき閃光はバイオ戦士を飲み込んで跡形も無く消滅させてしまう。怪物の腹に埋め込まれたドラゴンボールも魔力ダメージにより決り出され宙に浮いた状態となった。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……。」

バイオ戦士の姿は悲鳴と共に消え去っており、オレンジに輝く球体が目に入ってくると悟飯は緊張の糸が途切れたかのように全身の猛烈な痛みが今頃になって響いてくる。

同時に体力を使い果たしたせいで激しい息切れまで起き、銀が混ざったような金色のオーラが消え去ると髪は金髪から黒髪になって瞳の色も元の状態に戻り地面へと倒れてしまう。

「——悟飯くん！！ ユーノくん、わたしはジュエルシードを封印するから悟飯くんをお願い！」

「わかった！なのは頑張つて……！」

なのはは槍のような形状をした武器をドラゴンボールへと突きつける。そして桜のように輝くリングが杖を纏いながら前方に向かって凄まじい桜色の魔力を叩きつける——。

「……封印……！」

天空へと続く桜色の柱と共に銀白の光がドラゴンボールから流れ出し破壊された環境が修復されていき、なぎ倒された森も抉られた大地も全て戦う前の背景へと満ちていく。

白い背景の中にただ一つ、桜色の光だけがハッキリと写し出されていた。なのはの声が響けば周辺を満たしている光が消失してドラゴンボールが赤い宝石に埋め込まれる。

「ユーノくん、封印できたけど悟飯くんの方は大丈夫？」

「全然大丈夫だよ。凄い回復力だ…。」

悟飯にとっては先程の戦いのせいで重症を負っているとはいわずにのど、寧ろ軽傷である。更にユーノの回復魔法のおかげでただでさえ早い回復が更に早くなりすぐに怪我が治るだろうとの事。

改めて彼女達は悟飯が別世界の住人であると認識させられた事件でもあった。

（なんだろう、体に凄い疲労感が…。）

だが怪我は軽傷である筈にも関わらずそれを飛び超えるほどの異常な疲労感が体に残っており、ユーノの回復魔法で更に回復力は早くなっているはずだが何故か疲労感が中々取り除かれない。

「この回復力なら夜明けには完治するかもしれない。」

「そうなんだ…えつと悟飯くん、立てる？」

心配そうな声と共に倒れている悟飯に呼びかけると彼はすぐに体に力を入れて起き上がる。

「うん。ありがとうユーノさ…じゃなくてユーノ、なのはちゃん。」

「大丈夫そうならよかった。——ところで、その服装…。」

「服装…？ あれ、いつの間にか服が変わってる！」

怒りで我を忘れていたという事もあって、服の変化を指南され始めて気がついた悟飯は自分の見慣れた服装を見て驚いた表情を浮かべていた。

「セルゲームの時に着てた道着だ…懐かしいなあ。」

「そういえば、悟飯くんのリストバンドちょっと変わってるね。」

青色のリストバンドに華冠のように埋め込まれた真つ白い星に目を奪われてしまう。

「って、これデバイスだよ…！」

「…デバイス？」

唐突に出てきた言葉にまったく理解ができない様子で目を丸くさせながら首を傾げる、それに対して説明に困ったような反応を見せる二人。

「え、えーと…デバイスっていうのはね、つまり…。」

「クアッ！クアックアッー！」

「——うわぁっ！？」

金色の髪を伸ばした少女を背に乗せながら登場したのはハイヤードラゴン、悟飯達を見つけて嬉しそうな声を上げると近寄っていく。

「ハイヤードラゴン！ あ、背中に乗せているのって……。」

「アリサちゃん…！！」

「この子はどうしよう、このままにしておくわけにもいかないし…。」

「クアッ！クアッ、クアッ。」

背中に乗せられ気絶しているアリサに驚く暇もない、ユーノが悩み始めた頃にハイヤードドラゴンは悟飯の首に巻かれた白いマントを噛むように口に入れるとクイツと引つ張る。

「わあっ！？ いきなりマント引つ張らないでよ……！！」

ハイヤードドラゴンによって強引に視界から入ってきたのは気絶してしまったフェイトと赤茶の女性。彼女達の事も決して忘れていたわけではないが今後の彼女達への対応に困ってしまうのだ。

もしかしたら、このドラゴンは彼女達もどうするんだと無言のメッセージを伝えたかったのかもしれないと悟飯は考えていた。アリサだけならともかく、あの二人は敵なので余計に頭を悩ませる。

「……ふえっ！？ 悟飯くん、服が……！」

「えっ？ 元に戻っちゃった……。」

マントが引つ張られた直後、悟飯が思考している途中で何故か道着から青い浴衣へと服装が変わっていたのだ。一瞬の出来事であり気を取られていたこともあって気づく事に時間がかかった。

それと同時に白い星型の宝石が空中で形成されるとそのまま静かに地面へと落下する。軽い音と共に落ちてきた星にユーノはまじまじと見つめていた。

「やっぱり、この星はデバイスだ……悟飯、少しの間でいいから調べ

させてもらってもいいかな。」

「いいよ。」と悟飯は特に気にする様子もなく呟く。実際の所、悟飯自身もこの宝石について今一つわからないのだ。というよりわかる事の方が少ない。

だからこそ調べてもらいたい、というのも悟飯の本音でもあるので丁度良かった。

「でもアリサちゃんはどうしよう、お布団で寝かせておく？」

「それがいいかな。じゃあ、ボクはハイヤードラゴンを家に連れて帰るから、なのはちゃんはアリサちゃんを旅館に連れて行って。」

ユーノは白い星を調べるのに夢中となっているのか角度を変えて観察したり手で触ってみたりを繰り返している、よく聞いていればなのは自身もフェイト達の事は気にかけていない。

忘れてはいないのだとしても恐らく先程の戦いやアリサの事で精一杯になっているのだろう。——そして悟飯は改めて気づいたのだ。

「うん！気をつけてね悟飯くん。」

「あまり見たことがないデバイスだ…一体どうなっているんだろう。」

なのははドラゴンの背に乗ったアリサを抱えて今にも少ない体力を

振り絞って旅館を目指す。ユーノはこちらの会話が耳に入っている様子がない、余程この星が珍しいのだろうか？

だがこれは好都合でもあった。悟飯が予想するにフェイト達が起きた後にユーノ達は彼女達に何をするのかまったく予想ができないのだ。只でさえ敵同士であり、何かする可能性は充分である。

「クアーツ！」

「ありがとうハイヤードラゴン。ボク達も行こっか。」

ドラゴンの喜んだ声が小さく聞こえた、すぐにフェイトと赤茶の女性をドラゴンの背に乗せる作業へと移っていく。それは勿論なのはとユーノには絶対に気づかれないようにしなければならぬ。

高速を容易に越える速度でなるべく音を立てずにその場から離脱していく、空中を駆け抜けていく最中で悟飯はユーノの方へ気づいていないか振り返ってみれば今も星に集中していたのだった。

「ふうっ、もしアリサちゃんにバレたら大変なことになりそうだ。」

更に付け加えるならフェイト達にはドラゴンボールについて聞き出す必要があったのだ。あのバイオ戦士とフェイト達がまったく無関係だとは言いつらい、バイオ戦士の発言から考えてわかった事の一つである。

そして二人の家がわからないということもまた理由の一つ。恐らくこの辺りの近くに家がある事は確かなのだが家など数え切れないほ

どあるので一々探してもいられない。

「クアーツ、クアツ！」

怪力で窓をこじ開ければアリサの家へ侵入するとハイヤードラゴンの部屋に二人を置いておくことにした。

ペットの部屋であるにも関わらずスペースが充分すぎるほどの大きさであり、この部屋なら誰にも気づかれることはないと踏んだ上である。

「しまった！ちょっと力が入りすぎちゃった。後で鮫島さんに謝らないと……。」

「クアツ、クアツ！」

まるで励ますようにハイヤードラゴンは言葉を返す。彼等の侵入は深夜ということもあって誰も気づくことはなく、気絶している二人の顔を目に留めておけばすぐに旅館へ戻ろうと窓際にまで歩く。

「それじゃあ、ボクは旅館に戻るから明日まで二人の事を頼んだよ。鮫島さんにはボクが伝えとくから。」

「クアーツ♪」

心が晴れるような声と共に悟飯はすぐに旅館へと戻っていけば、その時にはもうユーノはフェイト達がいなくなっている事に気がついて必死に周辺を探していたのだ。

隠した犯人が悟飯であるという事実にはまったく気づいていなかった。たので「見なかった？」という質問にはNOを突きつけておいた。嘘を吐くという罪悪感が心に残るが仕方ないと割り切りつつ。

魔法の事についてはユーノから聞き出そうと質問してみたがあと少し経てば夜明けなので帰る頃に説明してもらう事にする。

二人が使える魔法の中に念話というテレパシーのような魔法があるのでそれを使って説明してくれるという事で落ち着いたのだった。後の僅かな時間は睡眠に使うという事で三人は旅館の自室に戻って朝が来るまで周りの人にバレないように傷と疲労を癒しておく事にする。

「むー… やっぱり、アレは夢だったのかしら。」

—— 太陽が暖かく地上に光を与える中、アリサだけが何故か朝から思い悩んだ様子で考え事をしていた。

「どうしたのアリサちゃん… 悪い夢とか見たの？」

「ああ… なのは、昨日なにかへんなことなかった？」

「ええつと…ヘンなことつてよくわからないよ。」

「そう？悟飯、アンタはどう？」

「えっ！？ あ、うん。ハイヤードラゴンを家に連れ帰ったかな。鯨島さんにはボクが知らせておいたから。」

「あ！なんかヘンだと思ったら…でも、それとは何か違う気がするんだけど……。」

「みんなー、そろそろ帰る支度しよう？」

何やら悟飯は驚いているせいもあって言葉が上手く繋がっていないが、なのはから見れば彼にしてはまだ上手い誤魔化し方のように見えたのだ。

すずかの一言でアリサは疑う事をやめて帰る支度を始めたおかげでなのはと悟飯は安心のため息を二人に気づかれぬように漏らすのだった。

後になのはの念話で説明されたのは悟飯の魔力は到底実戦で使えるようなレベルではないらしく、精々バリアジャケットを装着する事ぐらいしか使えないとのこと。

にも関わらず魔力オーラを使用できたのは大きな矛盾点ではあるがそれでも悟飯自身が持つ魔力自体はそれぐらいであると改めて指摘されたのだ。

こうして波乱の温泉旅行は無事に幕を閉じ、新たな敵の存在を知ら

されると同時に悟飯は魔法の力を手に入れたのだった。

第13話 波乱の温泉旅行（後編）（後書き）

悟飯「ようやく温泉旅行編が終わりましたね。」

アリス「おつそーい！まったく、作者は一話にどれだけ時間かけてるのよ！後半のアタシなんか気絶してるだけだし…。」

すずか「アリスちゃん、前者はともかく後者は愚痴になってるよ。それを言うなら私だって…ふふふふ。」

なのは「にゃ！？すずかちゃんから黒いオーラが……。」

第14話 交わした約束

暖かな風が心地よく過ぎ去っていく、花畑に囲まれた場所で金色の髪を揺らした少女と母親は互いに寄り添いあうようにいた。

「ほら、アリシア…できたわ。」

優しく少女の名前を呼んだ母親は花冠を手にとっており、静かに少女は母親の傍に寄っていけばそれを頭に乘せて添えさせる。その事が嬉しいのか自然と少女は明るい笑顔を浮かべていた。無論、母親の方も穏やかな笑顔を浮かべて。

（——アリシア…？ 違うよ、母さん…。）

だが一つ違和感があった。この金髪の少女は“アリシア”という名前ではないのだ。それにも関わらず母親はアリシアと呼んでいた。

（私の名前は……。）

母親の暖かな笑顔を前にして口にしようとした言葉は届く事はなく、突然花畑に囲まれていた風景が変わって見知らぬ部屋に寝かされている事に気がつく。

「此処は、どこ……？」

「クアツ、クアー！」

「きゃあっ！！」

頭が混乱する中、中々自分の状況を理解できずに軽く周りに視線を回せば聞いた事もない奇妙な鳴き声が耳に入ってくる。
只でさえ状況もまともに理解できていない中で更にパニックを引き起こして縋る思いで何かに抱きついてしまう、とても暖かく感じながら。

「わああっ！？」

「——あ……。」

自然と悟飯に抱きついていた構図である事がわかると余計に頭は混乱していく。知らない部屋と見たこともない動物、だが何処か見覚えがあるような生き物。

更に目の前には敵となる少年、一体何がどうなっているのか理解しようにもそれを邪魔するように恥ずかしさが沸きあがってくる。

「あ、あ…えっ、と…。」

「おはよう。もう傷の方は大丈夫?」

「傷…?あ…その、大丈夫。…アルフは?」

「そう、ならよかった。アルフって…赤い髪の女の人だね? それならベッドの下にいるよ。」

「え…?」

驚いた表情でベッドの下へと視線を落とせば女性がすやすやと眠っていたのだ。どうやら彼女が寝ている間に寝惚けてベッドから落ちてしまったらしい。

ハイヤードラゴンが起こそうと床で寝ている女性の頭をつんつんと軽く頭突きを食らわせているが中々目を覚ます気配がしない。…そうしている間にも扉は何の予兆もなく開かれる。

「ふわぁ、ハイヤードラゴンうるさいわよ…。」

「……………あ。」

「クアッ、クアー!」

「…っ!?」

無論、アリサにはこの少女達がハイヤードラゴンの部屋にいること

など知らない。というより悟飯の独断行動なので知らなくて当然なのだ。

更に悟飯に抱きついていいる少女はアリサの登場に驚いて再び抱きついている状態だ。アリサにとってその構図は気に入らない以外の何者でもないの——。

「な、な、な……なにやってるのよー!!」

何より一番に五月蠅く木霊したのはアリサの絶叫だったのは誰も口にできなかった…。

時計の針が12時を指した頃には食堂で金髪の少女達を含めてそれぞれが椅子に座り、食事をしていたのだ。

その食事は豪華な物であり、ステーキやサラダ、スープなどが並べられて喉から手が出るほどの料理が置かれていた。

「……………」

「クアッ、クアックアー!」

「アルフ、これおいしいよ。食べてみて。」

「……あ、ああ……ありがとっ、フェイト。どれどれ……。」

「どっ……っ。」

「本当だ！この肉すごく美味しいよ。」

「クアーツ」

アリサと悟飯は食事中は一言も喋らず無言を貫き通していた。金髪の少女はそれを気にせずに並べられた料理をぱくぱくと食事している。

しかしこの赤茶の女性は敵の料理をご馳走されてその他諸々の事情のせいでとても気まずく感じていた。だがそれでも料理を堪能している様子である。

「この子もおいしいって言ってるのかな。」

「そうなんじゃないのかい？」

「……………」

何時までも何時までも無言の時間を過ごすのはどうかと思い始めたのか、遂に沈黙を破る一言を落とす。

「…で、この子達だねのよ。」

「だれって…それは…その……………」

「こ、た、え、な、さ、い！」

「フェイト…フェイト・テストロッサ。こっちがアルフ。」

だが再び沈黙の時間を作り出したのはフェイトと名乗る少女。意外な人物から名前を名乗られさすがのアリサも戸惑いを露にしていた。

「そ、そう…アタシはアリサよ。アリサ・バニングス…。」

「ボクは悟飯…孫悟飯だよ。よろしくフェイトちゃん、アルフさん。」

「ってアンタ達まだ自己紹介もしてなかったの!？」

話がまったく掴めない様子でアリサは声を大にして言う、悟飯も何から話せばいいのに対応に困る一方だ。

「——あっ! そういえばアンタ…!!」

アリサ自身は夢だと思い込んでいたはずの記憶が蘇ってくる。記憶の中の少女が目の前にいる、それだけでアリサにとっては驚愕的なのだ。

もはや言い訳もできなくなってしまった状況に悟飯は誤魔化せるわけもなく全ての事情を説明してしまう。もはや悟飯にとってはこれしか選択肢は残されていなかった。

「はあ……悟飯、アンタねえ……。」

「今まで隠しててごめんなさい……。」

「……まあいいわよ。アンタも悪気があったわけじゃないし。」

過ぎた事を何時までも責めるつもりもなく、ただ事情を聞けば聞くほどこの少女への対応に少しばかり緊張感が増すだけである。

「……ところで、君の魔力についてだけど。」

唐突に発した言葉にアリサはきょとん、とした顔を見せた。魔力の知識がないせいで中々ピンとこないのだろう。無理もない、悟飯も最近聞いたばかりなのだから。

「ちょっと悟飯、魔力ってなによ？」

「魔力は魔法の源のこと……君の魔力は少ないのに、どうしてドラゴンを倒せたの？」

「まさか純粋な身体能力じゃないよねえ？」

アリサの言葉には悟飯に質問した筈なのだがフェイトが答え、アルフは冗談っぽく笑う。

馬鹿力という次元を超えたのではないかと思うほどの怪力にさすがにないだろうと推測で彼女達はそう結論付けているようにも見えた。

「はい、アルフさんの言う通りですよ。それと、あのエネルギー弾については気…フェイトちゃん達の世界で言う魔力に似たものです。」

「……え？」

「世界って…どういうこと？」

「まったく！その前にアンタ達のこと話さないよ。こっちは情報教えたんだから。」

更に言うなら料理もご馳走したのだ。アリサはすっかり機嫌を悪くしたまま彼女達へ警戒した質問を投げかける。

「……悪いけど名前以外は教えられない。」

「はあ？ふざけんじゃないわよ、なんで教えられないわけ？」

余計に苛立ちを募らせたアリサは刺々しい声と共に少女へぶつけて問いただす。だが一向に口を割ろうともせず沈黙だけが流れ込む。

「え、えーっと…教えたくないなら言わなくていいよ。でも、ドラ

ゴンボールは元々ボク達の世界にあつたものなんだ。」

「ジュエルシードが元々あんたの世界に……って、どういふことなんだい？」

「あ、はい。理由はわかりませんが、ボクはこの世界とは違ふ世界から来ました。」

ボクの住む世界にはドラゴンボールと呼ばれる球が7つあって、全部揃えて合言葉を言つと神龍^{シェンロン}と呼ばれる龍が現れてどんな願いでも叶えてくれます。」

——悟飯はざらつと自身の世界やドラゴンボールについてなど説明し始める。それはまさにオカルト的な信じられない話を向けられたも同然でありアルフとフェイトは互いの目を見合す。

途中から嘘なんじゃないかと疑惑を持つがそれでも話のつじつまが合いすぎるのと悟飯の態度が嘘を言っているようにも見えないせいで余計に信憑性が増していくのだ。

「……私は母さんに頼まれたから、ジュエルシードを集めてる。」

「フェイト！そんなこと言わなくても……。」

「お母さんに？　じゃあ、フェイトちゃんのお母さんはドラゴンボールの事を知ってるの？」

母親という言葉が出てきたのはあまりにも予想外だった、だからこそ悟飯は咄嗟に反応する。

「私の母さんがどこまでジュエルシードについて知ってるのか知らないけど…母さんからジュエルシードのことを教えてもらったんだ。」

「…それで集めて来いって言い出したのもフェイトの母親さ。」

アリサにとつてはちんぷんかんぷんな話である為、疎外感から話に入りづらい状況となってしまうが一方で悟飯の思考は回転していた。

「それなら栽培マンについては…？」

「あの怪物のこと…？私とアルフにはよくわからないかな…。」

「でも、あの時“貴様の製作者には随分とコキ使われた”って言うてたんだ。」

「……それもよくわからない。」

フェイトにとつてはワケもわからないまま八つ当たりの為に痛めつけられていたような物であり、まったく理解していない。

そもそもあの状況で考えられるほどの余裕も持ち合わせていない。今に至る流れにもその余裕がなかったのでフェイト達は頭の整理がついていないのだ。

「それじゃフェイトちゃん達は栽培マンについて何も知らないんだね。」

「…うん。」

「そつか…。ねえ、一度フェイトちゃんのお母さんに会わせてくれないかな？」

「え…！」

悟飯の思考結果——それは全ての話において母親が共通しているという事だ。ドラゴンボールの謎、栽培マンの謎、全てフェイトの母親が姿を出していた。

ならば母親と話すことができれば、もしかしたら全てといかなくても大体の謎は解けると考えたのだ。どうにもフェイト達は完璧に話を知っているようには見えない。

「…ねえフェイト、あんたの母親は友達だつて言えば会ってくれよねえ？」

「わからない…けどジュエルシードの事なら会ってくれるかも。」

「そつえば、アンタの母親はどこに住んでいるの？」

「別次元の空間にいるよ、次元転移魔法で其処へ行くの。」

——彼女達の会話や母親の行動性を聞いているとどこか違和感を感じ

じてしまう、そして場所を聞いた途端にアリサの不安は更に強くなっていく。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！それ危なすぎるじゃない…！」

「大丈夫だよ。ただ話を聞くだけだから…気になることもあるしね。」

だが彼の発言の動機はこれだけではない。何故、自分の娘であるフエイトにこんな危険行為をやらせようとするのか、それもまた疑問の一つと動機の一つでもあるのだ。

悟飯の母親は自分が危険を伴う行為に出ようとすれば必ずといっていいほど猛烈に反対する。説得するだけでも苦勞するほどに。しかしフエイトの母親は真逆な印象を受けてしまう。

「…だったらアタシも行く！悟飯についていくから。」

「ええっ！？　そ、それはダメだよ。アリサちゃんは無関係なんだから。」

「無関係…ですって？」

彼女は突然、声を低くさせて睨めつけるかのような眼光を悟飯へと叩きつけながら握り締めた拳を震わせる。その目には彼女としては珍しく涙が溜められていた。

「悟飯だけじゃなくてなのはまで危ない目に合うかもしれないのに、大切な掛け替えのない親友なんだから黙って見てられるわけないじゃない！！」

「気持ちは嬉しいよ。でも、やっぱり連れて行けない…アリサちゃんが必要な友達だと言ってくれたようにボクもアリサちゃんのことを大切な友達だと思ってる。だからこそ巻き込ませたくないんだ。」

両者は互いに友達を思っただけの発言同士であり考えた。何もしてあげられないという無力感といなくなった時の恐怖感。友達だからこそ出来る上がる感情であった。

「だから、アリサちゃんには待っててほしいんだ。ボクが帰ってくるべき場所だ。」

静かな声で呟くとアリサの溜まっていた涙が頬から流れ出て床に落ちていく。帰ってくるべき場所は自分の家である事を再確認したアリサにとって涙は止まらなくなっていた。

「…わかったわよ。ずっと、ずっと待ってるから…絶対に帰ってきなさいよね。」

このまま二度と会えないかもしれない、抱きたくもない妄想が脳裏を横切る中でアリサは腰を上げると悟飯を強く抱き寄せて温もりを

感じることで不安を消そうとする。

「うん…必ず帰ってくるよ。約束する…！」

暫くするとぽんつと優しく添えられた片手がアリサの頭を撫でていた、誰の手なのかと思考しながら見上げてみれば悟飯の微笑が目に写る。悟飯の片手がアリサを安心させるように触れていたのだ。

「クアツクアツ…！」

「きゃあああ…！」

二人を引き裂いたのはハイヤードラゴンの鳴き声であり、驚いてアリサはすぐに悟飯から離れてしまう。よく考えてみれば人が見ているときに何をやっていたんだろうとアリサは顔面が真っ赤になっていく。

「アリサちゃん、顔が赤いよ？ 熱でもあるんじゃない？」

「う、うるさいわね！ 熱なんかないわよ…！」

「鈍感だねえ…ってフェイト、どうしたんだい？」

「…なんでもないよ、アルフ。」

赤い目線が二人を捉えていたことに気づいていても、その本心に気づくことはできないだろう。彼女にとって生まれて始めての仄かな嫉妬である。

数十分の時間が流れた先には食事も終わり、ジュエルシードを集める為にフェイトとアルフが帰る頃になっており現在は玄関で靴を履き支度の最中だ。

「ジュエルシードの報告をする日は決められているんだ。その時になつたらまた来るよ。」

「わかった！ボクもそれまでには準備をしておくから。」

ジュエルシード集めは悟飯も手伝おうか悩んだ末に、なのはと敵対する可能性もありフェイトが無理にしないでいいと言葉も貰ったので手伝わない事に決めたのだ。逆に邪魔もしないという条件で。

二人は悟飯達に背を向けて自宅に帰るために家を出て行く。――少なくとも数日の間は悟飯とアリサは何時もの生活を送る事ができるだろう。そして残りの少ない時間は彼等の休息でもあった…。

第15話 悟飯のハチャメチャ初デート（前編）

日数が経ってフェイトの母親に報告する日は一刻と近づいていつていたのであった。少なくとも報告する日までには自身のデバイスをユーノから返してもらう必要がある。

念には念を、という事もあるのだが悟飯自身はユーノとなのはに会う度に罪悪感という名の辛さが毎回襲い掛かってくるのだ。アリサは悟飯の様子に心配を投げかけ、なるべくフォローしてもらおうようにしていた。

ユーノが言うにはこの星型のデバイスは使用者の潜在魔力を大幅に上昇させるという特殊な能力を備えているとか。だから悟飯は無意識にそれを発動する事で魔力オーラを使用する事ができたらしい。だが通常は魔力のリミッターとしての役割を持っており、普段は負担でしかないのだという。だがフェイトの時のように強い感情で突き動かされた途端に解除する傾向を持っているらしい。

「…そういえば悟飯、そのデバイスに名前を決めてって言われたんでしょ。何にするの？」

「うん！ “ブレイブソウル” にしたんだ。お父さんのようにたいてって意味も込めて。」

「お父さんねえ……。」

更に言うなら、リミッターを解除して悟飯が本来持っている魔力を大幅に上昇した所でまた一つのデメリットが出てきてしまうのだと

ユーノは語る。

魔力を強制的に大幅に上昇させるので負担もかなり大きいのだ。更に魔力オーラによる身体への負担、二重での負担は相当な物であると言っていた。

「…ね、ねえ悟飯！ちょっと買い物に付き合いなさいよっ、本当は鮫島が来るはずだったんだけど用事があるみたいだから…」

「うん、いいよ。」

「ありがとうございます、悟飯坊ちゃま。」

「ちょっと何笑ってるのよ…！」

道端を歩いていれば静かな笑いが耳に届いたので振り返ってみると鮫島が何故か笑みを浮かべていたのだ。それに反論するアリサも、悟飯にとっては不思議な光景でならない。

「申し訳ございません…。では悟飯坊ちゃま、アリサお嬢様のことよろしく願います。」

「わかりました。」

「ほら、はやく行くわよ悟飯！」

鮫島の足が止まったのを見たアリサはすぐに悟飯の腕を引っ張っ

て鯨島の視線から逃げるように立ち去っていく。
行き当たりばつたりと動き続けていると店が立ち並ぶ歩道に到着する。二人きりになったことから奇妙な緊張感が胸に焼きついてどうにもアリサは落ち着いていられなかった。

なんだかんだで行き着こうとする先は雰囲気のいい喫茶店。——実はアリサにとっては此処に行き着く事は予め予定されていたのだ。暫く戻って来れないであろう悟飯に、せめてこの少ない時間を共に過ごしたいと考えた彼女はこの時間を、二人の時間をどう過ごすか此処に至るまで考えていた事だった。

「ここってなのはの両親が経営してる喫茶店なのよ、女の子に大人気なんだから！」

「そうなんだ。…あつ！」

「さっそく入り……って悟飯！？どこいくのよ！」

あらぬ方向へと歩み寄っていく悟飯にアリサは反応の遅れた言葉を投げかけるも、こちらに振り向くことはなく目的地にまで歩いていつてしまう。

「……。」

「どうしたのフェイトちゃん？ なにか探してるみたいだけど…」

悟飯の目指した先には喫茶店の前で立ち尽くしているフェイトだった。声をかけられた張本人は少し驚いたような反応と共に視線を彼と交わす。

「悟飯…！ うん…母さんにお土産を買おうと思って。でも財布を落として…。」

「——ちよつと悟飯、どこに行くのよ！ って、なんであんたまで此処にいるの！？」

アリサにとっては限られた時間を悟飯と過ごす予定——なはずが意外な人物の登場により戸惑いを隠しきれずにいた。

話の成り行き上、フェイトの事情を聞き出せば母親の為に土産を探し回っているのだとか。だがその途中で財布をなくしてしまい仕方にくれているらしい。

「なるほどね、事情はわかったわ。でも正直、今日は人通りも多いから見つけるのは厳しいんじゃない？」

「…そうだね、財布は諦めてアルフに相談してみる。」

幸い、フェイトの財布は小銭程度しか入っていないので深く気にする必要もないのだ。だが相変わらずの無表情ではあるが何処か暗い

影が強くなってしまったように感じる。

悟飯は困り果てたように視線を巡らせば一つのポスターが目飛び込んでくる。“新メニュー発売記念！”と大きく書かれた紙を読んでいると悟飯はぴんつと名案が浮かぶ。

「ボク、この大会に参加するよ！」

「…へ？なによこれ…新メニュー発売記念、優勝商品は金一封と翠屋ケーキセット…。」

「あ、悟飯まって…！」

「……って悟飯！？」

その間にも悟飯はすぐに喫茶店へ直行してしまう。軽く混乱を覚えながらもすぐにアリサとフェイトも中へと入っていく。

壁に貼り付けられたポスターの内容は喫茶店にて、沢山の新メニューを制限時間内に食べきれた者が優勝商品を手に入れるという悟飯の種族上、有利な条件が整えられたイベントだったのだ。

「いらっしやませー……あら？悟飯くんにはアリサちゃん…それとはじめて見る子ね…。」

「あ、こんにちは…えーと、こっちはフェイト…フェイト・テストロッサ！」

「はじめまして…。」

「フェイトちゃんね、私は高町桃子。よろしくね?」

「あの、すみません。チラシに書いてあった大会ってまだ参加できますか?」

「ええ、大丈夫よ。悟飯くんも参加するのね。」

唐突に話題が変更された直前に悟飯は早速申し出しようと試みてしまふ。アリサとフェイトが悟飯について口に出す事もなく話は進んでいく…。

「そろそろ時間だからその椅子に座って。」

「わかりました。」

指示された通りに椅子に座るともう何人もの大人の男性、女性が並ぶように座っていたのだ。準備万端といった雰囲気にも包まれる中で大量のケーキや料理が巨大なテーブルに並べられていた。豪華とも呼ぶべき啞然とする光景が目の前で広がる中、フェイトとアリサは近くの椅子に座って悟飯を見守る事にしたのだ。どうにも今の彼は止められる気配を感じない。

「おい、小僧。そんなちつちえナリで参加するつもりか?」

「え？ はい、そうですけど……。」

隣の男から話しかけられると目を向ける——そこには大男と呼ぶに相応しい男性もこのイベントに参加していたのだ。

「くつくつく……そうか。だが、悪いがお前みたいなちっこい体じゃこの大会で優勝するのは無理だ。俺みてえにデカくねえとな！」

到底、一般常識を持つ人間からすれば理解不能な理論を叩きつけると同時に椅子から立ち上がった男は更にその巨体さをアピールする。悟飯にとっては見上げるだけでもその巨体ぶりは充分すぎるほどに確認できるにも関わらず、立ち上がれば更にインパクトも大きな物へとになってしまう。

「ああっ！アレっていくつもの大食い大会で優勝を勝ち取った「ドン・ハガネ」だ！」

「なにっ！？ ドン・ハガネだと……。まさかこの目で見れるとは……。」

「こりゃあ優勝はハガネに決まりだな。」

「……なによアイツ？」

だが知らない者からすれば彼の理論には言葉を失うばかり、アリサもまた例外ではない。しかし彼を知る者はまた違った反応を見せていた。

観客が言うにはドン・ハガネとは大食い大会を優勝し続けた強敵の中の強敵という存在であり、その場にいるだけで優勝は決まったと思わせられるほどの偉人であるのだ。

「俺の体はデケエ、つまり胃袋も同じくデケエって事だ。」

「うはぁーん！！そんなヤツに負けるんじゃないわよー！！」

「……………」

（確かに大きいけど…牛魔王のおじいちゃんの方がまだ大きいかな。）

勝利を確信した大男は不敵な笑みを浮かべながら悟飯に敗北宣言を下す。だが当の本人はそんなこと知りもせずに、寧ろこの大男より更なる巨体を思い浮かべながら見比べていたのであった。

「ではルールを説明します。ここにある砂時計が落ちるまで沢山食べきった方が優勝です。それでは用意…スタート！」

勝負は幕を切って下ろされる、制限時間は砂時計が満ちるまで。今、此処に激戦の火花が華麗に舞い散るうとしているのだった…。

「——うおおおおおおつ……！！！」

「出たぞ！ドン・ハガネの“四枚流し”……！！！」

「すごい……あんな食べ方ができるなんて。」

豪快な食べっぷりを披露する大男にその場にいた観客（一部例外あり）は魅了されていく……。スパゲッティ、オムライス、サンドイッチ、チャーハン、喫茶店に出る料理を四つほど一気に口に流し込んでしまったのだ。

それはもはや早業という領域であると同時に豪快さも表現された彼しか成しえない技と言えるだろう。次々とあつという間に料理が乗せられた皿は空っぱな皿へと変貌させられていく。

「フハハハ！どうだ、俺がデカい体と胃袋を持つ大食いチャンピオンのドン・ハガネ様だあ！！！」

「結構やるじゃないの。でも悟飯と比べたら全然大したことないわね。」

「おいっ！あつちをみてみる……！！！」

大勢の観客が驚愕した表情を浮かべながら一点に集中させた視線を目的人物へと浴びせていた。その人物こそが孫悟飯。

モシャモシャモシャモシャ……食事音が響き渡るがとても小さい。しかし隣の大男と比べれば上品さや気品さを感じさせてくれる食べ

方、というより一般的な食べ方ではあるが。

どうにも周りの人物はあまりにも急いで食事を進めているのではない印象を受けてしまう。

「……はい。」

「なっ！？　ば、バカな……。」

「いつけー！　こはぁーん！！」

おいしそうに次々と食べ、それでいて誰よりも圧倒的な速度で食事をする悟飯に右に出る者などない。種族の特性上とはいえ、それを知らない者にとっては体が凍りつく瞬間だろう。

「くそっ！　俺はチャンピオンなんだぞ。こんな所で負ける訳にはいかねええええっ！！」

彼にとっては意地でも負けられない勝負、遂に彼の手に八枚の皿がつかまれた。

「ドン・ハガネが皿を両手に八枚持ったぞ！」

「まさか、八枚同時に流す気が……！！」

「うおおおおおおおっ……！！！！！」

差を突きつける悟飯に対して追い抜こうと駆使するドン・ハガネ。その数分間のやり取りは暫くループし続けるが、終了の音が部屋全体に反響した。

「——そこまで！では皿の枚数を数えていきます。まず……。」

店員は参加している人物全員の皿の枚数を数えていく、悟飯を除いた参加者は一般人レベルと比較すれば明らかに常人以上の速度で食べていた事は間違いない。

「……さんは20皿！……さんは16皿！そしてドン・ハガネさんは……30皿です！！！」

「おおおお……。」

制限時間、それはあまりにもごく僅かな時間。砂時計が満ちるまでの時間は限りなく少なすぎるにも関わらず早いと評価されるに値する数を食べていた。

「そして最後の孫悟飯くんは……な、なんと80皿！優勝は、孫悟飯くんです！！！」

「よく食べる子だと思ってたけど…まさかこんなに食べるなんて…」

一言だけ小さく述べる桃子。温泉時に悟飯の食欲には理解していたつもりだが、その理解を超越してしまっていた。だが無理もない、チャンピオンを軽々と越してしまう子供に誰が予想できたというのだろうか？

「あそこまで食べれるなんて……。」

「まつ、とーぜんの結果ね。」

フェイトとアリサも互いに呟く。アリサは悟飯の食べっぷりは充分理解しているので特に驚く様子はないがそれでも嬉しさは強く思っていた。

「すまねえ綾子…兄ちゃん負けちゃった……もうお前を助ける事はできねえ……。」

（え…？）

不意に届いた声に耳を疑う悟飯。その声の主は見慣れた者からであり、思わず一瞬だけ視線を彼の方へ向けてしまう。ドン・ハガネは表情が異常なまでに曇っていた。

「優勝商品の金一封とケーキセットです！どうぞ悟飯くん！」

「あ、はい…ありがとうございます。」

気を取られている間に店員がケーキセットと金一封を両手に抱えて悟飯へと渡してくれる。観客達はただ盛大な拍手と共に悟飯を祝ってくれていた。

だが其処にはチャンピオンについての言葉は一切なく、忘れ去られてしまったかのような扱いで優勝者に対しての言葉だけが送られてばかりである。

「…おめでとう、悟飯。」

「ありがとうフェイトちゃん。」

フェイトもまた純粋に彼の優勝に対してのお祝いの言葉をかけに悟飯に歩み寄っていた。

「……………」

ドン・ハガネは悟飯に対して暗い視線を送った後、椅子から立ち上がって店内を出て行ってしまう。あつという間の作業に気がついた悟飯は驚いた表情を浮かべ…。

「待つてくださいハガネさん！」

「じ、悟飯…？」

店内から出て行く相手を追いかけようと彼と同じように立ち上がって優勝商品を片手に持ちながらなんとか彼を呼び止めることができた。

フェイトはうるたえながら悟飯の背を視線で見送る、アリサは呆れたように彼を見るとフェイトを連れて仕方なく追いかけることにするのだった…。

「…小僧か。負け犬の俺に何の用だ？ 嘲笑いにもきたのか？」

「いえ、さっきハガネさんが“お前を助ける事ができない”と言ったのが聞こえたので…。」

先程の声を思い返しながら彼に話す、それを聞いたドン・ハガネは更に表情は暗いものへと変えていつてしまう。

最初に出会った頃の態度のギャップに悟飯は少し動揺を隠しきれずにいた。

「…俺の妹は重い病気にかかって入院している。その病気を治すには手術しねえとならねえんだが…手術には莫大な金が必要だ。」

「……………」

「俺は金を手に入れる為に仕事を探したが、体がデケエだの顔が怖いだのと言われて全く職に就けねえ…。」

確かに彼の体は巨体と表現するのが確だと感じさせるほどに体格は大きい。顔が怖いかどうかは判断できないが体が大きい事は確かなのだ。

「だが、店に貼り付けられたチラシの大食い大会を見て思った…あれぐらいの金があれば妹を救える！
そして次々と大会を制覇して大食いチャンピオンにまで上りつめ、金を溜める事で手術費はたまっていくようになった…。」

「ハガネさん…。」

「けどそれも終わりだ…もう妹を助ける事はできねえ…！！」

頭を抱える相手に悟飯は手に持っていた優勝商品の一つである金一封を目の前にまで出す。

「…ハガネさん。これ差し上げます…妹さんの手術費に使ってください。」

「なんだと…いいのか!？」

「はい…ボクが欲しかったのは賞金ではないので。これで足りるか

はわかりませんが……。」

「——悟飯！こんな所にいたのね……って、なにしてるのよ？」

フェイトと一緒にアリサ達はようやくハガネの言葉を遮って登場する、突然悟飯が姿を消したという事で店内でちょっとした騒ぎが起きていたのだ。

状況のわからない二人に対して悟飯はハガネから聞いた話を再び聞かせるとアリサは「はあ……。」と本日二回目の呆れたため息と一言を漏らした。

「相変わらずのお人好しねえ……それであんたはどうするの？」

改めてハガネに問い直す、フェイトもまた彼に対して視線を送る。

「わからねえ……俺にもどうしたらいいのか、手術にはもうあまり時間かねえ……。」「

「……また大会に参加しないの？」

「俺には無理だ！今回の戦いで上には上がいるってことがわかった……このまま戦っても負けるのがオチだ！」

ハガネ自身、優勝し続けたせいで敗北の味を知らない彼にとって子供に負けた敗北の味は苦々しく完璧に自信喪失させるほどの打撃な

のだ。

只でさえ大人の真剣勝負で子供に負けるといふ事実は大人であれば誰でも心に突き刺さる自体だろう。敗北を知らない彼にとってはそれが何倍もの苦痛となっていた。

「はあ？バツカじゃないの。一回負けたからって諦めるんじゃないわよ！チャンピオンじゃなくてもいいじゃない、あんたは妹を助きたいんでしょ！？」

「助けたい！助けてえけど…それでも俺には無理だ…！」

「———だったらアタシが手術費を出してあげる…！」

三人の気の抜けた声が重なり合う。確かにアリサほどの財力があれば手術費を出すぐらいは簡単な事であり何も問題はない。

「ほ、本当か！？」

「ええ。その代わりあんたはアタシの家で働いてもらっわ！」

「ア、アリサちゃん…？」

ハガネにとってここまで良い話もないだろう。手術費を払えるだけではなく職に就けるとなればその後の生活にある程度の安定が保障されるのだから。

「働かざる者食うべからずよ！それでいいわね？」

「ああ…だがなんでそこまでしてくれるんだ…？」

「これじゃまるで悟飯が悪者みたいじゃない、それが気に入らないだけなんだから勘違いしないでっ。」

ハガネの言葉に少しばかり気分を悪くしたアリサは腕を組みながらハガネの視線を逸らしてしまう、その様子に思わずフェイトは僅かに微笑を浮かべていた。

「よかったですね、ハガネさん。」

「そうだな…恩に切るぜ、嬢ちゃん。それとさっきは悪かったな、小僧…さっきのことは気にするな。俺が弱かったただけだ…。」

「わかつたらさっさと病院に行きなさい、あとで鮫島に連絡しておいてあげるわ。」

「サンキュー…この恩は一生忘れねえぜ！うおおおおおおお！！！」

異常に曇っていた表情に光が灯され、出会った頃のハガネに戻った彼はそのまま病院に向かって全速疾走を図ってしまう。

やれやれとばかりにアリサは安心した表情を浮かべながらふと腕に巻かれた時計に目を配る——直後、アリサは慌てて大声で本音を漏

らす。

「ちよつ、もうこんな時間じゃないの！これじゃせつかくのデートが…！」

「…デート？」

「っ！！？ え、あつ、ええーと……。」

アリサが計画していたのは悟飯と二人っきりのデート…の筈がどこを間違えたのか思いつきり空振りしてしまっている事に気がつく。だがそれに気がついた頃にはもう遅かった。

「あら、こんなところにいたのね…急にいなくなっちゃったからびつくりしたわ。」

「な、なのはのお母さん…！？」

「……何時の間に……。」

温厚な微笑を浮かべながら歩み寄る桃子。アリサは更にパニックを引き起こしたように顔を真っ赤にさせて見上げる、小さく呟いたフェイトの言葉に耳を貸す余裕もないようだ。

「ご心配おかけしてすみません……。」

「いいのよ、気にしないで。三人とも何事もなかったみたいだし…
それじゃ私は仕事に戻るわ、また来てね？」

「ありがとうございます…。」

フェイトはお礼の言葉を述べる、その態度に桃子は笑みを浮かべながら通り過ぎようとした刹那——アリサの耳元に声を通った。

「今日のこと…なのはには黙っておくからデート頑張ってね。」

「……！？」

体がフリーズして身動きが取れないほどガチガチに固まってしまふ。うっかり口にした本音が聞かれたと思い知ると羞恥心で口が動かない。

「私は母さんにお土産買わなきゃいけないから…。」

「あ、それなんだけど……これじゃダメかな？」

悟飯は手に持っていた白い箱に包まれたケーキセットをフェイトに渡す、元々悟飯はフェイトの母親へのプレゼントの為に大会に参加したので食べようなどとは微塵も考えていない。

「いいけど…もしかしてプレゼントの為に大会に参加したの？」

「うん。ケーキセットならお土産になるし、フェイトちゃんのお母さんも喜んでくれると思ってね。」

「そうだね…これだけあれば、母さんも喜んでくれると思う…ありがとう。」

重みのある箱を小さな両手で抱えながら、浮かべたのは嬉しさ故の笑顔だった。悟飯もその笑顔を見ると嬉しそうな微笑を浮かべるが、一人だけ不機嫌なアリサはむっとした表情を露にしていた。

「報告日は明後日の朝だから…準備があるならその日までにしておいてほしい。」

「明後日の朝だね。わかつ——。」

「ほ、ほら急ぐわよ悟飯！まだ全然買い物してないんだから！」

「ま、またねフェイトちゃん…！」

デートの続きとしてアリサは悟飯を引っ張っていく、かなり計画から逸れた上にフェイトと何やら良い雰囲気となってしまう台無しも良い所である。

こうしてアリサと悟飯はデートの続きを行おうとするが…邪魔をするようにトラブルが待ち構えていそうで少し不安なアリサであった

⋮
○

第15話 悟飯のハチャメチャ初デート（前編）（後書き）

アリサ「……………」。

なのは「ど、どうしたのアリサちゃん？」

すずか「今回はデートの話なのに全然デートっぽくないんだって。」

悟飯「えっ？ 一緒に買い物をする話じゃないの？」

アルフ「やっぱり悟飯はわかってないみたいだねえ…。」

フェイト「……………」。

アリサ「うがー！ 後編では絶対に誰にも邪魔させないんだからね！
！」

第16話 悟飯のハチャメチャ初デート（後編）

「ふああ〜……。」

眠気が未だに残ったままアリサについていくように後ろから歩く悟飯——というのも先程まで映画を鑑賞していたのだ。だが鑑賞している間、彼は眠気に襲われて目を覚ました頃にはもう映画が済んで何故かアリサの機嫌が悪くなっていた。

「…まったく！あんなに良い映画なのになんで寝てるのよ…。」

「ごめん…でも、買い物しにきたのになんで映画を見たの？」

「えっ…う、うるさいうるさい！！アタシが見たかっただけ！とにかく次いくわよ…！」

「う、うん……。」

アリサは単純に捻くれた好意を積極的にぶつけているだけに過ぎない、彼を買い物や映画に付き合わせたりするのは好意の感情があつての行動である。

もう少し悟飯が恋愛面に察しが良ければ少しは気づけたかもしれない事態なのだが生憎悟飯はこの面はかなり疎かったのだ。

（次こそは絶対に成功させる…！）

頬を薄く赤くさせながら淡々と進んでいく、デートのつもりがそれをまったく気づいていない悟飯に呆れたような感情も抱きつつデートへ向かっていくのであった。

（なんで女の人ってたくさん買い物するんだろう…。）

「これとこれ、あとこれも…それからあれも！」

洋服やアクセサリーなどを次から次へと買い物カゴに入れていく、悟飯にとってはデートという自覚はまったくないせいで彼女の様子に首を傾げていた。

普段の彼女を想像していると今の彼女には違和感を覚えるがそれでもデートという発想には辿り着いていない。

「そろそろ次いくわよ！」

「わかったよ。ん、なにか聞こえる…。」

「——悪は絶対許さない！ジャスティマン参上！」

高らかに聞こえた声に惹かれて悟飯はその方角へと目を向ける、そ

ここには奇妙な格好をした男が舞台の上でポーズを取っていたのだ。周りには子供が舞台を囲むように大勢集まっており、ジャスティマンと名乗った男は悪役であろう人物と戦っているような風景だった。

「海鳴市の平和はこのジャスティマンが守る！いくぞ、とおっ！」

「ジャスティマン…。」

子供を守るようにジャスティマンは悪役と思われる人物と戦いを始める、子供から熱い声援が送られ盛り上がっている様子だ。

「ヒーローショーねえ、なんか子供っぽいわね…って悟飯？」

「わあ〜カッコイイなあ。」

「……………」

悟飯もまた声援を送る子供と同じ目をしながらジャスティマンに視線を向けていた、華麗に悪を倒すジャスティマンに見惚れているせいで隣のアリサの言葉が頭に入っていない。

「あーもう悟飯！アンタの服も買っただからはいくわよっ。」

「えっ？ あ、アリサちゃん…。」

またもや強引に連れて行かれ複雑な感情が残りながらアリサについていく。暫く歩き続けた結果、到着したのは男子用の洋服コーナーであり早速アリサは迷いなく悟飯に似合いそうな服を探し出す。

「うーん…男の服は今一わからないわね。悟飯、アンタはどんな服がいい？」

「ボクはなんでもいいよ。」

「なんでもってねえ……。」

願望を口にしてくれれば少しは選びやすいのにと感じながらアリサは綺麗に並べられた洋服に視線を動かしていく。たまたま目に止まった洋服に手をかけて取り出せばその服と悟飯を見比べた後――。

「これとか似合いそうじゃない？」

「そう？ とりあえず着てくるね。」

暫く着替え室を目で探したあとに悟飯は呟く。アリサから似合うと言われた洋服を受け取ればそのまま着替え室へ向かっていくのであった。

着替え室は少々遠い場所にあるので悟飯一人で行ってしまふ。本来

なら近くの着替え室を使う予定だったがその前に他の客が使っているらしい。

「どけどけー！どかねえとぶっ殺すぞ…っ！！」

「きゃあああああ！！」

突然、絶叫と物騒な言葉が乱立して状況を頭で飲み込むのに時間がかかってしまう、理解した直前にはアリサは「はあ…。」と重たいめ息を吐く。

アリサは非常事態であるにも関わらず冷静さを保っていた。命の危険を感じながらも騒ぎ立てる店員や客と比べて落ち着きが残っている。

「またあ！？もうなんなのよ……。」

——デートは邪魔されるものなのか、と思考を巡らせしなう。よく目を凝らして観察してみればバッグを片手に走行する泥棒の姿。刃物を手に脅迫めいた言葉を投げながら何かから逃げているようにも感じた。

「まて…！！」

「…って恭也さん！」

更にその泥棒を追いかけるように走行する恭也。泥棒は彼から必死に逃げようとするが彼の身体能力は常人と比べ並外れているせいで泥棒との距離を縮めていつている。

「ちいつ、まだ追ってくるか！ …来いガキ！」

「きゃ…むぐっ！？」

「アリサちゃん…！！！」

このままでは逃げる事ができないと踏んだ泥棒はすかさずアリサを引き寄せて片手で口を塞いでしまう。悲鳴を上げようとした彼女だがそれさえも叶わない。

片手の刃物をアリサに向けると恭也は足を止めてしまう、明らかにこの構図はアリサを人質に取っているのだ。

「ひっひっひ…人質を傷つけなければ道を開ける！」

「くっ、卑怯な…。」

「むー、むー！」

必死に声を出そうと試みるアリサだが口を塞ぐ手が邪魔で声にならない、恭也も他の店員や客も動くことはできずにデパートの出口までの道を開けてしまう。

「いいか、少しでも動けばこのガキをぶっ刺すぞ。」

「むー…！」

（くそっ！どうすれば……。）

アリサを人質に取った状態で歩き続けた結果、誰もアリサを助けることもできなければ動くことができずに泥棒をそのまま逃がしてしまっているのであった。

「ふう〜思ったより着るのに時間がかかったな。」

その頃、買い物カゴを持ったまま着替え室から出てきたのは悟飯。アリサがいなくなったデパート内を歩きながら彼女を探すがどこにも見当たらない。

それどころか店員や客の様子を見ると不穏な空気が漂っているようにも感じられるのだ。

「あ、恭也さん！」

「悟飯くん…。そうか、だからアリサちゃんがいたのか。」

白い服を身に纏い、青いズボンを着たいつもと雰囲気の違い悟飯を見てアリサの一件をようやく理解する。

「恭也！警察に連絡してきたわ。」

聞き覚えのある声が降りかかって悟飯は彼女の顔を見て思い出す、恭也の恋人である忍の姿に悟飯は唖然としてしまう。

「警察…？あの、なにかあったのですか？」

詳しい事情を二人に説明してもらう。どうやらデパート内で忍のバッグを盗んだ泥棒がいたのだとか。

「…そして逃亡を図ろうとアリサちゃんを人質に連れ去ったんだ。」

「えっ！？アリサちゃんを…。」

「ああ…だが、すぐに警察がきて出入り口が封鎖されるだろうから心配ない。念の為、俺は非常口に向かう。忍、後は頼むぞ。」

「わかったわ！悟飯くんは私と…あら？」

先程まで話していた筈の悟飯が姿を消していることに驚く忍、辺り

を見回しても悟飯らしき姿が見当たらず途方にくれたままその場を佇んでしまう。

一方、少し目を離れた隙にいらなくなってしまったことに恭也は目を疑った。明らかに普通の子供とは何かおかしいな物を彼なりに感じた瞬間でもある。

「……どうやらもう追ってこねえようだな。」

ナイフを片手にアリサへ突きつけながら小さな声で口にする、相変わらず口を手で塞がれて叫び声が出せず抵抗もできず張り詰めた緊張感だけがアリサの頭に残る。

「しかし、ひったくるだけのつもりだったのに、人質を取ることになっちまうとは…全部あの男の所為だ…。」

非常口の階段に佇みながら独り言を呟き続ける男、どうやら盗みを働くだけで人質という考えはなかったらしい。逃げる為に咄嗟に思いついた考えだったのだろう。

「んー、んー！」

「さて、お嬢ちゃんには悪いが俺が無事に逃げ切るまでもう少し人質になってもらうぜ。」

強引に引つ張られながら再び歩き出す、このままではどこに連れて行かれるかわからない恐怖に胸が締め付けられながら仕方なくアリスも歩き出してしまふ。

(……悟飯……)

彼の姿を脳裏に思い浮かべながら男と共に暫く歩き続けていれば非常口の出口でまるで悟飯のような姿を持つ少年が道を塞ぐように立っていた、男とアリスは立ち止まってしまふ。

少年を見た途端、男は声を震わせながらも彼に問いかける。

「な、なんだ……お前は……」

「アリスちゃんを解放してください。」

「……むー、むー！」

服装が普段と違うせいで雰囲気の違いに戸惑いながらもアリスは声を出そうと暴れてみるが男は悟飯に刃物の先端を向けてまるで恐怖を与えるかのような脅迫的行動を取り続ける。

「なるほど、此处に先回りして待ち構えていたわけか。となると、扉の向こうには警察が待機してるわけだな。」

「いえ、ボク一人だけです。」

臆することもない眼差しを男に向けながら言い放つ、悟飯の気を探る能力を使えば確かに警察より遥かに早く見つけ出すことぐらい朝飯前だ。

「なに！？　くく…そうか一人か。それを聞いて安心したぜ…。」

声を堪えたような笑いを零す男、だがアリサはもう殆ど不安や緊張感はなくなっていた。悟飯が自分を見つけ出した直前でもう助かることは前提である。

「おい、小僧！彼女の命が欲しかったら警察に逃走用の車を用意するよう伝えろ！」

「…これ以上罪を重ねないでください。」

悟飯は音も立てずに歩み寄る、刃物を突きつけて脅迫してみるが通用しない。だが無理もないだろう、悟飯にとって男の持つ刃物は凶器としての役割を果たさないからだ。

「なんだと…お、おい近づくな！こいつの命がどうなってもいいのか！！」

「警察に自首してください…。」

「くるなああああつ!!」

絶叫と共に手に持つ刃物は震えていた、相手を切りつけようと振り下ろすが悟飯は二本の指で刃物を受け止めてしまう。

「なっ!？」

話をした時から何か奇妙な違和感を男は持っていたがその正体が男の目の前で発生する——それは彼の予想を上回る結果だ。
小さな子供の指に少し力を入れただけで刃物は呆気なく折られてしまふ、ありえないとばかりに恐る恐る悟飯の瞳に目を向ける。

「う…うわああああつ!!」

絶叫と共にアリサを手放した男はそのまま階段を上つてまるで怪物から逃げるように逃走しようとするが途中で足を滑らせ階段から転がり落ちて地面に倒れこんでしまう。

「ちょ、ちよつと…まさか死んだりしてないわよね?」

「大丈夫、気絶してるだけみたいだ。」

動く気配がまったくないせいで悪寒が背筋に走るが気絶と言われアリサは一安心する間、非常口の入り口方面から足音が耳に届いてくる。

「なんだ今の音は…！」

「恭也さん…！」

階段にはアリサ、そして非常口の出口に佇んでいるのは悟飯。そしてその近くでカバンと共に倒れている強盗の姿を見て恭也は何が起きたのかまったく理解ができなかった。

「悟飯くん…何故君が此処に…それにこの状況は…。」

「あ、それは…。」

「えっと、泥棒が足を滑らせて階段から転がり落ちちゃったんです！それに悟飯はたまたま出口にいただけで…。」

「ちょっと音が聞こえたので気になって…。」

咄嗟に思いついた理由をアリサはすぐに口に出す、といっても前者は嘘を吐いている訳ではないのだが。

ここで彼にバレてしまえば事態が更に混乱を呼んでデートどころの

話ではなくなってしまう、というより説明が長くて話す側も一苦労である。

「そうか…。」

恭也は独り言のように言葉を口にすれば静かに男に寄っていくと近くには折れたナイフの刃身を見つける、転がり落ちる途中で折れたのかと暫く思考してみた結果――。

（ナイフが折れている…だが、こんな根元まで折れるものか…。）

根元までごっそりと抜き取られたかのように折れていたのだ。階段から転がり落ちただけでは根元まで折れるとは考えづらい。

途中の刃身で折れてしまう方がまだ現実感が漂う。更によく見ているとまるで抜き取られたかのように綺麗に折れている、不可解な点が残るが一旦彼は泥棒の件から思考を切り離す。

「…後は警察に任せて俺達は戻ろう。忍達が待っている。」

――数時間後、悟飯とアリサ、恭也は無事にデパート内の忍と合流することができた。実は忍以外にデパートにはなのはとすずかも一緒に来ていたらしく一緒に買い物に来ていたという。

全員、デパートで買い物を買ませた頃にはもう夕方ぐらいの時間帯となっていたのでどこかのレストランで夕食を取ることにするのだった。大きなテーブルに沢山の椅子が並べられ全員がその席に腰を下ろしていく。

「はあ…なんでこうなったの……。」

「アリサちゃん、元気がないみたいだけど…何かあったの？」

「もし悩み事があるなら相談にのるよ…？」

「べ、別に大丈夫よ！なのはとすずかが気にすることじゃないんだから。」

勿論、アリサ自身はそのレストランと一緒に夕食を取るという行動にはあまり良くは思っていないものの反対する理由が見つからなかったので結局こうなってしまうていた。

「……………」

女性陣は主に口を動かしながらの食事だが男性陣はまったく言葉を交わさずに食事を取っていたのだ。彼等の性格上、お喋りという資質を持っていない故の結果である。
なのはとすずかが忍との会話で夢中になっている隙にアリサは照れくさそうに悟飯へと目を向けて様子を窺う。自分とのデートに彼は自分の好意に気づいたのだろうか、例え気づいていないとしても何

を感じたのかなど思考が走り続けてしまう。

（アリサちゃん、今日は朝から様子がおかしかったけど…どうしたんだろう？）

「……！」

だが見られているという気配に気づけないほど悟飯も鈍感ではない、恋愛面に疎くても様子がおかしいことぐらいは気づけるのだ。その理由を理解することはできなくても。

自分と目が合うとアリサはすぐに慌しさを露にしながら視線を逸らしてしまう。仕方なく放っておけばまたもや見られている気配を感じ視線を向ければ——今はそれを何度も繰り返し返している。

「…アリサちゃん、今日はちょっと様子が変ね。」

「はい…だから心配で……。」

忍はアリサと悟飯のやり取りを見ていたのか小声で語りかけてくる、悟飯もまた不安そうな表情で思ったことを口にし始める。

「…そうね、プレゼントでもしてあげたらなんとかなるかもしれないわ。」

「プレゼント…ですか？」

「アリサちゃんの喜びそうな物とかね。」

彼女の喜びそうな物、必死に頭を使って思考を試みるが中々思いつかない。忍はふとアリサの方へ視線を向けてみればどこか不安そうな表情を浮かべながらこちらに目を向けていた。

忍と目が合った途端に視線を逸らしてしまう。だがアリサの不安な表情の理由は忍にとって考えるまでもなく簡単に思いついてしまう。

レストランで食事を終えた後、全員がそれぞれの家に帰っていきアリサと悟飯だけとなっていた。陽が完璧に沈みきる前に景色は紺色で包まれている。

「…ま、まったく！なんで今日に限ってこんなに災難に巻き込まれるのよ…。」

「あはは…でも楽しかったよ。」

思い返せばハガネの件や泥棒の件、一日だけでここまで災難に合うというのも珍しく感じてしまう。不意に投げられた言葉にアリサは耳を疑いながら悟飯の方へ振り返る。

「そ、そう…ならいいけど。」

「あ、アリサちゃん。渡したいものがあるんだけど…。」

大量の買い物袋を一旦地面に置いてしまつとその中の一つからペンダントを取り出す悟飯、小さく銀色に煌いた丸い宝石が吊り下げられていた。

「さつき帰る前に買ったんだ。ほら、アリサちゃん犬がスキみたいだから。」

「え……。」

ペンダントを受け取つてみると宝石の中央には犬の形が彫られていたのだ。悟飯にしては珍しく気の利いた物を渡してくれたことにアリサは少し戸惑っていた。

「…あ、ありがとう。」

「どういたしまして。」

顔を真つ赤にさせながら視線を逸らすようにアリサはさつと悟飯の目線を逸らす、歩行を再開すると同時にペンダントを自分の首にかけておく。

地面に置かれた買い物袋を両手に持てば悟飯もまた彼女を追いかけるように歩く。——こうしてデートは終了して悟飯の短い休日

幕を閉じたのだった。

第16話 悟飯のハチャメチャ初デート（後編）（後書き）

悟飯「これでひとまず日常編が終わりましたね。」

なのは「次からは???編に入るんだよね。わたしも頑張らないと...。」

アリサ「はあ...折角いい所までいったのにまた出番が減っちゃうなんて...。」

すずか「あはは...アリサちゃんならすぐに出番が回ってくるよ...多分。」

アルフ「フェイト、あたし達も頑張ろう!」

フェイト「う、うん...。」

第17話 仕組まれた罠（前編）

——デートの件から更に数日の時間が経った平日の朝。悟飯はその数日間に自分のデバイスである『ブレイブソウル』をユーノから返してもらっていた。

敵陣の拠点に向かうということは何が起きるかわからない。万が一のことを考えた上での判断として悟飯はデバイスを入手した状態で進入することにした。

前の温泉事件のハイヤードラゴンのことを悟飯は考慮してハガネに面倒を見てもらう事にし、更にアリサは平日ということで学校に登校、悟飯のことで不振に思われないためにフォローしてくれるらしい。

「お土産はこれでよし、と…悟飯も準備はいい？」

「ボクはいつでもいいよ。」

悟飯が手に入れた箱に包まれたケーキセットをフェイトは両手で持つと同時に僅かに薄く微笑んでいた。初めて出会った時の冷たい印象と比較すればフェイトは感情をよく表に出すようになったと感じられる。

それは身近にいたアルフがより強く感じていたことであり喜ばしい出来事だ、フェイトが笑うようになればアルフもまた笑うようになっていた。だが今回のアルフはなぜか表情が強張っていたのだ。

「甘いお菓子か…本当にあの人は喜んでくれるのかねえ……。」「

「わからないけど、こういうのは気持ちだから。」「

悟飯達が今いる場所は超高層マンションの屋上であり、近くの建物や同じマンションを見渡せるほどの建物の屋上にいた。故に人の目に彼等を捉えることができない。

アルフはケーキセットを手にとって彼女を見守るがどこか表情は曇っている。フェイトと比べてその様子は違和感を覚えさせるものであり悟飯はアルフの表情がなぜか頭に焼きついてしまうのだった。

「ま、まあこんなにフェイトが危険を冒してまで頑張つて、お土産も用意したんだから変なことはされないさ。」「

「うん…母さん、喜んでくれるかな。」「

母親が微笑を称えている姿を想像したフェイトは嬉しそうに笑っていた、子供特有の感情や思いを見せる彼女はアルフの気遣いに気づいている様子はない。

そしてフェイトは次元転移魔法出現させて呪文を口にしながら唱えていき彼女特有の金色の魔方陣が地面に浮かんで効力を発揮させる。

「開け、誘いの扉…『時の庭園』。———テスタロッサの主の元へ！」

彼等を包み込む金色の光が煌く、数分後にはまったく別の空間に彼等は転移していたのだ。柱が何本も建てられアリサがいた町とは雰囲気異なる建物内だった。

だがその建物の雰囲気は決して良いと判断できる物ではないと悟飯は感じていたのだ、禍々しく不気味な雰囲気に包まれた『時の庭園』と呼ばれし建物は自然と警戒心を呼び起こさせる。

目の前には巨大な扉がありその向こうの部屋で母親が待っているのだと思えば緊張感も覚えてしまう。

（此処が時の庭園か…明らかにこれまで見てきた場所と雰囲気が違う……。）

「悟飯とアルフは此処でまって、私が先に母さんに挨拶するから…。」

「わかった。」

「へいへい。」

だが悟飯は更にこの建物の不穏な空気を読み取っていたのだ、この建物全体から禍々しく邪悪な気を悟飯は感じ取っていた。

胸騒ぎにも近い悪い予感だけが胸を埋め尽くす中でフェイトは微笑を浮かべながらその扉を開いて部屋の向こうへと行ってしまふ、閉じた扉は音共に完全に塞がれてしまふ。

「ドラゴンボールは合計で4つか…まあ、あれだけ集めておけば酷い事はされないと思うけど。」

「…酷い事ってなんですか？」

「まあ色々あるのさ…。」

思い出したくもないといった風にアルフは言葉を閉ざして何も喋ることはなかった、これ以上悟飯も質問することができずに静寂が流れ込んでいく。

「——きゃあああっ!!！」

「今の声は…!」

「フエイト…!!！」

扉越しから見慣れた声の主の悲鳴と体に衝撃を与えたような衝撃音が一気に耳元へと届き、それは一度で終わるのではなく二度も三度にも渡って繰り返される。

アルフは自身の耳元を扉に密着させて内部の声を聞き取ろうと試みるがそれでも上手くいかない。僅かに話し声が聞こえるが何を言っているのかまったく聞き取れなかった。

「フェイト…あの母親、一体何を……！」

「アルフさん、下がっててください。」

「え…あ、ああ……。」

怪訝な表情を浮かべるがアルフはすぐに扉から距離を置く。――直後、悟飯は力強く拳を握り締めると分厚く頑丈に作り上げられた巨大な扉へと衝突させたのだ。凄まじい破壊音が一気に空間内を制圧すると同時に扉は粉々に碎け散ってしまう。二人の視界に入り込んできたのは巨大な部屋と魔力の紐で縛られた傷だらけのフェイトが其処にいたのだ。

「フェイト…ッ!？」

「これは…酷すぎる……。」

「アルフ、悟飯…？」

身に纏っていた漆黒の衣装は引き裂かれ傷だらけの状態で吊るされていた、アルフも悟飯も予想外の事態に戸惑う中でフェイトの先に見えた女性に鋭い眼光を向けたのだ。

黒衣の服を身に纏うなぜか狂気という言葉を連想させる女性がフェイトの目の前で悟飯とアルフを見下ろしていた、アルフと悟飯の警戒心は一気に彼女を見た直前に高まりつつ。

「話には聞いてるわ、あなたは異世界からやってきたサイヤ人の子ね……。」

（えっ！？　なんでボクがこの世界の住人じゃないってわかったんだ…。それにサイヤ人のことも…。）

アメジストの瞳が悟飯とアルフを映し出す、そしてこの母親が口にする言葉は様々な疑念を悟飯とアルフは思い浮かんでいく。

自身の正体を見破った不気味とも呼べるフェイトの母親はどうやって見破ったのかと思考が走る。フェイトが自分を紹介したのかと考えが浮かぶ。

「母さん、知ってたの…！？」

すぐにあっさりとその考えを切り捨てるような言葉を走るフェイトの瞳は困惑に満ちていた。恐らくフェイトでさえも母親の事はわからない部分が多いように悟飯は見えたのだ。

「まあいいわ…今はフェイトと話しているの、邪魔をしないでちょうだい。」

「邪魔しないで…だって…？？」

拳を握り締めたまま怒りで全身を震えさせるアルフの声は敵意に満ち溢れ今にも掴みかかろうとするような猥褻みた青い瞳を母親に向

けていた。

だがそんな瞳を見ても母親は何も感じることはないのか冷酷とも呼ぶべき態度を崩すことはなく、冷たい視線を浴びせるだけである。

「躑がなっていない使い魔だわ……。」

「……！ アルフ、さっきの部屋に戻って！」

「けどフェイト！いくらなんでも今回は……うわあああつ……！」

直後、怪しく煌いた紫色の魔力弾が彼女の片手に構成されていたのだ。それが目に入ってきたフェイトは必死に戻るように指示したがもうその時点では遅かった。

魔力弾はアルフに正面から激突して爆発を引き起こしてしまう、耳障りな爆発音と共に場を包み込む煙が舞い上がりアルフは後方へと大きく吹き飛ばされていた。

「アルフさん……！」

煙が晴れた頃には傷だらけのアルフが地面に倒れているが暫くすると彼女は剣幕的な表情を浮かべて立ち上がる。全身の傷が痛むのか腕を抑えながら苦痛に耐える彼女の姿は痛々しい。

それはフェイトにも言えることであり、故に悟飯は一方的な暴力を押し付ける母親に対して怒りを押し殺していた。仲間とは呼べない彼女達でも理不尽な暴力を与えられる光景には不快感を示すように顔を顰めていた。

「あなたも知っているでしょう？ 私にはジュエルシード……いや、ドラゴンボールが必要だってことを……なのにまだ4個、これじゃ全然足りないわ。」

今すぐにでもアルフに駆け寄りたい一心のフェイトだが母親の話を無視するわけにもいかない、アルフのことを後回しにしてフェイトは恐怖を殺してでも母親を赤い瞳に写し出して向き合う。

「ドラゴンボールは七個必要……そうでしょう？」

近くにいる悟飯に振り向いては彼女は穏やかな声で確認するように問いかける、どうやら狙いはドラゴンボールらしく何か願いがあることはすぐに悟飯は読み取れていた。

「あなたはドラゴンボールに何を願うつもりなんですか……。」

「それを聞いてどうするつもり？」

「もし、悪いことに使うつもりならボクが止めます……！」

純粹なまでの揺るぎない決意の瞳が女性を貫く。だがそれでも臆することもなく女性は悟飯を眺めているだけであり、張り詰めた沈黙が二人を包み込む。

「そう…威勢のいい子ね。——いいわ、私が用意した相手に勝てたら質問に答えてあげる…。」

何でも願いを叶える、その能力を悪用しようとする者は数多く悟飯はそれらの人物に出会ったからこそ事態を深刻に受け止めてもいた。フェイトの母親は一体何を願おうとしているのか、悟飯にとってはまったく見当もつかないほど女性は何を考えているのか想像することができずにいる。

「その代わり、負けたら私に協力しなさい。」

「…わかりました。それともう一つ、フェイトちゃんにこんな酷い仕打ちは止めてください。」

傷だらけの体になるまで痛めつけられる光景は悟飯にとってはあまりにも不愉快極まりない、それはアルフにも同様に言えることであるからこそ悟飯は母親に訴えたのだ。

「……そこまでしてどうしてフェイトを庇うの？」

不意に疑問を投げかけられる、それはまるでフェイトを軽薄しているかのように感じられ一瞬だけそんな思考が頭の中で走る。だがそんな母親の疑問に答えられるほどの回答はもう悟飯に持ち合

わせているのだ、アルフほどではなくても今まで彼女に接してきた
経歴からわかる事がある。

「フェイトちゃんは母親であるあなたを喜ばせる為に危険を冒して
までドラゴンボールを手に入れたんです。なのに…こんなボロボロ
になるまで仕打ちを与えるなんてあんまりじゃないですか!!」

「私を喜ばせるため? …… それに関しても、あなたが勝てたら
約束するわ……。」

アルフにとってはもつとも一番に主張したかった言葉を悟飯は代弁
するように訴えた結果、勝負に勝つことが全てにおいて前提条件と
なってしまう。

ただ呆然と話を聞き続けるフェイトは驚きを隠しきれずその会話を
黙って聞くことしかできなかった。フェイトを縛る拘束魔法を母親
は解除するのだった。

場所を変えた方が良いという事になり母親に指示されるままに時の
庭園、地下に辿りつく。不気味に漂う邪悪な気がより一層、倍増さ
れたように感じる悟飯はただ黙ってその場に佇んでいた。

アルフとフェイト、彼女達は戦いに巻き込まれないようにというこ
とで別室でモニター画面で観戦することになった。フェイトは複雑
な心境を胸に抱き、アルフは悟飯が勝利することを祈るのみ。

「出てきなさい…。」

戦いに巻き込まれないためにも母親はまた別室のモニター画面から覗いていたのだ、やがて彼女の足元に光を発する魔方陣が出現する。彼女の用意した相手を出現させる為、転移魔法を唱えると何百体も見慣れた生物が悟飯のいる部屋全体に出現していく。それぞれ異なる色を持った生物は一斉に悟飯へと視線が集まっていた。

「——栽培マン！？　じゃあ、あの時に闘った栽培マンは……。」

「ってことは……まさか、あんた……！！」

「あれは事故よ…本当はフェイトの手伝いをさせるつもりだったの。」

「手伝いを……？」

問いを投げる前に答えを返されてアルフは言葉を失ってしまう、行き場のない怒りに拳を強く握り締めたまま母親を睨みつける。

フェイトに対して八つ当たりの行動に走らせたきっかけは恐らくこの母親のせいだろう。冷酷な仕打ちはフェイトだけではなく栽培マンに対しても行われていたのだ。

「キキーンッ！！」

「これだけの数……いくら悟飯でも難しいと思う。」

「あの鬼婆……一体何を考えてんだ……っ!!」

悪戯に腕力が込められた拳を壁に叩きつけそうになりながらアルフはモニター画面にいる悟飯を見守る。

明らかにフェイトの母親は悟飯を徹底的に叩き潰そうとしているのが目で見てわかるのだ、というのも栽培マンの数は100体ほどであり数がありにも圧倒しすぎていた。

「……ギギイイイ……ッ!!」「」「」

突発的に声が重なり合うと部屋全体に反響し合い、悟飯を取り囲むかのように全ての栽培マンが襲い掛かってくる。

これだけの数による連続攻撃は到底避けられる物ではなく振り返ちも望めるような状況でもない、それにも関わらず悟飯は――。

「はあああああ……!!」

「……グギイイイ……ッ!!?」「」「」

自分の気を一気に周辺へと開放させることで巨大な衝撃破を放つ、振り返ちを望めるような状況ではない中で悟飯は本来は不可能に近い筈の振り返ちを行ったのだ。

強風が巻き起こる中で砂煙が部屋全体に襲い掛かっていた。モニタ

「画面には吹き飛ばされる数え切れないほどの栽培マンと砂煙が一気に状況の見通しを悪くさせる。」

「すごい…あれだけ数がいたのに……。」

「なんて子供だよ……。」

もはやアルフは脱力していた、先程まで溜め込んでいた怒りもすべて悟飯が吹き飛ばしてくれたかのように力が抜けてもはや呆然とした表情で二人はモニター画面に目を向けていた。

砂煙がようやく晴れた頃には悟飯の服装は変貌しており紫色の道着に首には白いマントを羽織った悟飯の姿が映し出される。バリアジアケットを身に纏った彼はまさにフェイトとアルフからすれば無敵の存在なのだ。

「これでボクの勝ちですね。」

モニター画面には信じられない光景が映し出されていた、悟飯の周りに群がった戦闘不能の栽培マンがおよそ100体ほど転がり落ちており動こうともしない。

衝撃破によって全ての栽培マンは気絶させられていたのだ。力加減次第では全員殺すこともできただろうとフェイトの母親はすぐに察しがつく。

「ふう……意外とあっさり勝負がついたねえ。」

「でも、上から何か降ってきてる…？」

「上から？あたしには何も見えな……なんだい、あの魔力弾の雨は……！」

気絶してしまった栽培マンを見下ろしていた悟飯だが急に異常なほどの気を察知すると上空へと目を向けてその様子を観察することにしたのだ。

というのも上空から悍ましいほどの悪に満ち溢れた気で構成されたエネルギー弾が地面に向かって集中豪雨を仕掛けていた。

『——ネオ栽培マンをこうもあっさりと倒してしまうとは……さすがは孫悟空の息子だ。』

「だれだっ！……っ！！」

その撃った人物もまた上空にいるということで悟飯は咄嗟に気を調べてみるが——気を発している生命体を見つけ出すことができなかった。

モニター画面に一瞬だけ視界に入り込むと其処には赤いリボンのマークをつけた帽子を被る老人の姿をした白髪の男がいつの間にか画面一杯に塗り潰されている。

『くっくくく、だがその程度のレベルなら我々の敵ではない。』

「お、お前は……ドクター・ゲロ!!」

彼と目が合った瞬間は秒数もあつたかどうかさえも怪しいほど刹那の時だった、悟飯は降り注ぐエネルギー弾を圧倒的な速度を誇って紙一重の間合いで避けていく。

地面に着弾し爆発した金色のエネルギー弾は転がり落ちていた栽培マンを死に至らしめるのは容易であり次々と虐殺行為を繰り返しながら悟飯への猛攻撃を緩めない。

強烈な爆風が引き起こされる中、暫くするとエネルギー弾の雨は止んで視界を遮る煙も晴れていく、上空には無数の人造人間の集団が悟飯を見下ろしているのだった…。

第17話 仕組まれた罠（前編）（後書き）

フエイト「ドクター・ゲロって誰だろう…。」

アルフ「さあね、悟飯は知ってるみたいだけど…。」

なのは「大丈夫！あの怪物をまとめて倒しちゃうんだよ。人造人間
って人が相手でも負けないよね、すずかちゃん？」

すずか「えっ！？ わ、私に振られても…。」

アリサ「ごはーん！そんな奴等さっさとやっつけて帰ってきなさいよーっ！！」

第18話 仕組まれた罠（中編）

エネルギー弾によって破壊しつくされた地面は栽培マンの死骸で埋め尽くされており、およそ100体もの死体が無残にも木っ端微塵に破壊されている光景は残酷な印象を植え付け、アルフとフェイトは互いにその風景に対して眉を顰めていた。

「どうして…17号達に殺されたはずじゃ…。」

巨大なモニター画面にアップされる白髪の老人を目にして悟飯はうるたえる、死んだ筈の人間が目の前で立ちばかっているという事実は非常に受け入れづらく理解しづらいのだ。

だがアルフとフェイトも同様に見知らぬ人物が顔を見せたことに母親への不信任は更に積もっていく、フェイトはただ言葉に言い表せない不快感とよく似た複雑な心境を抱え、そしてアルフは負の感情がとても大きい。

（19号、17号、18号、16号まで…あとは知らない人造人間だ…。）

悟飯を見下ろす人造人間に険しい表情と共に目にしてい、見慣れた者もいれば知らない者も数多く全員が悟飯に向けて殺気を放っている事を肌身で感じ取れる。

『ほう…お前のいた時代のわたしは上手くこいつ等を制御できずに殺されたのか。バカなヤツめ。』

「お前のいた時代？なにを言ってるんだ…！」

ドクター・ゲロの言う事を上手く理解できない悟飯は混乱しているような反応を未だに見せながらモニター画面に向かって叫ぶように問いを投げた。

その様子の変化はフェイトとアルフが見ているモニター画面にも映し出されており彼女達是不安が胸に積もっていく、明らかに目で見て様子がおかしいとわかるほどなのだ。

「オレ達はお前のいた世界より遙か未来からきたのだ。」

「孫悟空を殺す為にな。」

「ソン・ゴクウ…コロス。」

「ついでに地球人も皆殺しにする予定よ。」

人造人間13号が最初に口に出した言葉でようやくドクター・ゲロの言った言葉が頭に上手く入ることができた。

恐らく悟飯の世界より遙か未来から来た彼等は未知の人物なのだ、顔だけは知っていても中身は知らない。悟飯の知っている彼等とはまた違うのだ。

（確かトランクスさんのいた未来ではドクター・ゲロは死んでいたはず、となると、目の前の人造人間達はそれとはまた別の未来から……。）

未来の世界から来たと言われているトランクスが瞬時に思い浮かぶがそれでもドクター・ゲロは死んでいた、中々話が釣り合わない。そもそも彼等がいる世界では悟飯の父親である悟空は一体何をやっているのだろうか、そもそもなぜ悟飯を過去の世界の悟飯とわかったのだろうかと謎が次々と迷路のように浮かぶのだ。

「お父さんを殺す為に……けど、なんで過去に……。」

「簡単なことだ。オレ達がいた世界では既に孫悟空は死んでいた。」

「その代わりに地球人を絶滅させてやったがな。もちろん孫悟空の仲間も含めてだ。」

「まあ、いい運動にはなったな。」

モニター画面から会話の内容が聞き取れる状態故に、アルフとフェイトはまったく話についていくことができなかった。未来や過去、現在扱われている魔法では実践不可能であるがために次元が違う話にも聞こえるのだ。

互いの顔を見合わせたアルフとフェイトはどう反応すればいいのかすらわからずにいる、だが話の内容は決して良い物ではなく寧ろ苛立ちを覚えさせられる内容である事ぐらいは理解できる。

「たったそれだけの理由で、関係のない地球のみんなを……。」

地球人を根絶やしにされたことに対する怒りと悲しみ、自分の仲間達の死に悟飯は強く拳を握り締めて震えだす。様々な感情が緋い交ぜになって形容しづらい思いが悟飯を震えさせていた。

『そうだ！ 孫悟空が我がレッドリボン軍を滅ぼした為に世界制圧の夢は消え去ってしまった。だから直接、我々の手でヤツを殺さなければならぬ！！そして愚かな地球人どもは天才科学者であるわたしを認めなかった！当然の報いだ。』

「それで、トランクスを殺した時に手に入れたタイムマシンで過去にむかったってわけ。」

白髪の老人は額にしわを寄せて感情的なままモニター画面から怒鳴り散らすように語る。

つまり彼等は悟飯のいた世界——誰も知らない未来の世界の住人であり、その世界では悟空は死去しておりドクター・ゲロは恨みを晴らせない事と自らの研究を地球人が認めないことを理由として人造人間を使い地球人を殺害し続けていたらしい。

その世界では悟空の仲間でもあり、悟飯にとっても掛け替えのない仲間達は彼等に殺されてしまっている。つまり彼等のいた未来の世界では地球を守る戦士がいないのだと悟飯は推測していた。

『だが、過去に向かう途中、謎の次元に吸い込まれて気が付けばこの世界にきていた。』

話は一転、白髪の老人は冷静さを取り戻した様子のまま再び話を始める。それは此処に来るまでの過程であり何かが大きく狂った刹那の話でもある。

『感謝するぞプレシア・テストロッサ。お前の協力のおかげで新たな研究を生み出すことができた…。』

『その代わり、約束は果たしてもらっわ……。』

『わかっておる…ドラゴンボールが7つ揃った時、お前の願いは叶う。』

「……………」

悟飯はモニター画面に映し出された隣にいるプレシアと呼ばれたフエイトの母親に啞然としてしまう、彼女は願いを叶える為なら手段は選ばないように見えたからだ。

それほど彼女の願いには強い思いがあるのだろう、実の娘であるフエイトを痛めつけてでも。だが結局何を望んでいるのかは悟飯は思い浮かんでこなかった、それはアルフとフエイトも同様に。

『しかし、この世界にドラゴンボールがあると知った時は驚いたぞ。しかもジュエルシードと同化しているとは…。』

（ドクター・ゲロも知らなかったのか…。）

彼等がドラゴンボールを集めて何をしたいのか、特にプレシアは一体何をするつもりなのかは未だにわからない。

だがドラゴンボールとジュエルシードが同化してしまった事についてはドクター・ゲロ自身も真実を掴んでいるようには見えなかった、なぜなら今の彼は研究者としての側面を出しているように見えるのだ。つまり彼は無関係なのだろう。

『長話をしすぎてしまったようだな…まあいい。孫悟飯、貴様の存在は邪魔だ…此処で消えてもらおう。その後、ドラゴンボールを全て集め、この世界の地球人を皆殺しにしてやるのだ。』

「そんなこと、ボクが絶対にさせない…!!」

『ふん。貴様のデータはネオ栽培マンを放った時に超小型のスパイロボットで図らせてもらった。未来で闘ったお前よりは実力があるようだが、それでも我々に勝つことはできん。』

ネオ栽培マンはフェイト達の手伝いを行うと同時に悟飯の戦闘力を図ることも狙いとして放っていたらしい、データを取られた今では悟飯の方が不利な状況なのだ。

「ドクター・ゲロさま。ここはわたしにやらせてください。」

「いや、オレにやらせてください。孫悟空と闘う前の準備運動になりますから。」

白い肌を持つ丸い形をした人造人間が先に名乗り出る、それは悟飯も知っている19号と呼ばれた機械人間だ。後に帽子を被った白髪の大男までもが名乗り出てきてしまう。

「19号と13号か…。なら、13号…お前が相手をしてやれ。」

「ありがとうございます。」

指名された13号は軽い笑みを浮かべたまま呟く、そして悟飯の前まで降下して下りていくと13号の瞳が悟飯を捉えていた。

（…ボクが負ければこの世界に住む人達は殺されてしまう。ここで食い止めないと…！）

ドクター・ゲロとプレシアが組んでいる今、彼等を此处で食い止めなければ何をするのかまったく検討がつかない。故に不安と緊張が同時に悟飯に襲い掛かる、だがその感情が悟飯を動かす原動力にもなっていた。

誰も知らないであろう未来の世界の人造人間の戦闘力は計り知れない。何せ人造人間は気を持たないのだ、気の強大さで悟飯は戦闘力

をある程度推測しているが彼等は気を持たないせいで強さがどれほどかわからないのだ。

「孫悟飯：貴様ではオレは倒せない。」

だがそれでも一つ推測できるのは目の前の人造人間達は強いという事だと悟飯は推測できる。先程のエネルギー波の破壊力や自分達の仲間を殺せるほどの実力は持っていることになる。

その推測を裏付けるかのように、音速とほぼ同じの速度を持って13号は一気に悟飯へと間合いを詰めていく。13号と悟飯との距離は決して近い物ではないにも関わらず、彼の速度は悟飯との距離を近い物へと変貌させていた。

「はや——。」

悟飯の目視でその速度を捉えきれないわけではない、視界に飛び込んでくる13号はきちんと目で処理できる範囲ではあるが体で処理できるレベルではない。

彼がそう感じた瞬間にはもう目の前にまで13号は迫ってきており即座に足蹴りを食らわされていたのだ。圧倒的な力と速度を前にして悟飯は勢いよく吹き飛ばされてしまう。

「はああっ!!」

後方へと吹き飛ばされる刹那に背中から激痛が全身へと走り出す、気がつけば13号は悟飯の背に回りこんで蹴り上げを行っていたのだ。

その行動全体に悟飯は気づくことはできなかった、いつもなら気の察知や気配で相手がどう動いているのか頭の中でクローズアップされるが人造人間は気も持たなければ気配も存在しない。

無残にも上空へと走り抜けるが更に先回りしたのは13号、先程の通り悟飯は気づくこともできなければ避けることも叶わずに腕の肘部分が腹へと力強く叩きつけられる。

「うわあああぁっ!!」

上空へと吹き飛ばされたかと思えば今度は地面へと急降下、空中を泳ぐという独特な浮遊感故に僅かに眩暈も感じられる中で13号もまた悟飯を追って急降下していく。

悟飯の視界に飛び込んでくる13号を目視できれば攻撃が来るという危険性を感じ、地面に両手をつけて一気に飛び退く形で距離を取ってみる。

（強い…今まで見てきた人造人間よりもケタ違いの強さだ。）

案の定、13号は地面に拳を向けようとしていた。だが悟飯が飛び退いて距離を取る形で避けられたせいで空振りで終わってしまう。悟飯は今までに感じたことのない人造人間の強さに危険性を強く感じながらも地面に着地して敵を睨みつける。

「ふっふっふ…どうした？貴様の力はこの程度か。」

しかも先程の行動は全て13号の本気ではないという事が彼の不適な笑みから見て取ることもできた、悟飯は焦りから冷や汗を額から流す。

（これはパワーを温存してるヒマはないな…。）

13号だけでこれほどの強さを持つということは他の人造人間は更に強い力を持っているのかもしれないという予想が頭に過ぎった瞬間、悟飯の余裕は殆ど潰されたも同然であった。

「はあああああ……！！！」

金色の粒子が煌いた瞬間、金色に輝くオーラが悟飯の全身を包み込んで姿を変えさせる。首に巻いていた白いマントを手で脱ぎ捨て輝かしき金髪碧眼の姿になれば13号は戸惑いの表情を浮かべる。

「なに！？まさかこれほどまでパワーが上がるとは…面白い戦いになりそうだ。」

人造人間には相手のパワーを測る装置が取り付けられており、その機械で測った結果——黄金の炎に身を包んだ瞬間、飛躍的に悟飯のパワーは向上したのだ。

それはある程度の知識がなければ機械が壊れたのではないかと疑うほどであり、そして13号の余裕もまた崩れたということに繋がっていた。

「予想したデータを上回っている。」

『ぐぬぬ…計算を履き違えたか…。』

圧倒的な威圧感に溢れる中で19号は無表情のまま口にする、ドクター・ゲロも彼のパワーが上がったことに焦りを覚え始めており、それはドクター・ゲロの計算をも上回った結果を悟飯は叩き出したのだ。

「すごい…どうやったらあそこまで強くなれるんだろう…?」

「あ、ああ…あたし達にはついていけない領域だ…。」

「……でも、私が悟飯みたいに強かったら…きっと母さんも喜んでくれたのに。」

モニター画面に映し出される悟飯の姿に驚きを隠せないアルフとフエイトはただ画面を見続けていた、人造人間の強さに絶望的な感情を抱いていた二人だが悟飯の姿を見て希望を胸に抱けたのだ。

風圧は衝撃破となりながら周辺に無差別に襲い掛かり栽培マンの死骸を壁へと叩きつけ障害物となる物はその場から消し去ろうとしていた。人造人間達は上空から戦闘風景に少し緊張や焦りを覚えながら見下ろしつつ。

「でりゃあああーっ!!」

「うおおおおーっ!!」

正面から激突した途端に黄色い帽子が落ちていき、攻防戦を13号と悟飯は繰り広げる、同時に衝突する効果音が激しく響かせ強烈な暴風が巻き起こり周辺を破壊していく勢いで撒き散らす。

周辺にいただけで木っ端微塵に破壊される環境を作り出した本人は怒涛の連撃を終わることなく繰り返し、決して両者は互いに引きをとらなかった。

「へえ、やるじゃないかこっちの孫悟飯は…。オレ達がいた世界のあいつとは大違いだ。」

「ねえ17号。あんたは今の孫悟飯と戦って勝てる自信はあるの？」

「どうだろうな…やってみないとわからないさ。」

未来の世界にいる悟飯と比べる二人、17号は決して慢心しているわけではないがそれでも表情に余裕が消えていないのだ。

18号もまた余裕は決して消えていない。少なくとも焦りは感じて

いても本気で追い込まれたわけでもない、故に13号と悟飯の戦いに手を出すこともなかった。

連続攻撃を互いに浴びせる二人にとって時間の流れはとてつもなく遅く感じている、一瞬の間でも彼等にとっては長く果てしない時間の中で互いに決着がつくまでやめない。

「りゃあっ!!」

重圧な力の入った拳が人造人間の腹へと激突、防御することもできずに13号は後方へと大きく吹き飛ばされてしまう。悟飯はすぐに13号よりも素早く相手の背に回ろうと接近する。

勢いよく吹き飛ばされまともな対処もできない中で13号は悟飯の次の攻撃を予想して片手から禍々しい赤いエネルギー弾を撃ち放つ――が、悟飯は瞬時に片手で弾いてしまう。

近距離となった瞬間に悟飯は両手に集う青白い粒子が輝かせて発射準備を行う、収束された光を前方へと撃ち放とうと13号へと向ける。

「魔閃こ――!?!」

発射直前の刹那、収束された淡い光は分解され消滅したのだ。粉々に消え去っていく光景に悟飯は啞然としながらその様子をただ見守るだけしかできずに。

「もらったあ！！」

13号の目の前で動きを止め混乱する悟飯は13号から見れば隙だらけの状態であり、故に悟飯の動作は遅れて13号の拳を腹部でまともに受けきってしまう。

凄まじい激痛が全身で感じ取る中で更に拳が食い込んで追い討ちをかけるような痛みが走る。あまりの痛みに悟飯は蹲ろうと駆使するがその前に13号によって両足を掴み取られてしまう。

予想しない攻撃により体制が崩れると同時に13号は全身を駆使して悟飯を勢いよく空中へと放り投げる。

「ぐうつ…。」

「うおりゃーっ！！」

体制を立て直そうと空中で動作を起こそうとする前に何度も更なる激痛が襲い掛かり浮遊状態から地面に向かって全身は急降下していく。

骨が碎かれる勢いで地面に背中を打ち付けると13号もまた悟飯の視界一杯に飛び込んできており、最後の一撃と言わんばかりの斜め方向からの強烈な蹴りを顔面に衝突させられる。

「ぐああああっ！！！！」

額から血液が流れ落ち、地面を全身で叩きつけられ煙が彼の姿を隠してしまう。静かに場を包み込んでいた煙が晴れると傷だらけの悟飯の姿がその場で佇んでいた。

（そんな…どうして途中で技が使えなくなったんだ……。）

バリアジャケットが所々引き裂かれており悟飯は先程の現象について一体何なのかと思考する、僅かな時間で原因を手探りに思考するがそれでも浮かんでくることはない。

だがその思考する時間は戦闘において貴重な時間であると物語るように13号は金色に輝く髪を持つ少年、悟飯へと急接近して眼前にまで迫りくる。

「——だだだだだだだだ……!!」

「っ…ぐおおおお!!」

金色に輝く姿となった悟飯のパワーは計り知れない、攻撃が来るという警告が直感となって脳に伝わった瞬間には悟飯の拳は13号の腹部へと叩きつけていた。

純正で満たされた破壊力を持つ拳が次から次へと連続攻撃として撃ち続けていき13号は後退していく。吹き飛ばされないように13号は堪えるがその体力さえも崩そうと問答無用の激しい攻撃が雨のように降らされる。

「だあああーっ！！！」

先程の連続攻撃より一層、強烈な腕力が込められた拳は13号の体制を一気に破壊して後方へと吹き飛ばして壁へと強引に叩きつけてしまう。

「悟飯が勝った……！」

「うん、そうだけど……様子がおかしい。」

モニター画面には13号を圧倒した悟飯の姿であり、それはとても喜ばしい風景なのは二人にとって間違いない。だが引かかる点も残されていたのだ。

悟飯の表情は異様に体力を消耗しているようにも見える。異常な疲労感を見せる悟飯にフェイトの不安は強くなっていきただモニター画面に映し出される状況を見守るだけである。

「はあっ、はあっ……ケホッ、ケホッ……ち、力が抜ける……。」

フェイトの気がかりは決して気のせいと呼べる物ではない、悟飯も異常な疲労感を体に覚え戸惑いの顔を浮かべているのだ。まるで体力が抜き取られるような何もしていない状態でも疲労感を覚えるほどであった。

激しい息切れと共に体力が失っていることを全身で感じ取りながら

片膝が地面についてしまう。明らかに体に異常が起きておりこのまま倒れそうなほどの勢いである。

『ようやく効果が出てきたようね……あなたに勝たれては困るの。』

『プレシア・テストロッサ……貴様まさか……！』

邪悪なほど不適な笑みを浮かべているプレシアに対してドクター・ゲロは啞然とした表情を見せながら問いかけていた、それはモニター画面を通して悟飯にも目視で捉えられる光景だ。

果たしてプレシアは一体悟飯に何をやったのか、ドクター・ゲロとプレシアの目論みとは……そして悟飯の運命は——？

第18話 仕組まれた罠（中編）（後書き）

アリサ「ちょっと！あんなの卑怯じゃない！！正々堂々と勝負しなさいよっ！」

すずか「お、落ち着いてアリサちゃん。悟飯くんなら大丈夫だよ。」

なのは「でも、人造人間はまだ他にもいるみたいだし…やっぱり心配だよ。」

アルフ「怪我さえしなかったらあたしだって戦えるのに…。」

フェイト「母さん…。」

第19話 仕組まれた罠（後編）

（カラダが…重い……。なんで思うように動けないんだ…。）

まるで体自身が錘となってしまうたような感覚に襲われ身動きが取れずに苦痛の表情を浮かべて体を動かそうとする。

決して動かせないわけではないが動いた時の疲労感は凄まじく戦闘など軽々とできるほどではない、悟飯は自身の体の変化に困惑の色を隠しきれない。

『貴様、生命力吸収装置を作動させたな…。』

『ええ、そうよ…なにか問題でもあるのかしら？』

モニター画面から耳に届いてくる老人の声と女性の声、互いの声が重なり合った会話は悟飯にとって信じられない内容でもあった。故にドクター・ゲロは不愉快そうに眉を顰めて隣方向にいる女性に対して敵意の籠った視線を浴びせていたのだ。

『勝手なことをしおって…アレは地球人を滅ぼす為に使う予定だったのだぞ！』

『私には関係ないわ、地球人を滅ぼすことなんて興味はないの…。』

怒りを乗せた声をプレシアにぶつけるが本人は悪気もなくまるで開き直ったかのような言葉を返され更にドクター・ゲロの怒りは積もっていく。

それは決してプレシアとドクター・ゲロの関係は良好な物ではなく寧ろ嫌悪に近い感情で成り立った約束上の関係であることを物語るうとするような会話である。

『ふざけるな！あの装置はまだ未完成だ。こんな所で使ってわたし
の人造人間にまで被害が及んだらどうするつもりだ！！』

『だったら早く決着をつけなさい……私には時間がないのよ。』

中々動かすことのできない体に焦りや緊張を覚え始めた悟飯はモニター画面に目を向けてプレシア達の様子を窺う、同様の行為を人造人間達も行いながら一気に視線は集まっていく。

壁に叩きつけられた13号は自身の体に力を入れて空中を浮遊する。自身の体に変化がないことを調べるために腕を回したりして確認をし始める。

「オレの方はまだ自由にカラダが動くな……。」

悟飯はその間に生命力吸収装置と言われる機械を部屋中に視線を張り巡らせて探し出そうと試みていた、その機械を破壊すればこの金縛りのような重苦しさから解放されるかもしれないという計算に乗っただ。

だが途中で視界がぼやけて周りが見えなくなっていく。全身の疲労

は尋常ではなく、悟飯が思っている以上に生命吸収装置によって大幅な体力が吸い取られてしまっていた。

『く…13号、何をやっている！瘴気が完全に広まる前に孫悟飯を倒せ…!!』

「わかりました…。」

荒々しい声と共に命令を下したモニター画面に映るドクター・ゲロに振り返って返事を口にする、悟飯は見通しの悪い状況下で13号を睨みつけていた。

やがて13号は地面に着地し静かな足取りで近寄り、悟飯は激しい息切れを引き起こしながらも目の前の敵に鋭い眼光を向けて拳を固く握り締め始める。

「はあっ、はあっ……うおりゃあーっ!!」

「はああっ！」

全身に残っている体力を振り絞って13号に攻撃を仕掛けるがあっさりと13号は悟飯の拳を受け止めてしまっ、まるで赤子の手を捻るように13号の握られた拳を悟飯の腹部へと押し付ける。

一撃一撃が怪力を誇る威力が力が残されていない悟飯の腹部へと叩き込まれ彼の青い瞳は激痛によって揺らぎ始めていた。

「が…あああ……。」

苦痛の聲が小さく呻く、拳を腹部に叩き込まれるだけで今の悟飯は
気絶しそうなほど弱りきっていたのだ。次の反撃に出ようにも体は
一向に動けそうにもない。

弱々しく地面へと倒れこもつとするが13号は襟首を片手で掴み取
つて悟飯の小さな体を強制的に浮遊させる。

「残念だ孫悟飯、お前とは小細工抜きで戦いたかった…。」

「——うわあああぁっ!!」

腹部に手を添えた途端、禍々しい赤い光の粒子が添えられた手に瞬
間的に収束されていく瞬間——、一方的な暴力へと成り代わった。
エネルギー波が放出され一気に悟飯自身へと叩きつけられ吹き飛ば
されてしまう、追い討ちをかけるような衝撃が全身へと響くと同時
に壁に激突する。

激しい痛みが意識を朦朧とさせ生命力吸収装置によって体力は根こ
そぎ奪われ、悟飯は立ち上がれるほどの気力を持っていなかった。

（アリサちゃん…約束守れなくて…ゴメ…ン……。）

周辺を取り囲む紫色の毒気が悟飯の意識を遠ざける、悟飯は立ち上
がることもできずにただアリサの顔を不意に思い浮かべるだけだっ

た。

『よし、いいぞ！そのままトドメを刺せ！』

「…はい。」

13号は静かに頷くと同時に悟飯の目の前にまで歩み寄っていく、悟飯はその事に抵抗を示すこともできずに目を覚ますこともない。だが直後、ドクター・ゲロとプレシアが映りだされているモニター画面に金色の髪を持つ一人の少女と赤茶の髪を持った女性が映し出されたのだ。

『母さん、やめて…！！勝負ならもうついたよ、だからもう……。』

『…フェイト、あなた勝手に入ってきたらだめでしょう？』

紫色の瞳にフェイトが映し出されれば彼女は身震いを引き起こす、直感的にフェイトはプレシアの怒りに気づいているのだ、

故に焦りで満たされた態度を改めて恐怖で湧き出てくる歪な冷静さを露にしながら、此处で引くわけにもいかないとフェイトはプレシアと視線を通わせる。

『……ごめんなさい、母さん。で、でも、悟飯との勝負は…。』

『勝負はもうついたからいいじゃないか、何も殺さなくなつて…！』

通わしていた筈の視線が恐怖によってフェイトは視線を逸らしてしまふ、代わりにアルフはフェイトの言葉を代弁するように拳を握り締めたまま口にした。

何度も命を救ってくれた恩人だからこそ二人は動かざるをえなかったのだ。フェイトは恐怖を押し殺して俯いて、覇気のない言葉で訴えかける。

『それに…悟飯は、負けたら私達に協力するって……。』

『なにを言っている！ヤツを生かしておくのは危険だ。計画を潰されてもいいのか！』

『それだと約束が違うじゃないか！！それに協力してくれるならあなたの計画もスムーズに進められるだろ、敵がいなくなるんだからさあ！』

『……そうね。』

俯いて曇ってしまった表情がプレシアを見上げる、フェイトは仄かな光が胸に宿ったようにプレシアの顔を見上げた。

誰もが最後に呟いたプレシアの一言が理解できずにいたのだ、何かに納得したような言葉だったがその真相を見破れる者はこの場に誰一人としていない。

プレシアという女性自体が周りから見れば何を考えているのかまったくわからない、故に不気味な雰囲気身を纏っている。だからこ

彼女の一言はその空間内の人物全員から注目を得ていた。

『フェイトが全てのドラゴンボールを集めてきてくれるなら、生かしてあげてもいいわよ……。』

ミスを許さないと遠回しに隠された暗黙のメッセージでもあり、それを瞬時に見抜いたフェイトは決して迷うことなどない。

自分がミスをしなければ悟飯は生かしてくれる、それが何よりも嬉しさと繋がって金色の髪を揺らしながら彼女は頷いた。

『プレシア！わたしを裏切る気か！！』

それでも決して同意することはなく激怒したドクター・ゲロに対してアルフとフェイトは悟飯の事でどう説得すればいいか、と互いに言葉に迷いが生まれる。だがその説得に乗り出したのは――。

『落ち着きなさい…代わりにあなたの言っていた条件を飲むわ、究極の人造人間を作り上げる為に必要なんでしょう？だから彼を生かしなさい……。』

ドクター・ゲロに投げかけた言葉の意味をフェイトとアルフは理解することができなかった。意味がわからない、という風に話に割り込むことができない。

だが今は悟飯を生かすことが彼女達にとって一番の最優先事項であ

る。だからこそ無理に輪に入るのではなく二人の会話を聞くことを優先した。

『くつ、ぐぐぐ……わかった。ただし、ヤツが我々と敵対するような行動を起こした時は、すぐに始末するからな。』

『わかってるわ……。』

例え悟飯が助かってても下手な行動を起こせばすぐに襲い掛かる、その話だけがアルフとフェイトの脳裏に嫌というほど焼きつくのだった。

話に決着をつけた所でドクター・ゲロは生命力吸収装置を停止させるスイッチを押す。すると途端に悟飯がいる部屋中の瘴気は消え去っていく。

「ふう、危なくオレ達まで生命力を吸い取られる所だったな。」

「あんた達はいいわね。無から造られたから効かなくて。」

人間をベースにしている18号と17号は生命力吸収装置に対して無傷とは限らなかった、彼等の表情には苦痛の色を浮かべてはいないが冷や汗を額から流してはいたのだ。

『13号、孫悟飯を空いている部屋に拘束させた状態で閉じ込めておけ。17号と18号は研究室にこい、瘴気の影響を受けてないか』

検査する。他の人造人間はわたしの指示が出るまで待機している。』

人造人間が集う空間に響いた命令通りに彼等は動き出す、13号は
気絶してしまった悟飯を抱えて部屋から出て行く。その姿を目にし
たフェイトは安心のため息を漏らした。

できることなら悟飯が起きるまで傍にいたい。衝動的な感情が胸を
抉るように突き動かそうとするがそれを中断させる聞きなれた声が
耳に届く。

『フェイト、はやく残りのドラゴンボールを集めてきなさい……。』

『…はい。行こう、アルフ……。』

一瞬、恐怖が蘇ってくるのでその場から離れようとアルフに呼びか
けて部屋から出て行く。

静かに響く足音が虚しく響きながらアルフと共にドラゴンボールを
探しに行くのであった――。

太陽が沈みかける夕日の時刻、茶色の髪をツインテールにさせた少
女は誰もいない虚しい空気に包まれた道路を歩きながら思考を繰り返
返している。

「… 悟飯くん、大丈夫かな。」

学校で彼女はアリサと喧嘩を引き起こしていた。原因はなのはが中々悩みを打ち明けなかった事に対するアリサの苛立ちから。

なのはを心配しての行動が結果的に捻くれた形となって喧嘩という結果になってしまったのだ。それをなのはは理解していたからこそ余計に胸の痛みも強くなっていた。

更に悟飯は病気で休んでいる、事情を知っているなのはからすれば珍しく思った日でもありアリサが情緒不安定な原因は悟飯にあるのかもしれない、などと思いをループさせていたのだ。

「なんだよコイツ、変な顔しやがって！」

「おい、コレ脱げよ！」

なのはは耳に届いた声の発生源へと視線を振り返らせれば其処には公園にいる幼稚園児ぐらいの男の子が数人で中央にいる少年を囲んでいた。

その少年の姿は奇妙な格好で、茶色いフードで自身を隠すように全身を覆わせており少年の姿を目視で確認することは難しい。

男の子はフードを脱ぎ取ろうと強引に引っ張るが少年は抵抗して中々離さない、拳句には蹴り上げたり石を投げつける始末でなのはにとって不愉快な感情がこみ上げてくるのに充分すぎる光景であった。

「うつ…やめてください。」

「いいから脱げて…!!」

「わあっ!？」

軽い悲鳴と共にフードが剥ぎ取られ姿が露となった瞬間——場を取り囲んでいた子供はすぐに悲鳴を上げて慌しい態度を表す。

「「「うわあああっ!!ば…バケモノーっ!!」」」

「え……。」

なのはもまた驚きの声を漏らす、子供達が悲鳴を上げてもおかしくない。緑色の肌を持った人型の生き物が姿を現し子供は後ずさりをしてしまう。

混乱しながら子供は近くに落ちている石を拾って投げつけ始める。少年のようなサイズの緑色の生き物はなんとか必死に堪えており、その様子を痛ましく感じたのは公園に向かって走り出した。

「まって、なにしてるの!？」

「やばっ…おい!みんな逃げるぞ!!」

なのはが近寄ってくる事に気がついた一人の男の子が全員に呼びかけてすぐに退散してしまう、よってその場に残ったのは緑色の肌を持った生き物となのはの二人のみ。

投げつけられた石が緑色の生き物の周りに散乱する中、なのははどう声をかければいいか迷いながらも静かに歩み寄って勇気を振り絞りながら声をかけてみることにした。

「え、えつと…大丈夫……？」

「あ、はい…ありがとうございます。」

着ぐるみじゃないかとなのはは疑い、目を凝らしてよく観察してみるのが目の前の緑色の肌を持つ生き物は着ぐるみのように感じない。礼儀正しくお辞儀をして顔を上げる緑色の生き物はすぐに近くの地面に置かれている茶色いフードを手に取り全身を覆い隠してしまう。

「では、ボクはこれで……。」

背を向けて公園から立ち去ろうと足を動かした途端――、突然地面に向かって倒れこんだのだ。

子供から石を投げられたり蹴られたことによって肌が傷つけられ怪我をしている事が倒れた後、なのははようやく理解することになった。

「ふええええっ！？」

すぐに駆け寄ってなんとか揺り起こそうとするが目を開けることはなく体も動かない。想像以上に体力が消耗しており暫く起きる気配がないのだ。

なのはは途方にくれながらもフードで覆い被さった生き物を両手でなんとか自身の背に抱えて歩き出そうとする。

「ど、どうしよう……とにかく、家に帰ったらユーノくん相談した方がいいかも…。」

その際に手当ての治療してもらおう、となのはは考え付く。こうしてなのはは周りを警戒しながら家に連れて帰るのであった…。

第19話 仕組まれた罫（後編）（後書き）

アリサ「あーム力つくム力つくム力つく！！悟飯を返しなさいよー
ーっ！！」

フェイト「…ごめんなさい。」

アルフ「フェイトは悪くないよ。悪いのはあの鬼ババ達さ！」

すずか「そういえば、なのはちゃんが助けた子って誰なんだろう…。」

「

なのは「にやはは…それはまだわからないかな。でも悪い子じゃないと思うよ。」

第20話 超戦士の不在

「まったくもう……悟飯、何やってるのよ。」

脳内で思い浮かべた少年と別れてから数日が経過していた、帰ってくる気配がない事からアリサは重いため息を漏らす。

彼女は熱で学校を休んでおり、現在は窓辺から覗き込んだ風景や太陽の光が差し込んでくる事に眩しそうに感じながら目を凝らし、寂しそうに光景を目にしていたのだ。

「嬢ちゃん、紅茶の準備ができたぜ。」

「……ありがとう、ハガネ。」

小型の白いテーブルに紅茶の入ったマグカップが置かれる、あの大会以来ハガネはアリサの家で執事として働いていた。

ハガネは日数だけ見ればまだまだ見習いの執事だが身長の高さと並外れた筋力により想像以上の活躍を見せている。

更にドン・ハガネという名前はただの芸能名に過ぎないがその覚えやすさとインパクトの強さでそのまま通っていたのだ。

アリサの屋敷内には間違いなくドン・ハガネという名前の人物はいない。普段はドン・ハガネで通っており本名は一部の人間にしか知り渡っていないかった。

「ハガネ、悟飯は何やってると思う？」

「坊主か…今頃あの金髪の嬢ちゃんと仲良くやってるんじゃないのか。」

「な、なんですってえ！？」

悟飯の安否を心配していた筈のアリサは一変、ハガネの一言により何かが大きく揺さぶられてしまう。金髪の少女と言われて思い浮かんだのはフェイト・テストロツサだ。

というのもアリサにとってフェイトと悟飯の関係は良好であり仲良く見えてしまう。事実、仲は決して悪い物ではない。故にアリサは複雑な心境を抱き、わなわなと拳を震わせながらも怒りを露にしていた。

「悟飯…もしフェイトとそーいう関係になってたら絶対許さないんだからあー！」

「…女って怖えな……。」

ハガネからすれば女と女は仲が良いものであると思っていたが、アリサの一面により改めて認識を改め、思わず恐怖が胸に残る。

そしてアリサは約束という記憶が残っている以上、悟飯が帰ってくるまで永遠に待ち続けるのだった。

綺麗に整頓された一人部屋、なのはは緑色の生き物を自分のベッドに一日中寝かせていた。公園でその生き物は突然倒れ放置する事もできずに家で休ませる事にしたのだ。

上手く両親や兄弟に見つかる事もなく部屋に運ぶ事に成功はしたが見つかるのも時間の問題である事をなのはは頭で理解している。

フェレットの姿を取り持つユーノも緑色の生き物を見守るように様子を眺めていた。なのはの説明を聞いて以来からユーノは険しい表情を崩さず脳内で思考を続けている。

「んう……あれ？　ここは……？」

「あ……！えっと、大丈夫……？」

「え……はい、おかげさまで……。」

「そっか、よかったあ……。」

緑色の生き物は意識が覚醒し、目を覚ませば小柄な少女が自分の顔を覗き込むようにして心配している事をようやく理解する事ができた。

小柄の少女であるなのはは安心した言葉と共に悪意のない無垢な笑顔を表に出す。だが状況を整理できずにいる緑色の生き物は部屋に視線を向けては数秒後――。

「どうやら、あの後ボクは気を失ってたようですね。」

「うん、そうだね…ところで、名前を覚えてくれる？私は高町なのは…こっちがユーノくん！」

「なのはさんにユーノさんですね。ボクはデンデです。」

「デンデ……早速だけど、君は一体何者なの？」

形からして人間ではなく、動物とは決して形容しづらい形を持つ緑色の生き物に対してユーノは視線を貫いていた。
唐突にも本題を切り出すユーノに対してなのはは緊張感が胸に籠っていた。

「…ボクは此处とは別の世界から来ました。」

「やっぱり……！」

「じゃあ、デンデくんも悟飯くんやユーノくんと同じ…？」

「悟飯さんを知っているのですか！」

「で、デンデくんこそ悟飯くんのこと知ってるの…！？」

表情を一変させる二人にユーノもまた戸惑いを隠せずにいる、悟飯の事を知っているという事はデンデは悟飯のいる世界の人なんじゃないかとすぐに頭を回転させる。

数分の時間を費やして、三人は情報交換を行うことで互いの現状を把握するのに努力を費やす。

「——それで、強い気に反応して目が覚めてそれが悟飯さんの気だとわかったのですが、すぐにその気が消えてしまったので気を感じた方角を頼りに悟飯さんを探していました。」

デンデが語るには空間に空いた次元に吸い込まれ目を覚ますとこの世界に来ていたらしい。そして悟飯の気を感じて探している最中なのはと出会い、という話を一通り聞いたところでは口挟む。

「…デンデくんはドラゴンボールについて何か知ってる？」

「ドラゴンボール？ はい、知ってますが悟飯さんから聞いたのですか？」

「うっん、ユーノくんから聞いてて…。」

「実は、そのドラゴンボールがジュエルシードという宝石と合体していて……。」

「えっ、ドラゴンボールが合体…ちょっと待ってください！じゃあこの世界にドラゴンボールがあるのですか！？」

動揺を露にするデンデだが、合体に注目しているのではなくこの世界にドラゴンボールがある事に注目しているように見えた。

故になのはとユーノは言葉に出さなくてもデンデの注目点に疑問を感じている。

「そうだけど……合体した理由とか、何かわかるかな？」

「すみません…実際に見てみなければわかりません……。」

「そっか、なのは！お願い。」

ユーノの掛け声と共に赤い真珠のような宝石を片手に持ち出せば今はのが所持しているジュエルシードが宙に浮く、円状に飛び回るジュエルシードに視線を向けるデンデ。

見た目こそデンデの知るドラゴンボールの姿を持っているが中心部分の青い星を除けばドラゴンボールと殆ど同じである。説明を加えていき、ようやくデンデが理解した所で一言漏らす。

「星が青いところを除けば、ボクの知ってるドラゴンボールです。」

「ジュエルシードは元々、青い宝石だからね…何かわかったことは？」

「恐らく、そのジュエルシードがドラゴンボールの持つ力に察知して引き寄せられたのかと。」

「引き寄せられるってことが、あるんだね……。」

「強い力同士なら惹きあってもヘンではないので……。」

——結果、ジュエルシードとドラゴンボールは合体するに至ったという事になる。だがより強力となったドラゴンボールを狙う者はいるのだ。

なのはとユーノが少なからず知りえるのはフェイト・テストロツサと名乗る魔法少女とその使い魔。なのはと同じ魔法少女なのだが目的を把握できていない二人にとって敵である事に変わりはない。

ドラゴンボールを回収する際、何度か彼女達と衝突する羽目になったせいでフェイトの存在は二人にとっては暗い影を作り出す存在となってしまうている。特に同年代と思われるなのはが深刻だった。

「…そういえば、デンデくんはこれからどうするの？」

「ボクは悟飯さんに会いに行きたいのですが…もし居場所を知ってるのなら教えてくれませんか？」

「悟飯くんならアリサちゃんのお家だよ。でも悟飯くん、風邪引いたから…——ッ！」

「これは…ジュエルシード…！」

一気に二人の表情は張り詰めた物へと変化する、ドラゴンボールに埋め込まれたジュエルシードの反応を察知した途端に場の雰囲気が一変し、凍りつくようになのははすぐに立ち上がった。

「デンドくんごめんね…！ジュエルシードの反応があったから行かないといけないから、部屋は自由に使っていいよ！」

「話はまたあとで！行こう、なのは！」

「あ…なのはさん！ユーノさん…！！」

二人は突拍子もなく駆け出して家から出て行く。途中でなのはの両親や兄弟に心配して言葉を投げかけられたが嘘を吐く事で二人は切り抜けていた。

罪悪感がなのはの胸を締め付けながらユーノと共に道路を走行する――、一人取り残されたデンドは虚しい空気で包まれた部屋のベッドに取り残されてしまっているのであった。

――同時刻、ある一軒のマンションの屋上で金色の髪を風に踊らせる金髪の小柄な少女と赤茶色の毛を持つ犬型の生き物がその場に居合わせている。

空は紺色に染まり太陽が姿を現さず月光だけが辺りを僅かに照らし、フェイトは無表情を浮かべながらも街を静かに見下ろしていた。

「…ジュエルシードの反応あり、か。アルフ…悟飯の為にも母さんの為にも頑張ろう。」

「あ、ああ…フェイト、大丈夫かい……？」

「……私は平気だよ、ありがとうアルフ。」

悟飯との一件が未だに胸を締め付けるがそれでも自らが動かなければ始まらない。母親に対しての疑惑は深まるが此処で反発した所で悟飯もフェイト達も殺されてしまう事ぐらい明白だ。

こうして二人は再びジュエルシード搜索を開始する、なのは達と衝突する事も目に見えている二人だが今は悟飯を助ける為に手段を選んではいけない。ジュエルシードが反応する場所へと向かっていく。

それぞれの思いを抱えて、悟飯が不在となった舞台へと身を投げていくのであった――。

第20話 超戦士の不在（後書き）

アリサ「悟飯、早く帰って来なさいよ…。」

すずか「アリサちゃん…。」

なのは「デンデくんは悟飯くんとどんな知り合いなんだろう…?」

デンデ「これから先、なにか一波乱が起きそうですね。」

フェイト「（絶対にドラゴンボールを手に入れる…!）」

第21話 秘めたパワーと管理局（前編）

歩道を走り抜ける二人はジュエルシードの反応場所を捜し求め、夜の街を走り回っていた。太陽が沈んだ時間帯は気味の悪さを感じさせる。

首元に紐で繋ぎとめられた小さな赤い宝石を片手で掬い上げて彼女は一安心のような表情を浮かべていた。

「レイジングハート……また、一緒にがんばってくれる？」

『All right, my master!』

「……ありがとう。」

機械的音声が流れ込む、言葉を聞き取ったのはは表情を変化させユーノの後を追い続ける。…数分後、ジュエルシードの反応場所と思われる公園に辿り着く。

不気味な冷風が辺りを包み込む公園になのはとユーノは肌寒さを感じ取りながら周辺を見渡して辺りを確認していた。

「此処がドラゴンボールの反応があった場所だけど――、あれは……なのは、あれを見て！」

「……もしかしてあれが、ドラゴンボール!？」

一本の巨大な樹にオレンジ色に輝く丸い宝石が塗りこまれるように埋められていたのだ、宝石を強く握り締めるなの是对し巨大な樹はまるで生き物のように形を変化させる。

根の部分が手のように動き回る巨大な樹は生物として形容する事もできた。ジュエルシードの力によって飛躍的に戦闘能力を向上させた相手になのは一人で立ち向かえるかどうかは怪しい。

「気をつけてなのは…今回のも強そうだ。」

「そうだねユーノくん……——レイジングハート！セーットアップー！！」

『Stand by ready・set up.』

桜色の光に身を包み、光は数秒の時間で消滅。光の奥から出現したのは純白の衣装を身に纏うなのはが姿を現している。

何時もの愛用の杖を両手で掴み取る。先端部分を化け物と化した樹に向け、二人は戦闘体制が整うと同時に空から金色の魔法弾が降り注ぐ。

「あれって…！」

なのはにとっては見慣れた魔法弾でもあり、その術者が頭に浮かぶ——敵は蒼光を放つバリアを形成すると金色の魔法弾を全て防ぎ切られてしまう、

「うわぁーお、生意気ね…バリアまで張るのかい。」

「うん…今までのとは少しタイプが違うみたいだ。それに、あの子もいる……。」

「フェイトちゃん……!」

振り返った矢先にはなのはが予想していた人物が二人立ち並んでいた。狙いは自身と同じ目的であり、警戒心は膨らんでいく。

「グオオオオオオオオ!!」

生き物のように雄叫びを上げ、樹の形をした怪物の周辺に地割れを引き起こしながら巨大な根が地面から襲い掛かってきたのだ。地面は地震が起きているかのような振動が渡り幾つもの巨大な根が次々と地面を抉りながら出沒する。

「ユーノくん、逃げて…! レイジングハート!!」

『——Flier Fin』

ユーノは茂みへと隠れ、桜色の羽がなのはの靴に装着されれば飛翔により地面からかけ離れていく、巨大な根がなのはに激突する前に回避行動を取りながら上空へと飛翔していく。

だが逃がすことはなく根自身が伸び続け上空を飛行するのはを墜落させようと牙が襲い掛かる、故になのはは再びレイジングハートに指示を出す。

「飛んで、もっと高く……!!」

『All·right!』

「アークセーバー……いくよ、バルディッシュ。」

『……Arc·saber.』

高速という名の速度を持つて遙か上空へと上り詰めるのは、それを追跡し撃墜させるが如く巨大な根は迫り来るが遙か上空に位置するなのはに追いつく様子はない。

バルディッシュと呼ばれた漆黒の長斧からフェイトの魔力を圧縮させた金色に輝く光刃を形成させる。死神を連想させるような眩い光を放ちながらフェイトは大きく長斧を一振り――光刃を投げ払う。

「グオオオオオオオオ……ッ!!?」

巨大な金色の光刃はブーメランのように高速回転をしながら次々と根を切り落としていく、なのはを墜落させようとした巨大な根や怪物周辺に生えた巨大な根も容赦なく無慈悲に切断される。

勢いが揺るぐ事はなく直接本体へとバリアに衝突させ大きく敵のバリアを削り取ってしまう。切断によるダメージとバリアにより防ぎ

切れなかったダメージが悲鳴となって怪物は叫び公園に木霊していた。

『――Shooting Mode!』

なのはの愛用の杖であるレイジングハートは形状を変化させ先端部分が槍状の武器となって姿を変貌させる、更に彼女の足元には桜色の輝きを放つ複雑な文字言語が刻み込まれた魔方陣が浮上していた。一方、フェイトもまた片手で一定の動作を示せば金色に煌く魔方陣が足元に浮上、更に敵を見据え狙いを定めるような小型の魔方陣が彼女の前方に形成され金色に煌く。

「デイベイン、バスタああーッ
！！」

「撃ち抜け、轟雷……ッッ！！」

両者の機械的な音声が意思を持って響き渡った。互いの膨大な魔力が放出され直線状に敵へと集中砲火を畳み掛け、金色の放電と稲光が真夜中の公園を一方的に照らし出す。

真夜中であるにも関わらず公園の暗闇が光によって溶かされ膨大な魔力の煌きが公園全体を包み込むように照らし出されていたのだ。同時に発生するのはバリアごと敵を破壊する爆発と轟音だった。

「……やったの……？」

「これだけの魔力をぶつければ、例え倒れていなくても只じゃ済まない筈……。」

爆煙が舞い上がり敵の姿は隠蔽され公園全体を覆い隠すように発生する、二人合わせた砲撃の威力の凄まじさを物語るように周辺のコングリート等の障害物が碎き散っていた。

「……これで、あの子を助けられる……。」

「フエイト……ああ、そうだね……。」

本来なら二人にとって建物、環境を破壊する行為は望ましい物ではない。だが互いにジュエルシードを求めており敵の強さ故に手段は選ぶことができなかったのだ。

安静の感情が場に居合わせる全員の緊張感を緩めると同時に爆煙は風景と共に溶けていく——、だが場違いな程の絶叫が空間を支配した。

「グオオオオオオオオオオ——ッッ！！！！……」

やがて爆煙は晴れて崩れ去った筈の敵のシルエツトが薄暗い闇の空間内で浮かび上がってくる、太陽のない闇の中で倒した筈の敵が雄叫びを舞い上げて木霊していた。

完璧に煙が闇へと溶けていった瞬間――、顔を現したのは漆黒の炎のように燃え上がるオーラを身に纏う大樹。禍々しく燃え盛る漆黒の炎の奥に怪物がいたのだ。

「……！！　　噓、まだ倒れてない……！！」

「これは…まさか魔力オーラ！？」

「私達の砲撃に当たる直前で発動したんだ……！！」

「ちつ…生意気にも程があるよ！」

全員の脳裏に映像として蘇ったのはバイオ戦士。不吉な漆黒の炎を体に宿していた彼は強靱な力を持つてして変身前の悟飯を含めた全員を圧倒した強敵だ。

「なのは、魔力オーラには気をつけて！あれは身体能力を上げるだけじゃないんだ……！！」

「わ、わかったユーノく……っ、きゃあああっ……！！」

地面から出沒する大量の巨大な根がなのはの周辺から発生する事で体当たりを全身に食らい、コンクリートの地面へと全身を強打させ

てしまう。

「魔力オーラでパワーアップしてる…！サイズフォーム…！」

「フェイト、あたしが援護するよ！」

戦斧は形状を変質させて金色の魔力光が発生する、死神の鎌とも呼ぶべき漆黒と金色で彩られた少女は飛翔し次々と巨大な根を切り落としていく。

残骸が零れ落ちる中、攻撃の緩みは一向に見せる気配はなかった。高速で無数の巨大な根と大樹から発生する蔓が雨のように降り注ぎそれ等を全て回避していくフェイトとアルフ、そしてユーノである。

「くそつ、これじゃあフェイトの援護ができないじゃないか…！」

「早い…！！！」

「数が多すぎる…ッ。」

速度自体は上回っているが彼等が追い詰められる理由は数の多さだ、数え切れないほどの攻撃を紙一重に避けていく彼等は防戦一方であり攻撃手段に容易に移せる状況ではない。

さらに攻撃自体は決して遅いわけではない。速度は高速を飛び越えて超高速となって雨のように攻撃を叩きつけられる中、なのはは避けようと駆使するが…。

「うつ、くう……。」

『master!』

一瞬で全身は拘束され身動きが取れない状況へと追い遣られてしま
う、蔓が全身を縛る力が増していき苦痛の表情が浮かぶ。

「まずい、このままじゃあの子が……。」

「なのはああッツ!!!!」

絶叫を上げるユーノは巨大な根を避け鶴を避けなのはへと駆け抜け
ていく——が、立ち塞がる巨大な根と蔓は超高速の勢いでユーノ
へと集中攻撃を畳み掛ける。

「きゃあああああ……あ……。」

貫いたのは凶器の根、なのはの腹部を貫通して大量の血液が付着し
た根が背中から伸びていた。力の無い弱々しい悲鳴が公園に広がる。

「なのは、なのはああ……!!!!」

ユーノは必死に彼女の名前を叫び巨大な根と蔓を避けて瞬時に魔法を唱え撃墜させ、強引に前進する。虚ろな瞳の痛々しさに胸が締め付けられても前進しようとしていた。

それはユーノだけではなくフェイトとアルフも同様に、敵という立場だろうと彼女達は無意識に駆け出している――。極僅かな時間は高速の中では長時間と化していたのだ。

「あ……あ……。」

漆黒の炎に身を包む巨大な根がなのはを突き放して地面へと叩きつけられる。全身の激痛が彼女に襲い掛かるが腹部だけは痛覚を感じられずにいる。

やがて巨大な根は倒れているなのはの心臓部位を捉え、決り取る勢いで貫通しようとする刹那は異常に彼女は長く感じていた。

「なのはさん……!」

聞き慣れない少年の声が響いた瞬間、なのはは地面から姿を消していたのだ。思いも寄らない事態にユーノは目を疑ってしまう。

「デンド、くん……?」

「喋らないで!すぐに治しますから……。」

唐突にデンデは戦闘地帯へと乱入を果たしたのはを救出する事に成功していたのだ。大樹から離れた地面に未だに血液が止まらないのはを寝かせて両手を腹部に当てればデンデは静かに目を閉じた。煌びやかに無数の光が両手に収束、腹部の大量出血を抑え、なのはの腹部は貫かれる以前の状態へと戻されるように回復してしまう。あまりにも一瞬の出来事になのはは言葉を失ってしまっていた。

「で、デンデくん…これ、どういうことなの…？」

「説明は後でします！今はあれをなんとかしないと…。」

「うわああああ！！！」

悲鳴が叫び上がるとなのはは視線を戻す、巨大な大樹によって蔓に縛られたユーノを目にした途端なのはは立ち上がり上空へと飛翔すれば桜色の魔方阵が足元に浮上する。

「つぐう…！このままじゃやられる……。」

「はあっ、はあっ…くそッ！」

魔力の煌きと共に苦痛や悲鳴が飛び交う。蔓で縛り上げられ身動きが取れずにいるユーノと体力を消耗し動きに無駄が出来るフェイトとアルフ。

なのは以外のメンバー全員は体力の限界が近付いてきていた。魔力オーラにより驚異的に増幅された身体能力を前に長期戦は無謀極ま

りない。

「ユーノくんや皆を助けないと……！ディバイン、バスターツツ！！」

機械的音声は再び魔術名を紡ぐ、二度目に渡る桜色の砲撃が放出され暗闇に身を包む大樹へと直撃させる。それは完璧な命中を表し敵を貫通するのは容易な筈であつた。

「グオオオオオオオオオオオ……ツツ！！！」

「ぐつ、うわあああ……！！」

破壊力抜群である筈の砲撃は簡単に暗闇の中へと消失し霧のように溶けていく、それはなのはのディバインバスターが全く通用していない証拠でもあり証明でもあつた。

大樹の邪悪な雄叫びだけが木霊し、ユーノの苦痛の声が短く響き渡る。なのはの主砲が封じられた今、彼女は大樹に対しての打つ手なしの状態なのだ。

フェイト、アルフも体力の消耗と大樹の多数攻撃に翻弄され助ける術と打破する術が見当たらずにいる。思考する時間は戦闘においては無駄な時間と言わんばかりの超高速攻撃の数々が迫っていた。

「このままじゃ皆やられる……ユーノくんをなんとかして助けないと……でも、どうすれば……！」

「はあっ、はあ……あれだけの攻撃をしておいて魔力の消費が感じない……。」

「あの魔力オーラをなんとかできればいいんだけどねえ……！じゃないと手も足もでない！」

「……魔力オーラ……。」

再びアルフとフェイトは交戦し続ける、だがなのはだけがその場から離れた場所で呆然と漆黒のオーラを見据えていた。ユーノが言うには身体能力だけを上げる技ではないという言葉が脳裏に浮かぶ。魔力オーラといえばこの大樹以外の使用者であるこの場には存在していない悟飯がなのはの中で連想する——、彼女の中で思い出した悟飯は身体能力を上げる事で得意の格闘戦に磨きをかけていた。

「もし、身体能力だけじゃないなら……。」

激しい攻防戦を続ける最中、なのはだけは動かず静止した状態が続く。その状態は僅か数秒間であつたが彼等の戦闘は数秒の間が長時間となっている。

「——レイジングハート……！」

『All right・my master・』

体内に残る魔力を犠牲に彼女は悟飯と大樹が扱う魔力オーラを構成していく、淡い桜色のオーラが身を包み込み悟飯と同様に身体能力を急激に上昇させる。

なのはの魔力は驚異的な物であり、その魔力を使用した魔力オーラは凄まじい勢いで身体能力を上げ続ける。彼女は真夜中の公園を照らす桜色の光を放つ――！

「もしかしたら……！！」

だが彼女の狙いは身体能力を上げる事ではない。元々前衛型の魔導師ではない後衛型の魔導師が悟飯と同様の使い方をした所で意味は成さないだろう。

なのはの計算上では身体能力だけではなく魔力によるダメージを倍増させる事が出来るのではないかという計算が脳内で展開されていた。

原理は今一つ理解していないがなのはの予想では身体能力の他に影響する物は魔法関係となる。一か八かの賭けである事は否めない彼女がこの場を打開する方法がないのだ。

「ユーノくん、今助けるから……！」

桜色の魔方阵は足元に浮上する、槍の先端部分を大樹に突きつけ狙いを定めて高密度の魔力を収束させていく――更に桜色のオーラを纏った瞬間、威力は大幅に増大する。

「フェ、フェイト！あれ……！！」

「魔力オーラ！？……そうか、あれなら……」

「どうということだい……？」

「魔力オーラはかなりの魔力を消費してあらゆる能力を増強させるんだ……砲撃の威力を上げるつもりなんだと思う。」

「だったらあたしとフェイトがサポートしてやった方がいいんじゃない……！！」

「そうだね、今は手段を選んでいられない……アークセーバーッ！！」

電子音声が流れると同時に大きく一振り。金色の光刃が空中を駆け抜け高速回転。巨大な根を次々と切断、更にアルフは細かい蔓を次々と木っ端微塵に切り刻んでいく。

膨大し波長し続ける魔力、防御壁のように根と蔓が大樹を覆い隠していたが二人の協力によりなのは方面からの前方だけ切り開かれる。

「なのはさんっ！！」

「今だ……！！」

少女の体に大幅な負担がかけられるが打破する術がない以上、なのはは決して膝を折る事はない。威力は飛躍的に上昇し巨大な桜色の

球体が発生した直後――。

「デ ィ バ イ ン バ ス タ ー 。

フ ル パ ワ ー ! ! ! 。

聞き慣れた電子音声と共に大樹へ向けて巨大な砲撃が発射。凄まじい貫通力と破壊力を秘めた死の一撃が真っ黒なオーラを身に纏う大樹へと命中する。

「グオオオオオオオオオオオオ…… ツツツ!!?」

蔓で絡み取られたユーノは蔓の緩みに反応するように全身の激痛に耐えながらその場から全力を振り絞って逃げ出す。即ち、大樹から離れ公園自体から離れるように。

フェイトとアルフも公園から上空へと向けて飛翔し、砲撃から逃れる。大樹は桜色に飲み込まれ、やがて光の中で完全消滅させてしまう。そして光の海にはドラゴンボールが姿を現していたのだ……。

第21話 秘めたパワーと管理局（前編）（後書き）

アリサ「まさか、なのはまで魔力オーラを使うなんてね…。」

なのは「にやはは。温泉の時、悟飯くんが使ってるのを見てたから。」

すずか「でも、魔力オーラって凄いね。あれだけ苦労した大樹を一撃で倒しちゃうんだもん。」

デンデ「いえ、あれはなのはさんの機転もなければできませんでしたよ。」

フェイト「魔力オーラ……。」

第22話 秘めたパワーと管理局（後編）

「ドラゴンボールだ……！！」

破壊し尽くされた公園全体を包み込む純白の光がドラゴンボールから放出される、——その光景は以前悟飯がバイオ戦士を倒しドラゴンボールから放たれた銀白の光景と同一の物である。

光に飲み込まれた風景は崩壊される以前の状態へと修復されていき元の公園へと逆戻りするよう再生されていく。

「ユーノくん、この光は何……？」

「僕にもわからない……でもこの光が建物を修復してるみたいだ。」

「フェイト、大丈夫かい……っ？」

「うん……平気、ありがとうアルフ。」

「ドラゴンボールにこんな力なんてないのに……。」

全員が呆気にとられる中で銀白に包み込まれた空間は消失していく、元の風景となった公園は荒れ果てた様子も無く穏やかな本来の姿を取り戻していたのだ。更になのはは桜色の光が消え、魔力オーラは解除される。

本来ならドラゴンボールに備えられた力ではない、デンドは疑問に対して導き出す回答を求めて思考が回転するがその作業は決して容

易ではなく、彼が今持っている知識の中で回答を得るのは至難の業であつた。

『Sealing mode・Set up!』

『Sealing form・Set up…!』

漆黒の長斧と桜色の翼を纏う槍形状の武器は同時に電子音声が流れ込む。元の公園となつた姿を見て、二人の目が捉える先にはドラゴンボールという共通点が存在していた。

「フェイトちゃん……お話、聞いてくれる?」

「…前にも言つた筈、例え話をしても分かり合えない。」

「それでも!話をしないよりは…フェイトちゃんつ!」

金色の髪を翻す少女に迷いは無く、瞳の先には決意とドラゴンボールだけが映し出されている。長斧に装着された金色の宝石は妖しく煌いて少女は宣言した。

「ジュエルシード、シリアル?…ッ!」

「っ、ふうい——!」

「ストップだ!!」

フエイトの行動に追い付く為になのはは慌ててドラゴンボールを封印しようとした直後、青色の魔方陣が地面に浮上すると一人の少年が出現したのだ。

紺色の髪に同色の瞳。衣装は純黒で彩られており、到底普通の少年だとは思えない衣装と威圧感が彼から発している。

彼の掛け声が二人の行動を静止させ、不気味な静寂が公園を包み込み始めていた。アルフとユーノは言葉を失い、デンドもまた傍観をしている。

「時空管理執務官クロノ・ハラオウンだ。此处での戦闘は危険すぎる…!」

「時空、管理局……?」

忠告を口にしたクロノと名乗る少年の紺色に光る眼差しが二人を捉え、瞳に映し出す。ユーノは啞然とした表情と共に樹の枝から彼等の様子を見守り続ける。

緊迫感溢れる空気が圧力となって全員へと押し掛かる中、なのはとフエイトは冷静さを崩さないものの自然とデバイスに対して握り締

める力は増していた。

「詳しい事情を聞かせてもらおうか……まずは二人とも武器を引くんだ。」

クロノは威圧的な声を発する、フェイトとなのははドラゴンボールへとデバイスを向ける事を止めれば結果的に武器を収める形となった。

「——ッ!!」

「何……!?!」

真夜中の上空から飛来する異様な煌きを放つ三つの橙色の魔力弾、クロノは振り返り様に片手を魔力弾へ掲げれば複雑な絵柄を描いた青色の魔法陣が形成する。

「フェイト、撤退するよっ! 離れて……!!」

「アルフ……!!」

魔方陣に接触した途端に魔力弾は次々と弾き返されるがそれでも上空から魔法を唱えるアルフは攻撃を停止させる事は無く、魔力弾を

降下し続けていた。

地面へと激突すると同時に周辺を埋め尽くす程に巻き起こる爆発と爆煙が発生する、強風と化して公園を再び叩きつける最中で各自のターゲットは回避行動を行いつつある。

なのはとクロノは飛び退く事で爆発を避け切り、視界が遮られた煙の中へと身を潜めると同時にフェイトはドラゴンボールに向かって疾走——やがて彼女は飛翔を行う。

（母さん…悟飯…！！）

「アルフさん、フェイトちゃん…っ!？」

手を伸ばしてドラゴンボールを掴み取ろうとする刹那の時間、クロノは一切表情を変化させる事も無くフェイトに躊躇いも無く武器を向ければ夜を一方的に照らす青色の魔力弾が発射する。

後方から容赦が一切見えない魔力弾による攻撃は彼女の視界外であり不意打ちなのだ。連射し続けるクロノの動作は無慈悲が込められた行動と一撃の数々が彼女を狙い打つ。

しかし、それを遮る全身真っ白に染め上げられた人間味のない人型の機械が彼の攻撃の前に立ち凌ぐ、動揺を隠し切れないユーノとアルフ、デンドは表情を一変させていた。

「……………ひやはっ!!」

「僕の魔力弾が…ッ!!」

「お前は、一体……!？」

無表情を貫き通し続けていたクロノの顔色には動揺の色が浮かぶ、彼の魔力弾は次々と真っ白な人型の機械の手の平によって吸収され全て命中する事は無かったのだ。

恐らく彼かと思われる機械の手の平をクロノは目を凝らし注目する。其処には円形型の小型機械が装着されており、全ての攻撃は真っ赤な小型機械による吸収機能が働いたという推測が瞬時に思考が働く。

「お前の魔力エネルギーはもらったぞ……。」

「くそっ！ドラゴンボールを奪われるわけにはいかない……!!」

「あ、あの…貴方は……。」

背後に迫る攻撃が届かない事に違和感を覚えたフェイトは後方へ視線を向け問いを投げれば、真っ白な機械は目を合わせる事も無く敵という名のターゲットであるクロノへ戦慄と畏怖を痛感させる眼差しを発していた。

だが唐突な展開に動揺を露にさせながら瞬時に対応するクロノの瞬間的な行動は決して眼差しを全身で感じ取っても臆する事は無く、強烈な輝きで照らす青色の魔方阵が浮上する。

なのはとユーノ、デンドは状況処理に対しての対応が出来ず啞然と彼等の光景を傍観し続けていた、アルフは即座に地面へ降下し着地を図ればフェイトの元へと駆け寄っていく。

「プレシアからの命令だ、すぐに退却しろ。」

「ちっ………見ているのか。」

「か、母さんから……わかりました。——ジュエルシード………シリアル？！」

彼女の不気味に彩られた金色の魔方陣が姿を現せばデバイスの長斧部分をドラゴンボールへと向ける、視界内で繰り出される背景を紺色の瞳で捉えるクロノは魔法を唱えた。

魔力で構成された拘束用の青色の縄が出現すると人型の機械、フェイトとアルフ、抵抗を続ける一味に彼の唱えた魔法は縛り付けるが如く拘束具^{バインド}が迫る。

「ジャマをするな……。」

「ぐ………っ！！」

だが拘束具の出現、その瞬間に人型の機械は高速を飛躍した速度を誇る気弾を一発——クロノ目掛けて発射すれば彼は防御魔法を唱える暇も無く空中へと浮上すると同時に命中を避けた。

気弾は爆発を生み出し黒煙を舞い上がりせ周辺を飲み込んでいく風景は人型の機械がその場に居合わせている人間以上、遥かに優れた能力を持っている証でもある。付近にたたずんでいたのはは強烈な暴風を踏み切って耐え凌ぐ。

黒煙から脱出し、上空へと身を置くと同時にタイミングを見計らうように真っ白な肌を持つ人型の機械は突進を仕掛け、頭突きによる超高速打撃がクロノの額に衝突を引き起こす。

「うわああああ……っっ!!」

「あれは…まさか人造人間!？」

額から血液が流れ落ちる中で更なる追撃がクロノに次々と襲い掛かる、腹部へ胸部へ蹴りと拳が連撃となつて全身を蝕んでいく。放置し続ければクロノと名乗る少年は確実に死に至る、だがなのは達は圧倒的な速度を前に視界に捉えられる状況下ではなく、故に対処が彼等の中では存在していないのだ。

「人造人間だつて……!？」

「はい。帽子に赤いリボンのマークがあるので、それに気も感じられないので間違いないかと…。」

「デ、デンデくんそうじゃなくて……人造人間ってなに…?」

声を上げるデンデに対して理解を示し切れないなのはの表情は戸惑いを露にしており、それはデンデも同様の表情であった。

今の彼女が戦闘を行うにしても大樹によるダメージと魔力オーラによる体力の削りが目立つのだ、更に相手が彼女とのレベルが違いす

ぎた。

「あ、すみません！ 人造人間と言うのは悟空さ… 悟飯さんのお父さんに復讐する為にドクター・ゲロが作った戦闘兵器です。でも、どうしてこんな所に…」

「悟飯くんの、お父さん……。」

「ぐ、ああ……ッ！」

体力の限界は間近だと言わんばかりに血液を口内から吐き出すクロノの姿になのは青ざめた表情と共に視線を向ける。

彼の体力は尽き果て、体制を支える事も叶わないクロノは上空から降下し地面へと全身を叩き付けそうになった途端にユーノは自ら魔法を唱え出す。

地面に衝撃を和らげる魔方陣が配置され、彼は包み込まれるような錯覚を覚えながら地面に仰向けで倒れ込んでしまう。

「今度はお前のエネルギーをいただく。」

「あああ… ああ……。」

襟を強引に掴み取る人型の機械は正に恐怖の対象であり、彼のエネルギーを奪い取っていく。なのはとユーノ、デンデは相手の強さを見抜いた上でどうする事も出来ず歯がゆさだけが残っていた。

しかし突如、モニター画面が出現すると同時に老爺が映し出され怒りを露にした言動が流れ出る。

『なにをやっている19号。魔力吸収の実験は成功だ、そんな雑魚のエネルギーなど吸収しておらんで至急戻って来い！』

「…わかりました。」

「フェイト、早く撤退しよう…。」

アルフは弱々しく投げ掛ける言葉にフェイトは小さく頷くだけであった、封印と叫んだ言葉が合図となり周辺を巻き込む金色の閃光と鳴り響く轟音が悪戯に圧し掛かったのだ。

「……封印——ッ！！！」

雷鳴が木霊する公園内では相手の目を欺く強烈な発光体がフェイトを中心として発生する。直視すれば失明は免れない、故にユーノとなのはは目を瞑った。

数秒後、彼女達が目を開けた光景の先にはドラゴンボールと金髪の幼い少女と共に姿は見えなくなっていたのだ。

「いない……あ、デンドくん！この人を助けてあげて……！」

「はい！」

デンドは両手に収束し続ける光によって人型の機械から受けた怪我を完治させてしまう、それはあまりにも一瞬の出来事でありクロノは目を開けて呻き声を漏らす。

「う、く……。」「

「ありがとう、デンドくん！あ、大丈夫ですか……？」

「あ、ああ……僕は……。」「

生気の宿った紺色の瞳になのはが入り込む、困惑や戸惑いを覚えながらクロノは周辺へと視線を向けて難なく立ち上がれば己の体が怪我一つも負っていない事に信じられない表情を見せていた。

前まで意識を失っていた事でその間の記憶が存在していない。クロノはその間の出来事、つまり怪我が完治した理由を疑問を抱いた途端に……凜々しさが混ざりこんだ女性の声が響いたのだ。

『クロノ、一体何があったの……！！』

「リンディ提督……！？すみません、ドラゴンボールと黒い魔法

使いの方を逃がしてしまいました…。」

「…ユーノくん、誰と話しているのかな？」

「わからない……でも指揮官みたいな役職の人だと思う。」

ユーノは思考する、恐らくクロノと名乗る少年はこの指揮官の命令通りに実行する執行者的な立場である事。要するに彼女の方が立場的にはこの少年より上だろう。

容姿は緑色の髪に青色の服を着こなした女性、外見からも少年より上でありなのはとユーノもまた、年齢は上に当たる位置だろう。成人のように見受けられるのだ。

『そう…怪我はなさそうね、とりあえずその子達をこっちに連れてきて頂戴。』

「わかりました……そういう事だ、君達からは事情説明とアースラにまで来てもらう。」

「は、はい…わかりました！」

「アースラ……。」

こうして彼女達はクロノと名乗る少年と共に、リンディ提督が待っているかと思われるアースラへと足を踏み入れる事になるのであった……。

第22話 秘めたパワーと管理局（後編）（後書き）

フェイト「これで残ったドラゴンボールは後一つ…。」

アルフ「でも、それを手に入れても合計六個。遅かれ早かれあのガキんちょとは決着をつけなきゃねえ。」

デンド「人造人間まで現れるなんて…早く悟飯さんに知らせなきゃ。」

すずか「アリサちゃん、大丈夫かなあ」

第23話 二人の金色の少女

——幾つもの数え切れない世界が共同する組織が存在していた。名は「時空管理局」と名称されており、数多の世界における警察的な役割を持っている。

同時に裁判所としての機能も持ち合わせており、他にも異世界の文化管理や災害時の救助など様々な役割を持つ重要な機関の一つなのだ。

時空管理局が所有する艦船の中にアースラと呼ばれる次元空間航行艦船は艦長リンディ・ハラウン提督を始めとした多くの若い女性スタッフで構成されていた。

色素の濃い紺色の髪を持つ少年は執務管という立場であり、今回の任務で失敗に終わった彼の表情は険しく曇りが出来上がっていたのだ。

「…まあ、何時までもその格好だと窮屈だろう。バリアジャケットとデバイスは解除しても平気だよ。」

「っと、そっか…そうですね、それじゃあ……。」

真っ白の壁と床で彩られた廊下になのは、ユーノ、デンデ——更にクロノが其処に居た。事情聴取は特定の場所で行う事になっており、その場所へ向けて足を進めていた所なのだ。

桜色の発光体が彼女を覆い隠し、純白の衣装が解除され普段の制服姿へと元に戻れば発光体は溶けるように姿を消す…赤色の宝石が備え付けられた杖も円形の宝石へと変貌する。

「君も元の姿に戻っていいんじゃないか？」

「あ、そうですね…ずっとこの姿でいたので忘れてました。」

「……………えっ？」

彼等との会話が理解出来ず、なのはは目を丸くさせながら首を捻つて疑問を投げた。その問いに答えるようにユーノの周辺に収束する光が彼を覆い隠す。

同時、跳ねるようになのはの束ねた茶髪の髪が動いた時にはユーノは動物から人間時の姿へと変化していたのだ。なのははその人間を目の当たりにして思考を繰り返すのだが――。

「ふう……………なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな…つて、なのは？」

「え、え、え……………ふええええええ……………つつ…!!？」

「なにを驚いてるのですか…？」

「だ、ただってユーノくん、ユーノくんは…!!！」

ユーノ自身、すっかり彼女に本来の姿を目視させるのを忘れていたのだ。動揺を隠し切れず混乱を招くなのはにユーノはわたたと騒いでいた。

「なるほど、そうでしたか。恐らくユーノさんは魔法が何かで姿を変えていたのでしょうか。」

事情を説明してなのはを落ち着かせた後、リンティ提督が待つ部屋へとクロノを含めた四人は刃足を踏み入れる事となる…。

「官庁、来てもらいました。」

「……？」

彼女達が足を踏み入れた場所は、何故か和風的な寛ぎ空間だった。先程までの雰囲気とのギャップにユーノとなのは戸惑いを露にした表情を浮かべつつ。

奥には緑色の髪を持つ女性が一人。彼女と自身の視線が交われば穏やかな微笑を浮かべた。

「お疲れ様。まあ…皆さんどうぞどうぞ、楽にして？」

なのはとユーノ、そしてデンデは決して善良的な意味で歓迎されるべき立場ではない、それは本人達にも自覚がある。故に女性の言葉

は一瞬耳を疑った。

「はじめまして、この船の艦長を務めるリンディ・ハラウンよ。
あなた達の名前は？」

「えっ、と……高町なのはって言います。」

「僕はユーノ・スクライアです。」

「デンドです。よろしくお願いします…。」

なのはは戸惑い気味に自己紹介をし、ユーノは落ち着きを見せた毅然とした態度で、デンドは緊張感を胸に抱えながらなのはと近い態度。

反応は様々だがリンディは決して微笑を崩したりは背に威圧感を浴びせる事も無く話を続ける為にも口を再び開く。

「なのはさんに、ユーノさんにデンドさんね…早速だけど、貴方達にお話を聞かせてほしいの。」

静かな声でありながら凜とした芯を持つ言葉。金髪の少女フェイトとなのはとの戦闘について、緑色の長髪を持つ彼女はその事についての質問を投げかけた。

「…わかりました、その代わりこちらからも話があります。」

この場で一番浮いているであろうデンドは女性と同じように口を開く。落ち着いた雰囲気だからこそ緊張感が生まれる中、事情聴取が始まるうとしていた。

その頃、未だに戻らない悟飯の安否を心配し続けるアリサは遂にバッグを取り出して荷物を詰め始めており、その作業は止まる事は無く続けられている。

時計、お金、包帯、食べ物、まるで旅にでも出掛けるようにバッグへと詰め込み続けており、黙々と作業を次から次へと休める事はなく行われていた。

「…これに、これ。あとこれも……それからこれもいるわね。」

「お、おい嬢ちゃん…じゃなくてアリサお嬢様。本当に行くつもりなのか？」

「当たり前じゃない！言っておくけど、アタシが出て行ったことは皆には内緒よ。ハイヤードラゴンも！」

隣のハイヤードラゴンにも釘を刺すアリサ、悟飯が旅立ってから数日が経過している。待ち続ける事を決意したアリサだが悟飯の安否

について徐々に不安を抱きつつあった。

目まぐるしく流れる悟飯との思い出を映像として自身の脳裏に流れ出す事で感情を抑え込もうとアリサは試みたが——この日を最後に、我慢の限界がやってきたのだ。

「いや、内緒って言われてもなあ……もし、あの鮫島のおっさんにバレたら……やっぱやめねえか？」

その発言はアリサの火に油を注ぐ、ギロリと眼光はハガネへと向けられる。

「花瓶のこと……バラされたいわけ？」

「いいっ！？　なんでその事を……」

「アタシが見てないとも思ってたの？　アンタが花瓶を割って隠してた所ちゃんと見てたんだから！」

びしり、指をさした方向は間違いなくハガネ。予想外の言葉に慌て出し、視線を泳がせては言い返す言葉を模索する事に時間を掛ける彼の姿は明らかな「凶星」だろう。

「うつ……はあゝわかったよ。俺も小僧の事は心配だからな。けど、ムリはするんじゃないぞ？」

「……………うん。」

仕方なくハガネは承諾、これ以上言い返す言葉も無いとばかりに言葉を投稿かければ小声による返事が返ってくる。晴れない気持ちに複雑な心境を作り上げてアリサの表情には陰が残りつつ。

大きな荷物を背負い、窓の方角へと歩みを進めていくアリサ。悟飯の思い出が再び映像となつて蘇る中でベランダへと踏み入れていくそう、彼女は玄関から外に出るのではなく――。

「行くわよ、ハイヤードラゴン！」

「クアッ、クアーツ！！」

玄関から出れば確実に誰かに見つかる、故にハイヤードラゴンの背に乗る事で窓から外へ出るという戦法を取る事にしたのだ。

宙に浮かぶハイヤードラゴンの硬い皮膚の下に腰掛ければ必然的にアリサも空中を浮く事となる。恐怖心を押さえ付けながらもアリサはハイヤードラゴンにしっかりと落下しないように両手を回して掴まりつつ。

「気をつけるよー！ーっ！！！」

アリサとハイヤードラゴンは共に悟飯を連れ戻す為に大空へと飛翔

する、ハガネの叫び声が宙へと木霊した頃には、二人の姿はハガネの肉眼では目視する事ができない程の距離が既に空いていた。

「悟飯……なんで帰ってこないの……。」

「クアッ、クアーツ……。」

海の上を駆け抜ける二人、周辺には海鳥が飛行していたがアリサ達の姿を目視した瞬間、警戒するように離れていく。それはアリサに反応しての行動でもあるがハイヤードラゴンに対しての反応が強い。不安な言葉と励ますように鳴くハイヤードラゴン。その言葉が余計にアリサの心を揺さぶる結果となって腕の力が更に増していく。

「ハイヤードラゴン、悟飯は絶対無事……よね？」

「クアッ、クアックアッ！」

迷う事無い力強い声が響いた、それは曇りきつた空に微かに入り込んだ太陽の光。決して晴れる事は無いが僅かに入る光は今のアリサにとって心強い物である事に変わりはない

「ありがとう…ハイヤードラゴン。——あれ……？」

「クアーツ？」

ハイヤードラゴンはアリサの言う通り、その場で停止を掛ければ疑問に満ちた声を上げる。だがアリサはハイヤードラゴンに構う事は無く海の方面へと視線を投げていた。

「まさか、あれって…ハイヤードラゴン！ちょっと海の方に降りて！」

「クアーツ、クアツ！」

そう、彼女が目視したのはオレンジ色の光を放つ海。一箇所だけ不自然な煌きを放っており、その光を見つけ出すのに苦労はしないだろう。

更にその光はアリサとハイヤードラゴンにとって見覚えのある物なのだ。同時に流れ出す悪夢のような映像、不吉な予兆を感じさせる光に近付いていく。

「やっぱり、ドラゴンボール……なんでこんな所に……」

「クアツ！クアツクアツ！」

「どうしたの、ハイヤー……。…っ!?」

騒ぎ立てるハイヤードラゴンに目を向けるまでもなく、その現象は唐突に起きた。オレンジ色の光を放つ球体が海から浮かび上がるように出現したのだ。

それは紛れも無いドラゴンボールであり、まるでアリサとハイヤードラゴンに反応するように出現した球体に二人は驚きを隠しきれない。

アリサは恐る恐る浮上する球体を両手で掴み取る。眩い光を放つそれは彼女の映像に流れ込む球体と同一の物であった。

「——それを渡して。」

「……フェイト……？」

「クアーツ……！？」

冷淡に響く聞き覚えのある声、背後から降り注いだ声の主は無表情を浮かべてアリサを見下ろしてた。上空に位置するは漆黒の衣装に身を包む金色の髪を持つ少女、フェイト——それを目視するアリサは動揺を露にする。

「なんでアンタ達が此处に……それに悟飯は！悟飯は今何処にいるのよ……！」

「……ドラゴンボールを渡せば、悟飯の事を答える。」

アリサの動揺は無理も無い、悟飯と共に向かったフェイトとアルフが今日の前に存在しているのだから。事情を知らないアリサは戸惑いと困惑、あらゆる感情が複雑に混ざりこんでいた。

「絶対にイヤ……これを使って何か企んでるなら余計にイヤ！」

「……なら、力づくで奪うまで。」

片手に持つ漆黒に染め上げられた長斧をアリサに向けるフェイト、それは宣戦布告。戦う事が出来ないアリサにとってこの場は圧倒的に不利と呼べるだろう。

「クアックアッー！！」

「きゃっ、ハイヤードラゴン……！？」

「速い……くっ……！！」

翼を羽ばたかせ瞬時に飛翔するハイヤードラゴン、フェイトから逃れる為に彼女から距離を作り上げていく。それは圧倒的な速度でフェイトの姿を目視する事すら困難になる程だ。

空中を駆け抜ける中でアリサは後ろを振り向き、微かに視界に入り込んでくるフェイトを目にすれば更にハイヤードラゴンの速度は上昇していく、戦闘訓練を頻繁に受けているフェイトでも追いつく事は難しい。

「ハイヤードラゴン、そのまま逃げ切るわよ！」

「クアッッ!!」

遙か上空へと雲の中に逃げ込むように自身の姿は霞んでいく、やがて雲に覆われる事でフェイトの視点では目視する事は出来なくなっていた。

だがフェイトは速度を落とす事は無く更なる上昇の果てに灰色の雲へと突き進む。だが彼女の視界にアリサとハイヤードラゴンは存在していない。

「絶対に、見つける……!!」

彼女に諦めるという選択肢は存在しないのだ、脳内には悟飯の事や母親の顔を思い浮かべながらターゲットであるアリサとハイヤードラゴンを闇雲に探し続ける。

しかしフェイトとハイヤードラゴンには圧倒的な速度の違いが存在する限り彼女はアリサを見つけ出す事は困難極まりないだろう――
――。

「なんとか逃げられたようね……。」

「クアッ、クアッ……!」

既にアリサとハイヤードラゴンはフェイトから逃げ切れたと断言し

ていい程の距離があつた、仮にフェイトに見つけられてもハイヤードラゴンの速度を考えれば再び逃げる事は出来る。

「それにしてもすごい速さだったわよハイヤードラゴン！」

「クア~~~~ッ」

「さあつて、早く悟飯をさがさな……。」

だが思考は完全停止した、凍り付いた世界の中で視界に入り込んだのは宙に浮かぶラフな格好をした男。ハイヤードラゴンとアリサは呆然とその男を目撃すれば、男からも見据えられてしまう。

「そのドラゴンボールを渡せ。」

—— 人造人間13号。アリサ達が対面した相手は悟飯の敵。その敵が今、アリサの目の前で威圧的な眼光と共に居合わせている。更に出現する人造人間16号、14号、15号。周辺には14号と15号。最後に16号が後ろへと。まるで人造人間達はアリサとハイヤードラゴンを取り囲むようにして出現していたのだ。

「な、何よアンタ達……！まさかフェイトの仲間……！？」

「…違う。オレ達はドクター・ゲロ様に造られた人造人間だ。」

「人造人間……？」

16号は静かな口調で話す。後にアリサは理解する、今自分を取り
 囲んでいる彼等は全て敵。威圧感と殺気を乱暴に発する彼等その物、
 存在自体がこの世界にとって異端であることに。

「ドラゴンボールヲワタセ……。」

「アンタ達には絶対渡さないわよ……！！」

拒否の意思を明確に現せば再び逃走を図ろうと思考した直後――

「きやあああああつ……！」

「クアアアアアーッ!!!」

殺意の砲弾がハイヤードドラゴンに直撃し、轟音と共に爆発を引き起こしてバランスを崩したハイヤードドラゴンはアリサと共に海へと急速に落下していく。

「渡さなければ殺してから奪うまでだ。」

13号が放ったであろう攻撃は無慈悲な光景を作り上げるのに充分過ぎる、更に発射される砲弾は落下していくアリサ達に追い討ちを掛けていく。

しかし、空を駆け抜ける一人の少女がアリサとハイヤードラゴンを掴み取ると同時に間一髪の所で砲弾を避け切り、それは虚しく海の中で爆破した。

「ぐつ、う…フェイト…？」

「人造人間……どうして此处に……！」

ハイヤードラゴンが庇ってくれた上での想像を絶する全身の激痛がアリサを襲っていた、朧気な視界に写る綺麗な金糸に思わず見惚れてしまう。

彼女達はフェイトによって命を助けられたと言ってもいい。——
人造人間達はただ冷酷な視線を三人に浴びせていたのだった。

第23話 二人の金色の少女（後書き）

すずか「また前回の投稿から時間が掛かったね…。」

なのは「前にも言ったと思うけど、更新が大幅に遅れてごめんなさい……。」「

デンデ「物語はいよいよ終盤に入ります。」「

アリサ「そしてこれからはアタシの出番も増えてくるわ。楽しみにしてなさい!」「

フェイト「……母さんは、一体何を考えているんだろう。」「

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4245o/>

異世界に迷い込んだ超戦士

2011年5月19日03時09分発行